

「では中尉を陥れるとて土龍達が書いたのではないのですか。」とローランドは好奇心を以つてたづねた。

「さうだ。前の考へは誤つて居つた。」

カリングは非常に心配さうな顔をして頭を垂れながら部屋の中を幾度もあちこち歩いた。

突然彼の顔は晴れやかになつた。いつも謎を解いた時にやるやうに彼は小聲で口笛を吹き始めた。

「分つた。」と彼は自分だけで呟いた。「分つた。分つた。ローランド君、さあ行かう。」と彼は大聲でローランドに向つて言つた。

第十八章 あとを追うて

フディングに行く前に二人は一先づカリングの家に歸つた。すると仕事服を着た二人の十五六位の少年が待つてゐて小さい名刺に書いた報告を手渡した。

カリングはそれを讀んで満足さうにうなづいて言つた。

「よくやつて呉れた。四人とも充分用心して見張つてゐて呉れ。僕はこれから二三時間留守になるから、この次は四時過ぎに報告して呉れ、ばよい。」

「どういふ子供達ですか。」と再び自動車を走らせながらローランドはたづねた。

「あれは僕の私立の、さうだねえ、一種のボーイスカウトだよ。前途有望な少年で、いづれも立派な

探偵になる者ばかりだ。非常に敏捷で何よりも動作が機敏だよ。」

「この土龍事件にお使ひですか。」

「さうだ。あの土龍の穴のあるキルカ街の家を見張らせてあるのだ。僕がインフェルノに行く前に出来るだけ様子を詳しく知つておきたいからねえ。」

フディングへ行くときカリングは先づ停車場から搜索をはじめた。それが幸にも非常に都合だつた。彼は停車場の事務員達と一人の車掌とにたづねたところ、彼等は何れもカリングの職業を知つて種々の報告をして呉れた。

カリングの話によつて彼等殊に車掌はフォン・ヘーデン大佐が、屢々普通列車でやつて来る事を知つた。無論その名は知らなかつたが、大佐はこの市街に遠縁の者があるのでたづねるのだと言つた。その縁者と言ふのはリーベンと言ふ未亡人で半年ばかり前から世間と餘り交際をせずに住まつてゐたのである。

車掌の話によると大佐は昨日三時少し前に中央停車場へ來た。その時大佐は自働電話から出て非常に苦い顔をしてゐた。多分リーベン夫人に電話をかけて通じなかつたのであらう。大佐は車掌に向つてフディングへの電話は切れても居るのか、交換手がどうしても出ないと語つた。

その車掌はフディングに家があつて何もかも町の事情をよく知つてゐたので、若し大佐がリーベン夫人へ電話をかけたのなら返答のないのも無理はないと思つた。といふのはリーベン夫人は十時四

十四分の汽車でストックホルムへ行つた切りまだ歸つて來ないやうであつたからである。

この事を大佐に告げると、大佐は非常に驚いたらしかつた。暫らく過ぎてから大佐は停車場を去つて街の方へ行つた。大佐がその後フディングへ行つたかどうかは分らなかつたが、多分行かないらしく少くも三時十五分の汽車では行かなかつたと車掌は語つた。

それからカリングはリーベン夫人の様子を詳しく聞いた。彼女は金髪で、青い大きい眼の美人であつて、普通の人よりも脊が高く細作りで、三十位の年恰好であつた。確かに瑞典人ではなく何語だかは知らないが外國語を使つた。

丁度勤務時間の終つた事務員はお望みならば夫人の家を教へませうと言つたので、二人は喜んで出懸けた。

家は何處もかも戸が閉てられてあつて見たところ誰も住んでゐないやうであつた。隣の人にカリングがたづねて見ると、リーベン夫人は女中と一緒に澤山の荷物を持つて、今朝早くストックホルムへ行つたといふことであつた。

カリングは、戸が閉てられてもかまはぬから一寸家の中を見ようかとも思つたが、よく考へて止めることにした。人の眼にもつくことであるし、リーベン夫人は恐らく正體を分らせるやうな物を残しては置くまいと思つたからである。

隣の女達は美しい高ぶつた夫人を眼の下の癩のやうに思つてゐたので何か夫人が、怪しいことでも

したのかと思つて種々なことをカリングに話して聞かせた。

彼女達の話すところによると夫人は餘程前から怪しい女であると評判されてゐた。大佐は確かに彼女を戀してゐて彼女を親類の者だと言ひ觸らしてゐたが、大佐の外に今一人若い男が度々自動車自分で運轉して來て彼女の許を訪ねた。時々リーベン夫人はその男と共に自動車に乗つて深夜に至るまで、歸つて來なかつた。何時頃家に歸つて來るのか誰も知る者はなかつた。

その男の風采に關して人々の告げるところは少しく區々であつた。と言ふのはその男がいつも大きな運轉手用の眼鏡を掛けてゐるからであつて、従つて充分顔付を見ることが出来ないからであつた。然し人々の言ふことを綜合してみると、その男は下男のジョンに間違ひなかつた。

その他なほ探偵の聞き出したところによると、昨日リーベン夫人が街へ行つた留守に四人の男が女中を訪ねて來た。その中三人は二時少し前に來てあとの一人は五時頃にやつて來た。そして夕方八時に四人とも自動車で歸つて行つた。その男達は日用服を着た労働者のやうに見えたが、それ以上のことは分らなかつた。

リーベン夫人が昨夜いつ頃歸つて來たかと言ふことは誰も知らなかつた。然し兎に角今朝早く家にゐたことは確かであつて荷物を盡く纏めていつもの自動車ではなしに貸自動車で何處かへ去つたのである。

カリングはそれ等の女達に禮を言つて中央電話局へ廻つた。そこで彼は昨日から今日にかけて度々

リーベン夫人に電話がかゝつて来たが、夫人は一度も出なかつた旨を聞せて貰つた。電話を掛けた人の中特に一人の男だけは、いつも夫人にストックホルムから電話をかける男であると分つた。カリングが再び自動車に乗つて町の方に歸る途中、彼は手帳を出して彼がフディングで聞いた数々のことを今一度読み返して見た。彼の顔には満足な表情が浮んだ。

「實に都合がよかつた。」と彼は呟いた。「これから一つ大佐殿を訪問して見よう。」

カリングは自動車を大佐の市街の事務所の前に止めさせた。

大佐は非常に難しい顔をしてゐた。彼は昨晚よりも一層暗い顔をしてゐた。カリングは何かまた新しい事件が起つてその爲に大佐が難しい顔をして居るのだと思つた。

「どうなさいましたか。眞逆三べん目の盗難に會はれたのでは御座いますまい。」

「さうですとも。書類は此處に安全に保護されてゐて、もはやわしは責任がありません。けれどわしは今悪魔にでもとりつかれてゐるやうな氣がします。」

「どうしてですか。」

「と言ふのはですなあ。第一わしはトルハルト中尉に何時までも付きまとはれて居るやうです。それから、もう一つわしは今日新事實を發見したのです。昨日盗まれた古い方の書類の中には、機密書類と同じやうに大切に居たものがあつたのですよ。」

「それは弱りましたねえ。けれどもあなたはあの書類を随分亂暴になさつていらつしやつて、全く何

の價値もないとおつしやつてゐたではありませんか。さもなくば僕もあのやうに取換へるやうなことはしなかつたのです。」

「それは無論分つて居ります。」と大佐は意外に丁寧な言葉で言つた。「わしは大切な書類が這入つて居るといふことをすつかり忘れてゐたのです。」

「けれど盗まれた書類が歸つて來まいものでもありません。實は今晩間諜達を一網打盡にする心算なのです。」とカリングは自信があるらしく言つた。「可成り巧い具合に計畫した心算ですから、それまでまあ待つて下さい。」

大佐はもどかしさうに口の中でぶつくと言つた。彼は相變らず不安さうな様子をしてゐた。

「僕は今まで、探偵仕事をして來ましたよ。」とカリングは言葉を續けた。「そして種々の事實や證據を集めて來ました。特に下男の殺されたことが分つたやうに思ひます。殺した者は巧く死骸を隠しましたが、僕は見つけるまでは手を引きません。然しさうするにはこのジョンの素性をよく知らなければなりません。ジョンの身許證明書は見つかりましたか。」

「搜して居る時間があるものですか。」

「成程慾が深過ぎるかも知れませんが、然しあなたはジョンの年齢やその他のことはよく覚えてお

ゐでになるでせう。」

大佐はジョンについて知つてゐるだけのことを喜んで語つて呉れたので、カリングはそれを手帳に記

した。

ジョンは姓をメルクビストと言つて、ストックホルムに生れ、今年三十歳位であつた。家族のことに就いては大佐は何も知らなかつた。

「ジョンの筆蹟はお持ちになりませんか。なんでもいいです。二三行書いたものであれば結構です。」とカリングはたづねた。

大佐は暫らく考へてゐたがやがて紙入れを取出した。

「こんなものでもよろしければ。」と大佐は言つた。「いつも給料をやる時に受取を書かせるのです。かう言つて彼は紙差から受取書取出してカリングに渡した。

「ジョン・エリック・メルクビストですか。」と探偵は讀上げた。「名前の外に何も書かないのですか。」文句もみんな自分で書いたのですよ。」

カリングはポケットから二本の匿名の手紙を取出した。一本は即ちフィッポンと書いた手紙、今一本は「土龍」と書いて彼に宛てられた手紙である。彼は長い間手蹟を比べ合せてゐた。

「この筆蹟は昨日の靴跡のやうに立派な手がかりになりました。」と彼は最後に言つた。

「と言つてもまさかジョンがその手紙を書いたのではありますまい。」と大佐がたづねた。

「どうして中々、ジョン君は餘程匿名の手紙を書く稽古をしたに違ひありません。いやもう實に恐しい男です。」

「それは間違ひです。そんな答はありません。」

カリングはたゞ肩をすくめるだけであつた。

「その外に變つたことは御座いませんでしたか。」とカリングはたづねた。

「朝、警察の人が燃えた死體を持つて行きましたよ。」

「そのことは知つて居ります。もう解剖もすみました。それが誰だかと言ふことが分らず又どうして其處へ來たのだといふ事も分りません。」

かう言つて彼は解剖の意外な結果について物語つた。

「一體どうしたと言ふんです。」と大佐はおどろいて叫んだ。「何故死んだ男を火事場へ持つて來たのですか。」

「無論火事で死んだやうに見せかける心算だつたのです。恐らく死體の身許を分らせないやうにする心算もあつたでせう。そしてそれだけは確かに豫定の通りに行つたのです。」

「實に不思議だ。」と大佐は呟いた。

「何もそんなに不思議なことはありませんよ。この事件にはもつと不思議なことが澤山御座います。例へばですなあ。フォン・ヘーデン大佐の舉動の如き、まさにそれです。」

「何。なんですつて？」と大佐は聲を張り上げて怒鳴つた。「はつきり言つて下さいよ。」

「無論言ひます。」とカリングは落着いて答へた。「簡単に言つてしまふ心算ですけれども先づどうい

ふところが僕に不審に思はれたかと言ふことを話しておきませう。決して冗談ではありません。先づあなたが何故に命令に反してまで秘密書類を自宅へ持ち歸られたかといふ理由が知りたいのです。それからも一つ何故あなたはあの電報を見せられなかつたかと言ふことです。」

「だつて誓ひを破ることは出来ないからだと言つたではありませんか。」

カリングは大佐の言葉が聞えないかのやうに言葉を續けた。

「もう一つはあなたの見えすいた嘘です。」

この言葉を聞くなり大佐は海老のやうな眞赤な顔をして立上つた。

「出て行つて呉れ給へ。もう相手になつては居れん。」と大佐は聲を潤して言つた。

「靜かに。」とカリングは脅かすやうに言つた。「よく自制して下さい。いつ何時、あなたを捕縛させるかも知れませんよ。」

「なんの理由で。」と大佐は驚いてたづねた。

「下男殺しで。」とカリングはきつぱり言つて、彼の方に一歩近づいた。

「君は……」と再び大佐は怒鳴らうとしたが、カリングの冷靜なしつかりした聲に遮ぎられた。

「黙つて、黙つて、さもないと後悔しますぞ。先づ僕の言ふことをよくお聞きなさい。先刻僕はあなたが見え透いた嘘をおつしやつたと言つたでせう。そのことから話してかゝります。あなたは昨晩歸宅されてからみんな下男部屋に駈けつけるまで、一歩も外へは出なかつたと言はれるでせう。」

「それがどうしたのです。その通りぢやありませんか。」

「さうですか。然しあなたは昨晩二回厩へ行かれたのです。僕はその證據を持つて居ります。」

大佐は腰を下して灰のやうにその顔を蒼くした。何か言はうとしたが黙つてしまつた。

「二度目は——さうですね、丁度十二時頃、あなたはあの東洋風の祕密室に忍んで来て燃えて居る蠟燭を消されました。僕とローランドとがそれを見て居りました。何故あなたはあんなことをしたのですか。」

大佐はその質問に答へないで、黙つて前方を見つめてゐた。

「そして何故あなたは十時半に下男部屋にゐたことを否定しなされるのですか。この二つの質問に答へて頂かねばなりません。」

大佐は依然として口を噤んでゐた。

「この事件では。」とカリングはしつかりした語調で言葉を續けた。「下男殺しが焦點となつてゐることをあなたも御存じでせう。人が殺されるには相當の理由がなくてはなりません。僕が今まで探偵したところによりますと、ジョンが死んで爲になるのはたつた一人しかありません。それは即ちあなた御自身です。」

カリングは大佐が猛り狂つて來るかと思ひの外、猛り狂ふどころか、大佐はまるで腑の抜けたやうにぼんやりとして腰掛けてゐた。脛に軽い苦笑を浮べて肩をすくめるばかりであつた。

「あなたにはどうしても下男を片付けてしまはなければならぬ差迫つた理由があつたのです。」とカリングは言葉を續けた。「下男はあなたの内證事を何もかも知つてゐました。ですから、いつ何時その秘密を世間に漏らしてあなたを危険に陥れるかも知れません。」

再び大佐の唇に苦笑が浮んだ。

「馬鹿な。馬鹿な。」と彼は嘲るやうに言つた。

「下男が殺された時分、いや、多分殺される直ぐ前のところであなたは下男をたづねられました。」と探偵は大佐の嘲りの言葉に耳を藉さないで言葉を續けた。「それは丁度十時半少し前でした。ジョンはその時居ませんでした。暫らくしてから歸つて来ました。然しあなたは別の人にそこで會はれたのです。即ち丁度その時に一人の女が祕密室から出て来たのです。」

この言葉を聞いて大佐の表情は突然變つた。驚愕に満ちた顔をして彼はカリングを眺めた。

「あなたはそれを見てゐたのですか。」と彼はたづねた。

「あなたの先刻のお言葉を借りて言へば馬鹿なと申すより外ありません。御承知の通り、あなたのお宅へ僕の伺つたのは十一時頃ではありませんか。けれど僕は下男部屋でどんな事があつたかをよく知つて居ります。あなた方三人は其處で烈しい喧嘩をなさいました。而もその喧嘩にはロシア語が使はれて、金髪の美人は涙を流しました。その美人はマリア・リーベン夫人です。」

カリングが射放つたこの最後の矢は正しく的確を貫いた。

大佐は椅子の中に身を縮め、死人のやうに蒼白めた。彼は長い間黙つてゐて恰も世の中のことを何もかも忘れてゐるかのやうであつた。

「マリア。」と彼は遂に小聲で言つた。「マリア……」

かう言つた言葉の中には限りない絶望と苦悶の念が現れてゐたので、カリングは同情に堪へなくなつて大佐の肩に手を置いて言つた。

「僕にしましても、こんなことをおたづねするのは苦しいのです。けれど事情已むを得ないので御座います。」

大佐は身動きもしなかつた。

「僕はもう何もかも知つて居ります。」と探偵は眞面目に言葉を續けた。「僕は今フディンダから歸つて来ました。あの人はもう逃げてしまひました」

「さうです。逃げました。」と大佐は機械的に同じ言葉を繰返した。

「あの人はあなたを欺いたのです。ジョンと同じく間諜だつたのです。二人とも土龍の仲間であることは決して疑ひありません。電報配達夫の風をして、あなたを誘き出すために電報を持つて来たのはあの女です。」

そこで祕書類を盗む計畫が成就したために逃げ出したのです。何處へ逃げて行かうが、かまひません。この國を書類を持つて逃げ出す前に逮捕する手段を講じます。」

安心の太息が大佐の胸の奥から發せられた。

「有難う御座います。」と彼は言つた。「自分で逃げ出したと言ふことは誠に幸です。あの女と關係した一切を僕は忘れるやうに努めませう。何卒あなたもあの女のことをこれからは口にしないやうにして下さい。」

「宜しう御座います。然しその前に僕はその女のことをよく知つておかねばなりません。同じやうな悪計がまた行はれるとすると、再び會ふやうなことがあるかも知れません。ですからあなたの知つておらるゝだけのことを話して聞かせて下さい。」

第十九章 女 間 諜

はじめ大佐はカリングの要求に應じたくはない様子であつた。彼は黙つて坐つたまゝ、過去の追憶に耽つて居た。

然したうとう一切を打明けることに決心して、うつむいたまゝ、太い聲で語り始つた。

それは恰も假想的の第三者に向つて懺悔をしてゐるやうであつた。

「わしが女に會つたのはこの冬リヴィエラで見たのが始まりです。その頃殆ど毎日顔を合せて居りました。わしは長い間言ふに言へぬ淋しさを感じて居つたところでしたので、柔い艶と金髪に心を動かされたのです。そしてお恥かしいことですが五十の年になつて、すつかり女の囚になつてしまひ、

氣の違ふほど愛に溺れてしまひました。女の前へ出ると何もかも世間のことは忘れてしまひ、別人のやうになつてしまひました。

すると女はわしをいゝやうに操り始めたのです。わしはまるで人形のやうに手玉に取られて、今から思へばぞつとするやうな有様でした。女の甘い聲にすつかり酔はされてしまつて、女の言ふことならばどんな無理でも聞いてやりました。あの馬小屋の中の東洋風の部屋も女の言ふまゝに造つたのでした。人に知られぬやうに出入りがしたいと言ふものですからそれも聞いてやつて榮耀榮華を盡させてやりました。女が喜びさへすればどんな事でもしてやらうと思つたのです。そしてたゞ女は自分の美の爲、戀の爲、榮華の爲にのみ心を注いで居るのだと思ひ込んで居りました。

ところが段々と女が賤しい素性の者であると分つて來ました。それがまた有り勝ちのことであると分つても來ました。美しい姿の底に醜い陰影が現れてゐました。然しわしはその缺點さへ愛せずには居れませんでした。理性では女を近づけてはいかぬと思ひつゝも、やはり離れることが出来ませんでした。娘の手前さへなければ夙くの昔に結婚してゐたに違ひありません。然し今はもう萬事終りを告げました。もはや心の平和を再び求めることは出来なくなりました。」

カリングは黙つて大佐の言葉に耳を傾けた。苦悶の中にも人を動かす言葉があつたので、探偵は深く感じ入つた。

「リーベンと言ふのは本名なのですか。」と暫らくの沈黙の後、探偵がたづねた。

「いゝえ。ポーランドの亡命者として本名はリベンスキーと言ひます。」

「リベンスキー。」とカリングは鸚鵡返しに言つて暫らく記憶を辿つてゐるやうであつた。「なんだか聞いたことのあるやうな名です。寫眞をお持ちではありませんか。」

大佐は紙入から一枚の寫眞を取出した。カリングはチラと見ただけで誰であるかを見分けた。

「實に好都合でしたよ。御承知はありますまいがこの女は例のコーベンハーゲンで例のハンペンの率ゐた間諜團で、最も腕利きな女間諜として知られた一人です。のみならずこの女はハンペンと、ストランドフェン街とホルネマン街の角に一軒構へて住んで居りました。ポーランド人ではなくて純粹の露西亞人です。あなたがとも角にも無事に暮して來られたのは幸でした。僕はこれから直ぐにコーベンハーゲンの警察へ電報を打つて彼女の到着次第身體検査をするやうに頼んでおきませう。恐らく毛の色や名前を變へてゐませうけれど、彼方ではよく知つてゐますから直ぐ捕るでせう。若しこの女が書類を持つてゐたのでしたら安心して下さつてよろしい。」

カリングは直様電報を書いて表に自動車で待つてゐたローランドに持たせて郵便局へ走らせた。

「このリーベン夫人が變だなど思はれたのはいつでしたか。」と彼は犬佐にたづねた。

「それは昨日です。電報を寄越しておきながら家に居なかつたので怪しいと思ひました。フディングまでは行かずに此處で會ふかも知れんと思つて市街を歩きました。その間度々電話をかけましたけど返事はありませんでした。僕はどうしていか分りませんでした。丁度二三の親友と會ひましたので

氣をまぎらす爲にその要求に従つて午食を共にしました。その間少しも書類が危険に瀕して居るなどとは思はなかつたのです。

ところが晩方になつて下男の部屋へ行きますと、ジョンが來たのだと思つて女は秘密室から這入つて來ました。そこでわしは何か企みがあるのだなと思ひましたけれど、眞逆秘密書類を盗む計畫などをして居るとは思ひませんでした。

わしはそこで電報を寄越して置きながら留守にして居るとはひどいぢやないかと怒鳴りました。すると女は追跡されて居る爲に命が危くなつたからフディングから抜け出してこの家へ避難して來たのだが、明るい中では人に見られると悪いと思つて出て來なかつたのだと言ひました。

女はその追跡者がロシアの秘密探偵の男だと言つてゐましたけれど、わしはもはや、それを信じません。中にも一人、女が恐れてゐたのは、女の仕こみで間諜となつた『いれめ』と呼ぶ男で、女が口を開きさへすればその男は國事探偵として罰せられねばならぬのだと言つて居りました。然し今から思へばそんな人間のある筈はありません。」

「いやそれはお間違ひです。それ等の男達は正しく存在して居ります。たゞ女に反對どころか却つて女に味方なのです。皆この土籠の一味の者としてフディングに居たのは女の爲ではなくして奴等自身の爲だつたのです。」

あのフディングの家の前には陥穴がし掛けてありました。そこへ落ちたならば容易に出ることは出

来ません。昨日リーベン夫人の女中をたづねたといふ四人の男はつまりあなたを早く家に歸さないやうにする爲に來たのでして、さうしておいて書類をゆつくり盗み出さうとしたのです。何度も言ひます通りあなたは實に運が宜かつたのです。」

「實にどうも。」と大佐は言つた。「なんと言ふ恐しい女でせう。よく考へて見ますと昨日わしに在宅してゐるやうに告げた女の心がよく分ります。わしが日曜でも役所で仕事をしなくてはならぬことを知つてながら頻りにわしにさうして呉れと言ひました。きつと日曜には自分を捕まへに來るからその時、あなたの傍へ逃げて行きたいからと申しました。わしが否と言ひ得ないことも、従つて書類をもつて家に歸することもよく知つてゐたのです。」

再び大佐は暗い氣持をして腰を下したが、やがてまた立上つた。

「それにしても、いつ何處であなたは女と知り合ひになられたのですか。」と大佐はカリングにたづねた。

「さうおきゝになるだらうと思つてゐました。喜んでお話しいたしませう。」

數年前北歐地方で組織された外國の間諜團の本部がコーペンハーゲンに置かれてあると言ふことを聞きました時に、僕はよく確かめる爲に彼地へ出懸けました。巧に變装して僕は二三の間諜達、就中この女と知り合ひになりました。

女は僕が戀して居ると思つて、僕を間諜の仲間に入れようと思いました。二人は何度も内密に會合

しまして、特に或る晩の如き、ルングステッドの浴場旅館へ二人で行きまして、ストランドで食事をしました。それから待合のやうな小さな部屋に這入りました。僕はつとめて女の氣に入るやうに振舞ひまして女の奥の手を出させました。

すると女は愈底を割つて一味の者の名前まで聞せて呉れました。その中には相當の紳士と言はれる瑞典人もありましたが、何れも女の美貌に迷はされたのです。僕は女を自由自在に操ることが出来るやうになりました。

このマリアと言ふ女は決して賢い女ではありません。少くとも間諜と言ふやうな大切な役をする腕を持つては居りません。」

「それであなたはその連中を逮捕してはしまはなかつたのですか。」

「僕が手を下す前に主領ハンベンは風を喰つて逃げてしまひました。誰も僕を怪しいと思はなかつたのですから、僕が脅したわけではありません。或る外の者が餘り急いだためにやり損つたのです。多分本部がデンマークにあると書かれた新聞を見て逃げてしまつたのでせう。」

その話によりますと、マリアはロシアへ去つたと言ふことでした。

さあ、そこでお伺ひしたいのは、あなたとジョンとの關係です。ジョンには何もかも打明けてありましたか。」

「無論さうです。僕達が會つた時分にはジョンは女の下男を勤めて居りました。女は餘程金を持つて

ゐたと見えて、ましてその他にも女中を使つて居りました。そこで女はジョンが非常に氣質のよい男であるから、是非下男として使つてやつて呉れと頼みました。

「さうでしたか。何だかジョンも以前見たことがあるやうに思ひます。僕が今度ジョンに會はなかつたのは残念でした。巧みに質の旗を擧げたまゝ逃げて行つてしまひました。瑞典語も非常に上手ではありませんか。」

「さうです、併しその上にロシア人そつくりのロシア語を話します。」

「あなたは今でもジョンの潔白なことを信じて居られますか。」とカリングはたづねた。

大佐は頭を振つて悲しきうな聲で言つた。

「もうわしはどんな人間も信用しません。」

「何故あなたは昨晚何もかも黙つて居られたのですか。女に嫌疑をかけた上はもう約束を守らなくてよいでせう。」

「さうです。わしは約束を守りましたがあなたに秘密を發見せられた以上は已むを得ません。」

「それではおたづねしますがあの時、秘密室へ來られて蠟燭を消されたのはどういふ譯ですが。あなたには火事の憂ひを知つて居られたのですか。」

「知つてゐました。女は若し追跡者が嗅ぎ出して逃れねばならぬ時は、すべてを跡形なく破壊して行きたいと言ひました。どうしてもあの部屋だけは他の女には持たせたくないと語りました。そこでわ

しもいつもの我儘だと思つてそれを聞いてやることにして兎に角爆彈を据ゑつけることに同意しました。ジョンは内證にわしに申しますのに、仕方がないから言はるゝ通りにしてやりなさい。爆彈には水を入れておきますからと。

そこでわしは無論その言葉を信じて居りましたが、昨晩あゝして別れ際に女が怒つて脅し文句で去りました時、愈女が眞面目に去つたのだと思つて、恐らく出懸けに爆發を仕掛けて行つたのだらうと言ふ考へが段々強まつて來ました。夜中まで待つて居る事はどうしても出来なかつたので部屋に忍び込んで見ると蠟燭の火がついてゐましたからそれを消したのです、それなのに一體どうして火が出たのでせう。」

「いかにも火が出ました。」と探偵は委しいことを避けて言つた。「誰が火をつけたのか僕もぞんじません。」

「ふむ。」と大佐は考へながら言つた。「ジョンではなかつたでせうか。」

「いゝえ。」とカリングはきつぱり答へた。

「ジョンはもうあの時死んでゐました。」

大佐は全身を慄せて言つた。

「いや。わしはすっかりその事を忘れてゐました。もう萬事解決したと思つてゐましたのに。」

「どうしまして、まだく澤山の謎が残つてゐます。」と探偵は眞面目な顔をして言つた。「第一誰が

どういふ動機で下男を殺したかを調べねばなりません。あなたはジョンが間諜だと分つてかつと怒つて殺されたのですか。それともリーベン夫人との關係を知られて居る人間だから、この際除いてしまはうと思はれたのですか。」

「そんな馬鹿なことがあるものですか。」と大佐は聲を潤して叫んだ。「ほんたうにわしが殺したと思つてゐるのですか。」

「實を言へばさうは思つてゐません。けれどこの事件を調べて見ますと、誰でもさういふ考へを抱き易いです。固よりジョンが土龍の一人に殺されたと考へられないことはありません。實際また死體は土龍の穴へ運ばれました。そこで第二に起る謎は土龍の王といふ男は誰であるか、どういふ連中からその一味の者が成立つてゐるかといふことです。」

第三の謎は厩の傍にあつた死體です。それは一體誰であるか、死んでから二日も経つてどうして厩に來たかといふことです。最後に今一つ實際問題が残つて居ます。どうして盗人達の持つて行つた書類を奪ひ返すかといふことです。

これ等の謎がすつかり解けた時に初めて事件が解決されたといふことが出来ます。」

かう言つて彼は心の中で次の言葉を言ひ足した。「その他にトルハルト中尉の昨晩の妙な舉動、不思議な失踪、及びコーベンハーゲンの間諜の本部へ手紙を送つたこと、これだけを解決しなければならぬ。」

彼はこれだけのことを口へ出しては言はなかつた。即ち大佐の、中尉に對する憎惡の念を高めたくなかつたからである。カリングが先刻この家へやつて來た時、大佐は昂奮の餘り、恰も益々怒りを増したかのやうに、あの中尉のトルハルト奴がと叫んだのである。

そこでカリングは何故先刻あんな荒い言葉を使はれたのかとたづねると、

「いや實に恐しい奴です。」と大佐は益々憎惡の念を増して叫んだ。「あんなにわしが言つてさへ近寄つて來たのです。この陰謀事件にまで關係して居るといふことは餘りのことではありませんか。わしは今日電話をかけようと思つたが、奴め何處へ隠れたか居ないぢやありませんか。」

「では中尉がどうかされたのですか。」

「昨日わしの留守中に娘をたづねたのですよ。なんといふ圖々しい奴でせう。」

「それは然し大したことではないぢやありませんか。お二人とも齡が若いし、中尉もお嬢さんに會はないといふ約束はされなかつたでせう。」

「そりやさうです。けれどわしの留守中、娘一人の所へ來るといふのは餘りですよ。」

「だつてあなたの御在での時にわざ／＼來もされませんまい。」とカリングが笑つて言つた。「晝前あれだけ言はれ、ば澤山ですよ。」

「けれど、どうして中尉がお嬢さんを訪ねたことを御存じですか。」

「今朝また匿名の手紙を受取つたのです。」

「また中傷の手紙なんでせう。」とカリングは言った。

「中傷？ ラーニユヒルドが何もかも白状しましたよ。幸に娘は嘘を吐きません。」
大佐はカリングに匿名の手紙を渡した。それには次のやうに書かれあつた。

大佐殿

トルハルト中尉は昨晩八時にあなたの宅へ來られてお嬢さんと睦まじさうに語つて居られました。ところか話半ばでああなたが歸られたので中尉は卑怯にも逃げ出して行きました。それから金庫や他の道具の後でああなた方と隠れん坊をやり、あの偉い探偵さんにまで一ぱい喰はせました。今日はまんまと事をし遂げて會心の笑を漏らして居ることとせう。これからはお嬢さんを眼から放さぬやうにして、決して一人限り家に置かないやうにして下さい。

見てゐた者より

カリングはこの手紙を丁寧ていねいに二回讀んだ。「どうです。」と大佐がたづねた。「金庫の後に隠れたとあるではありませんか。金庫の後に隠れてわし等の眼の前から逃げ出したのは中尉であると明らかには書かれてないけれど、耳よりな話ではありませんか。して見ると奴は土龍の仕事に加擔して居るのでせうか。その位のこととは行き兼ねない男ですよ。」

「それは少し言ひ過ぎでは御座いませんか。」とカリングは心ではトルハルト中尉を怪しいと思ひながら

がらも、大佐をなだめるやうに言った。

「言ひ過ぎですつて。」と大佐は更に聲を強めて言った。「中尉が部屋に隠れて居つたのはこの手紙で愈い確たかになつたではありませんか。」

「それは匿名の手紙……」とカリングが反對しようとしたが、大佐はそれを遮つて言った。

「匿名であらうがあるまいが兎に角確かに違ひありません。あなたは昨夜金庫の後に隠れてゐた人間を知つたとおつしやいましたが、それはトルハルト中尉でしたか。」

カリングは一寸躊躇ちゅうちゆしたがやがて落着いて言った。

「如何にもさうです。」

「實に怪しからん。して見るとあの男はもう泥田へ足を踏み込んだのでせうか、恐しい間諜共と共謀になるとはなんといふ男だらう。併し歌留多遊びをするやうな人間だから驚くこともないが。」

「中尉の昨日の態度はいかにも變へんでした。しかしそれを以て直ちに結論するのは少し早計だと思ひます。どんなことでも兼ねない恐しい敵を中尉は持つて居られます。」

「それは當然でせうよ。敵のあるのに不思議はありません。いつそ、その敵がやつ、けてしまつて呉れ、ばよいのに。」

「まあ、さうおつしやらないで、この手紙は中尉に對するあなたの嫌疑を益々深くしようとして發せられたものです。かういふ手紙には餘り重きを置いてはなりません。」

カリングはその手紙を、今一度読み返した。大佐は益々怒りを強くするばかりであった。

「この手紙は、」とカリングは額に深い皺を寄せて言った。「今まであなたのところへ来た手紙の中で一番變つた一番大切な手掛りです。紙は小さいけれども實に澤山のことを知ることが出来ます。」

「さうですか。」と大佐はすこし嘲るやうに言った。「先刻おつしやつた種々の謎、誰が下男を殺したか、死體はどこから運ばれたかといふやうなこともお分りになつたのでせう。」

カリングはいかにも落着いた笑ひ方をした。彼が大佐を見つめた眼には勝利の色が浮んでゐた。「下男を殺したのは誰であるかといふことだけはいかにも分りました。あなたの嫌疑はもう晴れましたよ。」

「殺したものが分りましたか。」と大佐は驚いて叫んだ。

「分りましたよ。併しその話は一先づ止めませう。時にあなたはお嬢さんを保護する方法を講ぜられましたか。」

「ラーニコヒルドに決して中尉を呼び入れないといふ約束をさせましたよ。娘は一旦約束した以上決して破りません。」

「それは僕もよく存じて居ります。然しそれでは充分ではありません。お嬢さんを當分の間預かつて呉れるやうな御親戚はストックホルムにありませんか。」

「あります。妹が一人あります。けれど……」

「けれどなどとは言つては居られません。どうか僕の言ふ通りにして下さい。お嬢さんを一刻も早く避難させて上げて下さい。その理由は僕にお訊ね下さらないで兎に角僕の言ふ通りにして下さい。」

「中尉はそんな恐しい人間ですか。真正正銘の悪漢ですね。」と大佐は叫んだ。

「まあ、悪漢であるかないかはその中に分ります。今は兎に角僕の言ふことをきいて下さい。お嬢さんが無事に叔母さんの許へ行かれたら一步も外へ出ないやうにして貰つて下さい。少くもこゝ五六日はちつと家の中に居るやうにして貰つて下さい。かういふ場合には出来るだけの用心をしなくてはなりません。これから電話をおかけ下さつて、直ぐ用意なされるやうおつしやつて下さい。ローランドに自動車で迎ひにやりますから。」

大佐が電話をかけるに驚いたことに、女中はお嬢さまが一時間ほど前に自動車でストックホルムの方へお行きになりましたと答へた。そして最後にかう言った。「けれど旦那様、それはよく御承知ではありませんか。先刻旦那様からのお手紙で運轉手がそれを持って自動車で迎ひに参りました。」

「何ッ。わしが——手紙を——書いて——迎ひにやつたつて。」と大佐は吃りながら言った。大佐は受話器をはなして眞蒼な顔をして探偵を見つめた。

「たうとうやられましたな。」とカリングは言った。「又少し手後れになりました。いやもうこの事件には僕は散々手古摺らされます。」

「ひどい奴だ。」と大佐は我を忘れて叫んだ。「白晝に娘を連れ出すなんて聞いたこともない酷い行

方だ。」

カリングは受話器を取り上げて自動車の形や番號、運轉手の顔など、手掛りになりさうなことを女中にたづねた。

「覚えて居るがい。」と大佐は言葉を續けた。「今に後悔するでせうよ。きつと軍隊を止させてしまつて……」

「お嬢さんを中尉が連れ出されたのならばそんなに悲しむ可き事ではありません。」とカリングは憤慨して、彼の言葉を遮つた。「さういふ事は有勝ちの事で、しまひは結婚といふ段取りになります。」

「結婚？」と大佐は無限の怒りをこめて吐き出すやうに言つた。「あんな奴に結婚させるものですか。打殺してやります。」大佐の言葉は愈々度を失つて來た。

そこでカリングはいくら怒つて見たところか、お嬢さんや中尉を取返すことは出来ない、何度も言つて聞かせたので、大佐の怒りは段々靜まつた。

「なんとかしなければならん。」と大佐は言つて中尉の下宿に電話をかけて、自分の名を告げて中尉が何處に居るかをたづねた。

プリムソン夫人は大佐の見暮に魂消てしまつて、はじめはほんとのことは言ふまいと思つたらしかつたが、たうとう中尉が昨日の晩から何處へ行かれたか分からない旨を正直に告げた。大佐は蒼白めた顔を探偵の方に向けて言つた。

「いよくうたがふ餘地はありません。奴は一生を棒にふりながら、娘の一生までも棒にふらせるつもりです。」

大佐はカリングが何か慰めの言葉を發してくれると思つて居ると、探偵は却つて顔を曇らせて一言一言力をこめて言つた。

「それどころかもつと〜悪いことが起つて居るかも知れません。」

第二十章 スペードのキング

フォン・ヘーデン嬢の行方はどうしても分らなかつた。又同様に中尉の在所も皆目知れなかつた。二人は跡形もなく消え去つてしまつたのである。

レオ・カリングは部下の最も腕の秀れた探偵を派遣して、出来るだけ詳しい人相書を教へて探させ見たが、どの巡査に聞いてもフォン・ヘーデン嬢を乗せて行つた自動車を見た者が無かつた。停車場は勿論のこと、隣接地の警察にまで、依頼して探して見たが何の手掛りも得られなかつた。

大佐は非常に落着つかない様子であつた。自分が弱かつたが爲に運命の刑罰に遇つたのだと言つてみたり、かと思ふとトルハルト中尉を口を極めて罵つたりした。

大佐は今日はストックズンドの自宅には歸らないことにして、カリングに誘はれて彼の家に立寄つた。その方が事件の経過を知るに都合が宜かつたからである。

大佐はカリングの行つたことを熱心に研究し、種々のことを訊ねて説明を求めたけれど、カリングはただい、加減の答へをしてゐるばかりであつた。熱心に新聞を見なければ火事に關する短い記事があるばかりで、多分漏電の爲に起つたのだらうと書かれてあつた。下男の殺されたことも死體の發見されたことも書かれてはなかつた。

大佐がこのことをカリングにたづねると、カリングはたゞわざと記事を差止めただけであると物語つた。詳しいことを報道するにはまだ少し早過ぎるのであると説明した。

四時頃に探偵は例のキルコ街を見張らしてある若者達から報告を受取つた。その報告には家の模様

が詳しく書かれてあつて、今日出入したすべての人に就いて書かれてあつた。——

廣い門を這入ると建物で取巻かれた細長い、餘り廣くない庭がある。土龍達のインフェルノのある

部分は、その庭の一番奥の所であるらしかつた。

左右と兩翼には別に怪しいことはないやうである。一方には澤山の小さな住居の外に大きなブリキの工場があり、一方にはたゞ貨物置場があるだけであつた。カリングの手下達は何處もかも歩き廻つたが、兩翼に達する入口はみんな戸が閉てられてあつて、たゞ指物師の工場に通ずる小さな扉があるだけであつた。

そこをたづねた連中は、一時頃に右翼部の閉された扉から出て來た立派な色黒の紳士と、その一時間ばかり後に同じ扉を叩いた老婆とであつて、老婆は中へ這入らされなかつた。彼等はこの二人の人

間を眼星として探偵したのである。

男の方はドロットニング街で自動車を雇つてフレド街の方へ走り去つた。だから何處までも追駆け

て行くことは出来なかつたのである。自動車の番號だけは控へておいた。

老婆の方は、それからキルコ街の最も古い家を訪づれた。それ故彼女の姓名やその他の事情を容易に聞出すことが出來た。名をポーマンと言つて非常に貧乏で、長い間寡婦暮しをしてゐた。數日前に

四十歳になる一人息子が死んだのである。

この報告書を読み終るや否や、カリングは自動車を呼び大佐の質問には答へないで乗り去つた。

一時間ほどしてから再び彼は歸つて來た。まへより幾分かよく打明けて呉れるので、大佐は非常に喜んだ。

カリングは老婆のポーマンに澤山の金をやつて、やつこのことで非常に珍しいことを聞出して來たのである。彼女の息子が死んだ翌日、知らぬ男が訊ねて來て醫學上の實驗をするのだから三四日の間

死骸を貸して呉れないかと頼んだ。自分は醫者だが死骸は受取つた時のまゝ返すからとその男は語つて手附として百クローネの大金を拂ひ、誰にも話さないといふ條件をつけて老婆に交渉した。

老婆はその申出を承諾したが、あとで非常に心配した。土曜日の晩遅く人々が死體を運びに來た時、老婆は何處へ連れて行かれるのか見届ける爲に内證で後からついて行つた。彼女は非常に後悔して死體の運び込まれた家の扉を昨日も今日も度々叩いて見たが誰も開いて呉れるものはなかつた。

「これをどうお考へなさいますか。」と、右の事情を語り終つた時、カリングは大佐にたづねた。

「無論それが燃えた死體でせう。」と大佐は答へた。

「それはさうです。今晚夜中頃に借りた死體を元のまゝにして返す約定ださうです。どうやつて返すか見たいものです。」

「けれど何故死體を厩の傍へ置いたのでせう。」と大佐は考へながら言つた。「つまりジョンが焼け死んだといふ風に見せる爲にさうしたものに違ひありません。」

「それならばジョンの死骸をそのまゝ、其處に置いて来た方が遙かに便利ではありませんか。」

「あゝ分りましたよ。」と大佐は得意さうに言つた。「ジョンは重傷を負つただけでまだ死んでは居ないのです。それでジョンを助けようとしたのです。きつとまだ生きて居るに違ひありません。」

「けれど助かる見込みがある位ならば傷をさせたまゝ、寢臺の上に寝かせておくわけはないぢやありませんか。床の上に溜つてゐたあの澤山の血はどうしても生きてゐられない證據です。いや問題はそんなに簡単に解ける可き性質のものではありません。」

こゝでカリングは會話を打ち切つた。大佐は、殊に氣掛りになつてゐた令嬢の行方不明の問題を話したかつたけれど駄目であつた。令嬢が何處へ行つたかは皆目分らなかつた。刻一刻大佐はあせり出した。探偵が言葉少なにして居るのが、愈彼を焦立たせた。

「お嬢さんは今のところ確かにさしたる危険には陥つて居られないだらうと思ひます。」とカリング

は遂に言つた。「それ以上は申されません。出来るだけ心を落ちつけて辛抱して下さい。今晚中には萬事解決させる心算です。」

グリーンマーとローランドに今晚土龍の穴で行ふ手筈を充分打合せてから、カリングは二人を連れて例の髭の生えた捕虜のところへやつて来た。

どんなにたづねてもその男は名前を言はなかつたので探偵それ以上追窮をしなかつた。探偵は出来るだけその男に親切にしてやつたのでその男もかうして引き止められて居ることを餘り不快にも思つてゐなかつた。殊にカリングが明日は自由にして上げると約束したのでその男は喜んだ。

するとカリングはその場でその男の通りの姿に扮装したので男は非常に驚いて居た。最後にカリングが男に向つて着物を貸して呉れと言ふと男は反抗して言つた。

「嘘を言ひましたね。土龍ではないではありませんか。分りましたよ。あなたは警察の探偵で僕を囚にして仲間を賣らせたのです。」

非常に烈しく抵抗したに拘はらず、彼は着物は脱がされカリングの發明にかゝる逮捕椅子に縛りつけられて、探偵の扮装を啞然として眺めてゐるより外なかつた。探偵はいつもと違つて非常に綿密に扮装を行ひ、細い點にまで、注意を拂つて行つたので、愈出來上つて見るとどちらがどちらだか分からぬ位であつた。

男の持つてゐたカードの束や手帳や黒いマスクをはじめ、スペードの王として申分のないだけの

持物を身につけてカリングは愈々冒険の旅に出懸けたのである。念のために彼は二挺の丸をこめたピストルと、細いけれど丈夫な縄と、二三の手錠とをポケットに入れた。

大佐もついて行きたいと言つたけれど、探偵はきつぱり断つた。そしてこの家に待つて居るやう約束せしめた。

レオ・カリングが髭の生えた男の姿をしてキルコ街の問題の家に来た時、今まで滅多に経験した事のない焦々とした氣持になつた。彼は充分空気を吸ひたい爲に徒歩で出懸けたのであつて、道々彼の考へは當然この事件に關聯して新たに起つた事柄に向けられた。彼は大佐が愚かにも、トルハルト中尉の所爲だと考へてゐる令嬢の誘拐を、當然土龍、正しく言へば土龍の王の所爲であると考へた。

その裏面には果して戀愛事件がからまつて居るのであらうか。或ひはたゞ人質として誘拐したのであらうか。何れにしても先方は勝つたのである。而も彼が若しやと思ひついてそれをさせまいと思つた時にまんまと出抜かれたのである。實に残念でならない。かくて、奴等はいざといふ場合のいはば「切り札」を手ににぎつたことになるではないか。

カリングは今まで人に先を越されて一ぱい喰はされた経験は滅多に無かつた。ところが今度の事件には彼の計畫は度々裏を搔かれてしまつた。どうしてもこゝでもう片を附けなければならぬ。必ずやつてしまはねばならぬ。

彼が低い寒い土龍の庭に足を踏み入れた時には彼は全く冷靜になつてゐた。今や彼の眼の前には危険と冒険とが横はつて居る。數分の後には建物の中へ這入るのである。今は兎や角考へて居る時ではない。

その時その庭の一番突き當りの所の小さな扉へ黒い人影の這入るのが見えた。彼は取あへず顔に黒いマスクを掛けて奥へ進んだ。

彼は一定の叩き方で六回扉を叩いた。すると扉は直ちに開いてマスクを掛けた男が前の方へ身構へた。カリングは男がキラ／＼光るもの、即ちピストルらしいものを持つて居るのを見た。

「誰だ？」と男はたづねた。

「スベードの王。」

「何處へ行く心算だ。」

「地獄。」

「這入りたまへ。」

カリングは中へ歩み込んだ。彼は一先づ安心することが出来た。

捕虜にした男が話して呉れた合言葉や習慣は間違ひがなかつた。即ちこの際最初の試みによつてそれが證明せられたわけである。

薄暗い前室から彼は非常に小さな部屋に這入つた。その部屋は一丈先も見えぬくらゐ眞つ暗にしてあつた。天井も壁も床も黒い布を以て覆はれてあつた。そこに、同じやうにマスクを掛け黒い僧服の

やうなものを着た男が頭巾を被つて立つてゐた。胸にはダイヤの九を付けてゐた。

「カードは？」と彼は命令するやうに言つた。探偵はなんにも言はずに差出すと、先方の男はそれを受取つて簡単に言つた。

「この前は？」

「ハートの九。」

「その前は？」

「スベードの四。」

「それから？」

「ダイヤの一。」

「仕事は何處でする。」

「暗で。」

「主人は誰だ。」

「土龍の王。」

「主人に對しては。」

「絶対服従。」

男は彼方を向いて黒い幕の合せ目を開いた。

「スベードの王が来た。」と男が言つたのでカリングはずつと這入り込んだ。

幕を通つて這入ると、更に一人のマスクをかけた男がゐた。黒い假裝服を肩にかけて左の胸にはスベードの王が附いてゐた。捕虜から聞いてゐたのでカリングは直様頭巾を冠つて手近の戸を開いて先へ進んだ。

その部屋は廊下のやうな細長い部屋であつて、突き當りに矢張り扉が附いてゐた。それを開けてむかうへ行くと穴倉へ行く階段が足許へ現れた。ぼんやりとした光が下から射したので、カリングは思ひ切つてそれを下つた。

下には變つた場面が現れた。探偵は愈いインフェルノへ來たのだなと思つた。地下室は一種の穴であつて、神経質の人には驚く可き印象を與へずにおかなかつた。凸凹した石の壁の出張つた處に髑髏が載せられてあつた。濕つた土から出來てゐる地面には、あちらこちらに髑髏の一部分が散らばつてゐた。

突き當りの壁の近くに黒い布で覆はれた机があつた。その上には一冊の聖書が開かれてあつて、その傍に大きな砂時計が動いてゐた。机の後には脚の長い腰掛けが置かれてあつて、横側の壁にも五個の椅子が並べてあつた。椅子は何れも眞黒であつた。

入口の直ぐ傍の石の壁に添つて大きな細長い袋が置いてあつた。丁度中には人間が這入れる位の大ききであつた。

これだけの事をカリングはたつた一目で見えてしまった。それと同時にその部屋には数人の黒い着物を着てマスクを掛けた男が居るのを見てしまったのである。然し彼ははじめて此處へ来たといふ様子を覺られないやうに努めた。彼は一度も振り向かないでつかくくと机の傍へ歩き寄つた。然しマスクの下で彼はにこりと笑つた。その笑ひを若し其處に居る男達が見たならば定めし面喰つたに違ひない。

この穴倉のやうな、暗い地下室には全體で五人の男がゐた。何れも彼自身のやうな變つた服装をして居た。その中四人は胸に種々違つたカードを掛けてゐたが、あとの一人は腰掛けに坐つて銀色の星をつけてゐた。彼は確かに仲間の首領であつた。

レオ・カリングは習慣に従つて如何にも満足さうに挨拶をした。すると彼は手眞似で腰を掛けるやうに命ぜられた。

彼の直ぐ後から三人の男が這入つて来た。それは彼の這入つて来た時に誰何した男達であつて、彼の兩脇に腰を掛けた。すると議長は樋で机を叩いて純粹の瑞典語で演説を始めた。

議長は簡單に、今日が最後の集會である旨を告げた。緊急な用事が出来たので首領は外國へ旅行することになり、今回の仕事はこれで済んだので今週の報告だけを受取つて最後の報酬を支拂ふ旨を告げた。そして各自は勝手なことをしてよいが、どんなことがあつても誓ひを破つてはならない。若し破る者があればどんなに逃げ隠れても必ず十龍の恐しい復讐に遭はねばならぬことを告げた。

それから人々は机の前に呼び出され順次に書いた報告を差出し、その際一言葉も發しなかつた。それを見たカリングは背中へ氷水を浴せかけられるやうな心持がした。

彼は差出すべき何の報告も持たなかつたのである。捕虜はその事については一語も話さなかつたのである。なほまた例の捕虜がどういふ仕事を言ひつかつて何を報告すべきであつたかさへも知らなかつた。彼の番が来た時、彼はどうしたらよいであらうか。抑々の手始めにふん縛られてしまつては、それこそ、萬事滅茶々々である。

星を附けた男は差出された紙を一々充分に調べた。彼は小聲で同意を表したり、或ひは説明を求めたりした。

この束の中に大佐の盗まれた書類があるであらうか。カリングは眼を皿のやうにして一語々々を聞き漏らすまいとしたが、餘りに小聲であつた爲に聞き取ることは出来なかつた。

すべての男は机から離れる時に一枚または數枚の紙幣を星の男から受取つた。カリングはどの紙幣も百クローネ以上であることを見た。その中の一人は實に千クローネの紙幣を受取つたのである。

愈々スピードの王の番が近づいて来た。呼ばれる順序は這入つて来た順序であるらしくカリングは即ち最後に呼び出されたのである。それがせめてもの慰安であつた。即ち彼はどうしたらいいかといふことを二三分間考へる餘裕があつた、若し彼が何も報告することが無いと言つたら何事が持上るであらうか。

「スベードの王。」

かう彼のカードが呼ばれた時、カリングは極めて冷静になつてゐた。彼の癖として不思議なことに愈のドタン場に近づけば近づくほど、その心はますます／＼冷静に落着いて行くのであつた。彼はゆつくりと机の傍へ歩み寄つて、腰掛けの男に禮をして低い聲で言ひ放つた。

「何もありません。」

「なんにもない。」と男は驚いて叫んだ。「失敗したのぢやあるまいな。」

「失敗しました。」とカリングは落着き拂つて言つた。

「何もかもかい？」

「はあ。」

星の男は顔を擧げた。黒い刺すやうな眼が、マスクの後からスベードの王の替玉に注がれた。カリングはその視線にゑぐられるやうな心持がした。

「君が失敗したのは始めてだ。どうしたのだ。」と相手はたづねた。

その時カリングの想像力は全く停止して、巧い言譯を考へることが出来なかつたので正直なことを答へた。

「病氣でしたよ。」と彼は言つた。

「病氣？」と相手は愈々驚いて言つた。そんな馬鹿なことがあるものか、うつかりしたことが言へぬ

のは分つてゐるだらう。」

「はあ。病氣に違ひありません。」

「病氣の者がどうして來られたのだ。」

「實は口で二人切りでお話したいことがあつたからです。」

星の男は再びゑぐるやうな眼で彼を眺めて、やがて立上つてカリングに眼くばせして傍へ行つて居るやうに命じて大きな聲を言つた。

「諸君、會議はこれでおしまひだ。誰も自由に歸つてよろしい。その前にカードの束と手帳とマスクとをダイヤの九に渡して行つて呉れたまへ。この次に手傳つて貰ひたい時はいつもの方法で新聞に廣告する。知つての通り我々の仕事は國際的の高尙な目的の爲に行はれて居るのだ。だから諸君は喜んで應援して呉れるだらうと思ふ。ではこれでお別れしよう。今回は種々有りがたう。」

カリングはこの言葉が自分だけには言はれたのでないと思つて居ると、果して男は小聲で彼に向つて言つた。

「スベードのキングは一寸残つて呉れたまへ。」

あとの連中は直様、穴を去つて階段を上つた。星の男は彼等の後をついて行つた。

カリングは彼等の聲音が聞えなくなると、忽ち妙なことをした。

即ち彼は例の下男の死體の這入つて居るらしい人間の形をした袋の傍へ忍び寄つてそれを検査する

かのやうにうつむいて縛られた口の直ぐ傍の所の袋の下へ何物かを差し込んだ。

「此處へピストルを入れて置く。」と彼はひとり言のやうに低い聲で言った。

それから彼は再び以前に立つてゐた場所へ戻つた。丁度その時、階段に蹙音がして星の男は別の男を連れて這入つて來た。その男は同じ服装をしてゐたが、別に階級を示す印はつけてゐなかつた。

新たに來た男は机の傍に腰をかけた。星の男も腰を掛けてきつぱりした聲でスピードのキングを招き寄せ訊問を始めた。もう一人の男はその訊問には口を出さなかつたが、時々二人は小聲で話し合つた。カリングは言葉の端からそれがロシア語であると知つた。

「君は神聖な誓ひをしたその同じ部屋に居るのだ。誓ひを破れば殺されることは知つてゐるだらう。」カリングが黙つてお辭儀をすると男は語り續けた。

「君は何もかも失敗したといふが、それは僕等の命令通りをしなかつたことになる。大佐のところで一時的の下男となつただけでも、何かの獲物がありさうなものぢやないか。萬事抜け目なく準備されてゐたのだから、失敗するとはをかしいぢやないか。」

「病氣でしたものだ。」

「昨日ストックズンドへ出懸たけ時は一言も病氣だとは言はなかつたぢやないか。それのみか萬事好都合に運んでゐますと言つたぢやないか。それに何故君は嘘を言ふのか。君は何か新しいことを見つけて來たに違ひない。君は何處までもそれを隠す心算か。」

カリングは答へなかつた。恰も他の事を考へてゐて相手の言ふ事を聞いてゐないかのやうに不思議な穴を眺め廻し、偶然見つけたやうに死體の這入つてゐる袋に眼を止めた。然しその實彼は他の事を考へては居なかつたのである。黒い假裝服の長い袖の蔭で、彼の右の手は自分用のピストルの握りをしつかりと握つてゐた。

「何故君は答へをしないのだ。」と相手は言つた。「あそこに袋があるのがあの中には裏切つた罰で殺された男の死體が這入つて居るのだ。君が僕等を裏切ればその男の通りになるのだ。も一度聞くが君は見つけたことをどこまでも、隠さうとするのか。それとも他人が僕等よりよい條件で君を引つぱつたのか。」

カリングは袋には眼をやらずに相手をびくりとさせるやうな風で答へた。

「さうかも知れませんが。」と彼は自分の地聲でいかにも先方を刺戟するやうな調子で言つた。彼は今まで言ふまでもなく髭の男の聲色を使つてゐたのである。

「なんだつて。君は誓ひを忘れたのか。」と星の男は聲を荒らげて言つた。

探偵はマスクをかけた顔を相手の方に向けて愈々先方を怒らせるやうな調子で言つた。

「忘れたかも知れませんが。覚えて居りたくもありません。」

二人の男は何事かをさゝやき合つた。カリングは再び盜むやうな眼附きを死體の這入つて居る袋に注いだ。

二人の男はその時椅子から立上つて彼の方に歩み寄つた。

「マスクと頭巾を取り給へ。」と星の男は命令した。

探偵は左の手を烈しく動かして二人の男の飛びかゝつて来るのを避けた。二人は彼を物珍しさうに眺め、星の男はロシア語で言つた。

「君の言ふのは間違つてゐる。この男は彼奴だよ。」

「さうです。僕です。伯爵殿。」とカリングは不意に口を出した。

「この野郎。」と星の男は叫んだ。「僕等が誰だか知つてゐるのか。」

「知つてゐますよ。」と探偵は冷静なきつぱりとした聲で言つた。「其處に居らるゝお方が土龍の王様と言つて居る人、あなたは確か執行官です。」

四邊は墓場のやうに靜かになつた。二人は顔を見合せて、恰も大膽不敵の闖入者に飛び掛らうとするかの如く見えた。すると探偵は愈々波瀾を起させたいかのやうにいかにも嘲つた調子で言つた。

「本名が言つて貰ひたければ言つてやらう。君はパウエル・サイゲン伯、君は殺された筈の大佐の下男ジョン・エリック・メルクピストと言ふのだ。」

これを聞いた星の男は矢庭にピストルを取出してカリングの頭に銃口を向けた。

探偵は電光の如く身をかはしたがその時、顔にさつと或る液体がぶつかつた。嘔吐を催ほすやうな不快な思ひがして、眼は燃えるやうに痛く四邊はくるくゝ廻つてゐるやうに思はれた。

言ふまでもなく彼は魔酔劑を投げつけられたのである。併し量が少かつた爲に全然意識を失ふには至らなかつた。

彼が左手で顔を覆ひ右手でピストルを差上げた時、突然脇の方からズドンと音がした。

すると星の男が持つてゐたピストルの形をした魔酔劑注射銃は粉微塵に碎けて、その指からさつと血がほとばしつた。液体は四邊に飛び散つたが、大部分は本人の顔にかゝつて星の男はよろゝとよろめいて赤く染つた手を眼に當てた。

それと同時にピストルの音のした方向からはつきりした露西亞語で、

「手を擧げよ。さもなければ打つぞ。」といふ聲が聞えた。

これを聞くと伯爵と呼ばれた男はヒヤツと驚きの悲鳴を上げ、今一人の男はたちくとして壁に突き當つた。二人は眼をむいて死體の這入つてゐた袋の方を見た。どんな人でもその光景を見れば驚かすには居られなかつた。死體が袋の中から半分ばかり匂ひ出して彼等の方へピストルを向けてゐたからである。而もその死體は殺された下男でもなければ例の雇はれた死骸でもない。それこそ血氣に満ちたトルハルト中尉その人であつた。

「トルハルトさん萬歳。」とカリングが言つた。「矢張り僕は巧く當てましたよ。あなたは伯爵を縛つて下さい。僕は下男を縛りますから。少しでも抵抗したら撃ち殺してかまひません。」

星の男は直ちにねぢ伏せられて手錠をはめられ、ジョンも瞬間に縛られてしまつた。二人を並べ

ておいてカリングは彼等のマスクを取り去つた。果して彼の想像した通りであつた。額の傷は伯爵の身許を知るに充分であり、中尉は下男の顔をよく知つてゐた。

「さて御兩君。先づこれで一段落でせう。」とカリングは言つた。

「貴様は誰だ。」とジョンは怒りに聲を慄はせながら言つた。「スバードのキングは……。」

「さうぢやないよ。」と探偵は遮つて言つた。「もうマスク遊びも止さうよ。僕はレオ・カリングだ。」かう言つて彼は死人のやうに蒼ざめて居る伯爵の傍へ寄つて、ピストルをその顚顚に當てがつて言つた。

「フォン・ヘーデン嬢を何處へ連れて行つたか。命が惜しかつたら早く言へ。」と彼はフランス語でたづねた。

「言ふものか。死んでも言はぬ。」と相手は答へた。

「その必要はありませんよ。」と中尉が言つた。「僕がよく知つてゐます。一寸待つて下さい。連れて來ますから。」かう言つて中尉は立去つた。

すると直ぐカリングは階段に足音のするのを聞いた。それはローランドとグリーンマーであつて、約束通りピストルの音を聞いてやつて來たのである。

「幾人つかまへたかね。」とカリングはたづねた。

「二人もですよ。」とローランドが答へた。

「誰もこの家から出て行つた者はありません。けれどどの入口も見張りがさせてあります。」

この時、下男の唇に嘲笑が浮んだので、カリングは後の男達が庭の方ではない出口から出て行つたのだらうと思つた。

「もういゝよ。」と彼は平氣で言つた。「一番大切な二人を捕へたから。」

彼は二人に捕虜を見張つて居るやうに命じて土龍の部屋を充分検査し、都合によつては中尉の手傳ひをする心算で上へ來た。

第二十一章 中尉の冒険

上へ上るとカリングは如何にも幸福さうなトルハルト中尉に會つた。中尉の傍にはラーニヒルドが連れられてゐた。

「扉を破つて連れ出したのですよ。もうこの人は僕のものです。」と言つた。

カリングも波瀾曲折を経て來た二人の男女を喜ばしさうに見た。

「今僕の言ふ事を聞いて下さいませぬならば、どんな骨折でも致します。」とカリングは言つた。二人は何でも聞きますと誓つた。

「大佐にはお嬢さんの見つかつたことを直様お報しない方が宜しいです。」とカリングは言つた。今大佐は僕の家にお在でになります。これから僕等も歸らうと思ひますが、お嬢さんは裏口から這入つ

ていたゞくことにいたします。お父さんのお心を和げるには、いきなり會はれない方が宜らうと思ひます。

かう言つてカリングは部屋毎に搜索したが誰一人居なかつた。ダイヤの九を初め、他の男は隣の家に通ずる地下道から逃げてしまつたのである。

悲しいことに彼等のすべての秘密はそのまゝ、葬り去られたのである。ダイヤの九が集めたカードや手帳をはじめ、會合の際に渡された報告書や書類も何一つ残つてゐなかつた。

若し大佐の秘密書類がその中にあつたとしたならば、無論手の届かぬところへ行つてしまつたわけである。

カリングが二人のところへ戻つて来た時、彼は心配さうな顔をしてゐた。

「どうしたのです。何か手ばかりがありましたか。」と中尉はたづねた。

カリングは大佐の盗まれた書類をいくら探しても見つからぬ旨を告げた。

「それならば心配に及びませんよ。」と中尉が言つた。僕はあの役に立たぬ書類を一寸見ましたよ。その中に間違つて入れたと見えて大切な書類が一通入れてありました。それを僕は今ポケットに持つて居ます。大佐はきつとどんなことをしても取返したいと思はれるに違ひありません。」

カリングは中尉に手を差出して言つた。

「いやもうあなたのやうな腕の優れた方に手傳つて頂いたことは初めてです。今回の事件に成功した

に就いて、あなたは少くとも僕と等しいだけの功勞をなさいました。僕はまだ充分腕力も、考へる力も恢復してゐないので。熱病の後に立派な仕事の出来る筈はありません。」

「どういたしましたか。」と中尉は反對した。「實に立派な仕事をなさいました。あの走り戸の問題の解決と言ひ、殊に土龍の秘密を知つてその一人として出席されたなど、實に驚く可く鮮かな手際だと思ひます。然しどうしてあなたは袋の中に居たのが死體ではなく僕だといふことを悟られたのですか。」

「それはもう夙くに知つて居りました。推理の結果、どうしてもあなたが袋の中に居られねばならぬと結論したので。然しその事は今此處では話しますまい。あなたは二十四時間あゝして居られたのですから、少し弱つていらつしやいませう。着物をお着更へにならなければならず、食事もなさらなければなりません。その後ゆつくりとあなたのお話を承はります。」

それから人々に二人の捕虜を別の自動車に乗せてカリングの家に運んだ。二人は別々にローランドとグリーンマーに護られて監禁された。

フォン・ヘーデン大佐は娘が連れ歸られた事を知らなかつたので、依然としてぶん／＼してゐた。中尉が食事を攝つてゐる間、カリングは手を盡して大佐の所謂誘拐者に飛びかゝらぬやう、又中尉を責めないやうに言ひ聞かせた。たうとう大佐は説き伏せられて何處かの蔭に隠れて中尉の報告を聞き終るまで、飛び出さぬやう約束した。立聞きする事をカリングは好まなかつたけれど、途中で決して飛び出さぬといふ事、カリングがもうよいと言ふまでは決して中尉に覺られないやうにする事、こ

の二つを厳密に守つて下さるならばと同意した。大佐がゐては中尉は探偵一人に話すやうに何もかも打明けないであらうと思つたからである。

そこで怒りの頂點に達した大佐も已むなくカリングの部屋の幕の蔭に隠れて中尉の這入つて來るのを待つた。

「誰でも盗みに這入つたり、人殺しをした者は僕だと考へるに違ひありません。」とトルハルト中尉は話しはじめた。然し僕はなんと言はれてもかまひません。無名の手紙を僕が書いたのだと思つて下るさやうな親切な大佐殿ならなんとやつて罵られたところがかまはないのです。」

かう言つた時、幕の後でうー、うー、と唸る聲が聞えた。

「ありやなんです。」と中尉がたづねた。「犬がうなるやうですねえ。」

「さうですよ。」とカリングは吹き出したくなるのをやつとこらへて言つた。「隣の部屋に横着な犬が鎖でつないであるのです。」

「やつぱりさうでしたか。」と中尉は安心して話をつづけた。「そして先づラーニヒルドのと會合が大佐の突然の歸宅で破られたことから語り始めた。」

「大佐はまるで幽霊のやうにばかりとやつて來ました。毎朝聯隊で下級士官が正確な時間に出勤するかどうかを見に来る時はいつもあゝした現れ方をするのです。僕だけでしたら平氣で彼處にゐたでせうけれど、ラーニヒルドさんが隠れるといふものですから、取敢ず逃げ出したのです。」

それにはたつた一つの道しかありません。本宅の中へ忍び込んで時機を見計つて出ようとするには後の方から忍び込むより仕方がありませんでした。その考へは非常によかつたのです。併し僕はこれまでたつた一度切りあの家の中へ這入つたばかりで、殊にその時は表から這入つたのですから、暗い處では尙更見當が着きませんでした。

ヴェランダからいきなり駈け込んだ部屋は後で分つたことですが、午前光榮ある御老人が僕を放り出しに來て呉れた客室だつたのです。手探りで僕は戸の傍へ來ましたのはつきりしたことはよく覚えてゐませんが、兎に角ぐつと押したと見えまして突然戸が傍へあざつたのです。不思議なことに戸は真中で開かず、傍の所に口が開きました。

僕は然しそれを兎や角考へて居る暇がありませんでした。ふり向いて見ると驚いたことに懐中電燈が僕の前に差しつけられてあるではありませんか。黒いマスクをかけた男が突然、

「何しに來たのだ。」と言ひました。

僕自身正當な理由で飛び込んで來たのではありませんから、何と答へてよいか分かりませんでした。殊にマスクをかけた男がゐたものですからどきまぎして物を言ふことが出来なかつたのです。其處で僕は誰か知らと思つて二三歩その男の方へ近寄つて行きました。

するとその時、懐中電燈が消えて男は物をも言はずに飛びかゝつて來ました。全くうっかりして居たので三つ四つ拳骨で殴られました。然しそれで僕は我に返りました。僕は角力にかけては餘り人に

は劣らぬ心算でしたから今に後悔するから見ておれと思つて力をこめて得意の突きを試みました。すると先方は咽喉をごろ／＼言はせたので、こいつ大丈夫組み敷けると、思つてゐますと案外にも男は鰻のやうに逃げました。僕は相手を再び掴まへようと彼方此方を觸つて見て、どちらから息使ひの音がするかと耳をすませましたが、矢張り駄目でした。あちらこちらで机や筆筒に打つかりましたので何か轉がしでもしたら大變だと思つて身動きしないことにしました。

暫らく四邊は森閑としました。僕は迷信家でもなくまた臆病者でもありませんが、暗黒の中のこの静けさは非常に厭な心地を起しまして、なんだか光線のある所へ飛び出たくてなりませんでした。ところがその時廊下に大佐とラーニユヒルドの聲が聞えたのです。そこで僕は突然どうかしなければならぬと思つたのです。即ち盗人を見つけたのですから何をさしおいても、報告せねばならぬと思つたのです。

そこで僕が戸のある方向だと思ふ方に向きますと再び眼の前に懐中電燈がつきました。僕はいきなり男を眼がけて飛びかかりました。すると、意外にも男は僕の方へ手をのばしました。電燈の光で見ると、キラ／＼するものが僕の方に向けられて居りました。突然僕の顔にヒヤリッとしたものがかゝりました。それと同時に非常に眼がしびれて、泣き出したいやうな痛みを感じ、眼の前がぐる／＼廻つたと思ふとそのまゝ、人事不省に陥りました。正氣がついて見ますと頭が恐ろしく痛みました。身體を動かさうとして、氣がついて見ると、狭い箱

のやうなところに半ばひざまづいたやうな位置で押し込められて居ることが分りました。

ふと、部屋の中で話聲がするではありませんか。耳をすますと機密書類が盗まれて又戻つて来たといふ話でした。一人は大佐であると分りましたが、も一人は直ぐには分らなかつたのです。それがつまりあなたでした。そしてあなたのおつしやるにはこの犯罪をすつと前から企まれたことだとおつしやつて、その證據として走り戸の仕掛けを大佐に示されました。そしてあなたは大佐が這入らる、前に二人の男がゐたに違ひない。一人は非常に急いで汚ない足跡を地面に残し、血の附いた指紋を戸に残して行つたから、容易に身許を知ることが出来るとおつしやいました。

それは即ち僕でした。

僕はその時大變な破目に陥つたと思ひました。盗人は僕を魔酔させて、金庫の後に當る壁の角のところに放り込んで行つたのですから、若し見つかつたならば萬事休すと思ひました。ラーニユヒルドと會つたことも容易に見見されるであらうし、たつた今窃盜の行はれた部屋に居るといふに就いての立派な理由は固よりありません。而もそれがわけの分る人間ならまだしも大佐と来た日には僕を憎んで、僕がどんなことでもし兼ねない男だと考へるに定まつてゐますから、實に弱つてしまひました。大佐は自分に氣に入らぬとなるとまるで氣違ひのやうになりますからな。

この時再び扉の方から低いなり聲が聞えたのでカリングはくすりと笑つてしまひました。

「何故お笑ひになるのです。」とその音を聞かなかつた中尉がたづねた。僕は決して、笑ひ事ぢやな

かと思ひますが。」

「氣にかけないで下さい。」とカリングは言つた。「今一寸他の事を考へたものですから。お話を續けて下さい。」

「僕は長い魔酔から覺めたのですから、まるで船酔ひにかゝつたやうな不快な氣持がしました。けれど僕はしつかりしなければならぬと思ひました。するとその時、ラーニヒルドの聲も聞えて來ました。僕はまるで雷に打たれたやうな氣がいたしました。」

それから僕は氣を附けて段々に身體を伸ばしました。金庫の後の隅と壁の間の比較的廣い隙間から覗いて見ますと僕が走り戸の傍の隅に居るといふこと、手の届く所にスキッチがあるといふことに氣が付きました。

僕はどうしても出なければならぬと一圖に思ひ込みました。而も誰だか分らぬやうに逃げ出さねばならぬと思ひました。女中が訊問されて居る間に僕は愈々計畫を定めました。チョッキのポケットに葉書を切る鋏がありましたからそれで外套の黒い裏地からマスクを切り出したのです。この考へは今の盗人から思ひついた事です。

はじめ僕は皆さんの出て行かれるのを待つて居らうと思ひましたが、あなたが徹底的の搜索をすとおつしやいましたので一刻も躊躇して居れぬと思ひました。随分大膽な行爲だと思ひましたがあなたも御存じないことだったので兎に角巧く行きました。

僕は然しながら遠くまで走らないで、間もなく歸つて來てあの通り帽子も被らないまゝ、邸の附近を廻つて居りました。すると突然、僕は下男の部屋から厚くヴェールを掛けた女が出來るのを見つめました。女は小さい門から出て大急ぎで暗の中へ消えてしまひました。すると窓かけが高く上げられて間もなくマスクを掛けた男が出來て來て丁寧に扉をしめて本宅の方へ歩いて行きました。

その男は例の盗人でした。今度こそは逃がしてならぬと思つてそつと僕は小さい門から庭に忍び込みました。ところがひよいと窓から覗き込みますと僕は化石したやうに立竦んでしまひました。殺された下男の死體が寢臺の上に置かれてあるのを見たのです。

どれ程の間そのまゝ立つてゐたか僕は存じません。不圖此方へ歩いて來る聲を聞いてはつと我に返りました。僕は身を躍らせて、木蔭に身を隠しました。それは女中が下男を呼びに來たのでした。そして僕はマスクを掛けた男が女中に死骸を見せておいてから女中を喰ひ止めたことを見ても居りました。その男は長い間隠れてゐて女中が窓から覗き込んである所をちつと見て居りました。

それから僕は死骸が外に待つてゐた自動車に運び込まれるところを見ました。死骸は長い袋に入れられてスツレ街に待つてゐた自動車の中へ運び込まれたのです。

女中は暫らく過ぎて自動車置場から出て來て本宅の方へ驅けて行つて急を報じた見え、あなた方が既の方に驅けて來られるのを見ました。僕はそこで自動車の方に忍び寄つて見ますとマスクを掛けた男は居りませんでした。本宅には誰も居らなくなつたのだからきつと留守中に機密書類が盜まれる

に違ひないと考へました。

突然僕はどうしても間諜共と戦はねばならぬと決心しました。併し僕はその時、何一つ武器を持つて居りませんし、又あの魔酔劑をかけられることは厭だし、況や大佐の前へ顔出しすれば益々不利益であるし、どうしたものであるかと考へました。

すると死骸の替玉になつたら宜からうといふ考へが浮びました。何處へ死骸が持つて行かれるらうか、何處に一味の者が菓を喰つてゐるだらうかを見極めるには是より他にないと思ひました。

瞬く間に僕は袋を開いて屍體を取りました。驚いたことに死體は髪を冠つてゐて、造つた傷跡がついてありました。死體の頭にはこれといふ特徴はありませんでしたし、下男の服を着てゐても瘦せかけた黄色い顔は僕をよく知つて居る大佐の下男とは似ても似つかぬものでした。只髪だけが下男に似せてありました。これを見て僕は愈々探偵をしてやらうといふ氣が起つて來ました。

出來るだけ手早く死體をかつき出して、厩の後に投げ、自動車に引返して袋の中に這入り口を締めました。

それから愈々自動車の動き出した時に僕はこんな冒險をせねば宜かつたといふやうな氣持ちになりかけました。僕は何一つ武器を持つてゐませんし、相手はどんな事でもし兼ねない人間であるし、それに未だ曾て死體の役をしたことは無かつたからです。

然し既に賽は振られました。それに僕は先刻僕を人事不省に陥れた悪漢に目にももの見せてやらね

ばならぬと思ひました。

それから例の怪しい家に運び込まれました。僕は死體の硬直を真似て全身の筋肉をうんと緊張させました。それは随分苦しい仕事でしたけれど巧く行つたので誰も氣が附かなかつたのです。人々は僕を地下室に運んで無雑作にどたりと放り下したので、その時はかりは餘り痛くて思はず悲鳴を上げようと思ひました。

『當分かうしておかう。明日になつたら返しに行かうよ。』と一人の男が言ひました。

僕は長い間全く動かさずに横つて居ました。上の方で人々の歩く音を聞きました。それから重い戸があたりと當つて四邊は靜かになりました。

そこで僕は用心して袋を開き外へ這ひ出しました。するとそこは眞暗で、冷く、じめ／＼してゐました。僕がマッチを取り出して擦つて見ますと、恐しい穴であることを見てぞつとしました。

これがインフェルノだなど僕は思ひました。他の部屋をどんな風だか見たくなりませんでした。上の方からは何の音も聞えて來なかつたので、僕は大胆にも上つて行きました。はじめ其處には誰一人ゐないと思ひました。地下室に下る階段から小さな前室に通ずる扉が細目に開いてゐましたからそれを開けて人のゐない眞暗な部屋へ這入りました。

僕は非常に用心して進んで行きました。それが僕に取つては幸運でした。といふのは次の扉の近くへ來ますと向うの部屋に人の話聲が聞えたからです。そこで僕は立聞きしましたがその時こそはロシ

ア語を學んでおいてよかつたと思ひました。

即ち次の部屋の話はロシア語で行はれておりました。そして話してゐた二人の男はその秘密を何もかもばらしてしまひました。彼等は、大佐をあんなに易々と欺き得たことを得意になつて話しました。二人の話すところによると大佐はマリアの手にかけてはまるで木偶坊であるからこんな巧くやつて呉れたのだと言ひました。僕はマリアといふ女が誰だか知りませんが、カリングさん、あなたは確かに知つて居られませう。

「存じませんねえ。」とカリングは答へた。

「残念ですな。けれど僕の考へるところによるとフォン・ヘーデン老人は、はたから見ると程、神聖な方ではありませんなあ。が、まあ、委しいことはあと廻しにませう。

それから二人の男は匿名の手紙があんなに巧く成功したことを得意げに語りました。

「これで中尉だけは片附けたわけだから君は女を自分のものにしていよ。」と一人の男が言ひました。

「無論するさ。」と、もう一人の男は言ひました。「二十四時間以内には僕のものにしてしまふ。成功したら君のお蔭だよ。君の忠告によつてあの嘘つばちの中へ中尉が歌留多遊びをすると言ふほんたうのことを書いた爲に、大佐の奴が信用して呉れたからねえ。」

こゝでカリングは再び中尉を遮つて言つた。「そりやほんとですよ。一本の手紙に書いてあること

だけは眞實だつたものですからフォン・ヘーデン大佐は他のこともほんたうだと思はれたのは無理もありません。」

「大佐、あゝ。」とトルハルトは悲しさに叫んだ。「他人を歌留多遊びするだけで判断するやうな人間は滅多にありませんよ。大佐も若い時は随分富籤や女や博奕に全財産を費して了つたばかりか、その爲に七萬クローネからの借金を拵へてどうにもしやうがないので財産家の娘と結婚したのです。

さういふ曰く附きの人が僕のことを兎や角言ふのですからなあ。僕ぐらゐの年齢の時の大佐と僕とを比べて見るなら僕は無邪氣な子供位のもです。大佐は若い時のことを誰も知らぬと思つて居るのかも知れませんが、今でもカジノの連中は好んでその噂をしてゐますよ。」

この時、遠雷を聞くやうなり聲が幕の後から聞えて來た。即ち大佐が自分の過去を語られて發した怒聲である。

「あれもやつぱり犬ですか。」と、トルハルトは少し氣掛りになつて言つた。「一寸棒で殴つたらどうです。どうしたんでせう。」

カリングは大佐が今にも堪忍袋の緒を切るかも知れないと思つて。「一寸見て來ます。」と中尉に答へた。幕の後には大佐が満面に朱を注いで兩手に拳をつくり、怒りの爲に全身を慄はせてゐた。カリングは若し萬事好結果に終らせたいと思ふなら、今暫らく辛抱して下さいと囁いた。そして吹き出したくなるのをやつとこらへて中尉の所へ歸つて來た。

中尉は何も知らずに話を續けた。

「扉一枚隔て、二人の悪漢と向ひ合つて立つてゐた時は實に妙な氣が致しました。若しピストルでも持つてゐましたら、たとひ魔酔劑をかけられやうが、その他どんなことをせられやうが、その場でやり合つたでせうが兎に角今は先づちつとこらへて成り行きを見て居らうと思ひました。

それが又僕の冒険に特有な經驗を與へて呉れました。人命を何とも思はぬ犯罪者と戦ふ探偵の仕事が、いかに面白いものであるかといふことを始めて覺りました。これ等の悪漢を此處までつけて來て彼等の穴にまんまと這入り込んだといふことを、僕は内心非常に得意に思ひました。よもや名探偵のカリングでも恐らくこの地獄を嗅ひ出すことは出來まいと考へて居りました。」

「ところが幸に嗅ぎ出しましたよ。」とカリングは笑つて言つた。「そして都合よくあなたと二人で力を合せることが出來ました。あなたの行き方は未だ曾て聞いたこともない位立派なものでした。この事件の真相を知るまでにははじめはかなり頭を悩ましたよ。」

「どうしてあなたは事件の真相を知りましたか。」

「それはたゞ證據を巧くつなぎ合せて見ただけです。下男の殺されたのがほんの喜劇に過ぎないといふ事を知るには餘り頭を使ふ必要は無かつたのです。あの全體の行き方と言ひ、窓掛けを高く上げて死體を外から見えるやうにしたこと、言ひ、それを見せるが否や、マスクの人間も死體も共に姿を隠したこと、言ひ、すべてが芝居だとより他に考へられなかつたのです。」

それから僕は女中が死んだ者の顔を見ないで首筋の大きな傷を見ただけだといふことを確かめました。つまり彼女の見たのは下男の黒い頭と服だけだったので。

女中の話を聞いただけで、この殺人は巧く作られた芝居だと考へました。そしてその考へが正しいか否かを確かめる爲に内證で床の上にこぼれて居る血液を少し取つて來たのです。

今朝その血を調べて見ましたらそれは牛の血でした。

そこで萬事が明瞭になつて、誰も殺されたのではないと分かりました。然し兎に角下男の寢臺に死骸らしいものがあつたに違ひない。それは人形であるか、他の死體であるか、或ひは又生きた人間だつたであらうか。

この疑問は、グリーンマーの報告によつて一つの解答を得ました。即ち人々は疑ひもなく男の死體を土龍の家に自動車から運び出しました。然しその時はまだあなたが殺された人の代りを勤めて居るとは分かりませんでした。

ところがその後焼けた馬小屋の傍に死體が発見されたといふ驚く可き報告を得ました。最初はその死體が果して殺された下男の代りを勤めた男の死體かどうかを實は疑ひました。死體が姿を隠すと同時に別の死體が姿を現すといふことは滅多にないことです。それに解剖の結果は僕の察した通り、火事の起る前にその男が死んでゐたといふ事が證明されました。

すると二人の男が自動車で運び込んだのは誰であらうか。一人の男は死骸が急に重くなつたと言ひ

ました。そこで僕は確かに生きて人間が死體の代りを勤めたに違ひないと思つたのです。而もそれと殆ど同時にあなたは姿を隠されましたので僕の説は愈確かになつたわけです。

然しその説は論理的に立てられたものであるとは言へ一方に於いて少なからず想像的のものであります。この結論の論據となつて居る假定の一つはその時まで單なる推測に過ぎなかつたのです。

と言ふのは悪漢達が事實下男部屋で他人の死體を利用したかどうかと言ふことです。それが證明されて初めて僕の説が正しいと言ひ得るわけなのです。

幸にも少年探偵の連中がポーマン婆さんを嗅ぎ出して来て僕が訪ねると、婆さんは息子の死體を貸したと言ひました。そこで初めて僕の説が完成したわけです。愈悪漢達は生きて人間を穴の中に持ち込みその生きた人間はあなたではないといふことが分つて来ました。

然しながら土龍には、借りて来た死體を持ち歸つたのだと思はせねばならない。さもなければ彼等は必ずあなたを殺してしまふに違ひないから。

そこで僕は火事場に死體の發見されたといふことを公にしないやうに努めたのです。若し新聞にその事が書かれたら悪漢達は必ず袋を調べるに違ひないからです。

これまで僕は種々の事件を取扱つて来ましたがああなたの行はれたやうな行り方を見たのは初めてです。實は僕はあなたの無謀なのに驚きました。併しよく考へて見ると成程一か八かの冒險をせられたのも無理はないと思ひました。即ちあなたは思はずも間諜事件に巻き込まれて而も嫌疑を晴らすこと

は難かしい位置に陥られました。ですから最も安全な方法は眞の犯罪者を捕へるより外ありません。それがあなたの計畫であるのだと僕は思ひました。

あなたは實に勇敢な方です。どうか僕の賞讃を受けて下さい。あなたが探偵になられなかつたのを残念に思ふ位です。

中尉はこの賞讃の言葉に非常に満足して言つた。

「どうもそんなによく言つて頂いては恐れ入ります。實に嬉しく思ひます。併しあの狭量な大佐は恐らく先入見を一寸も動かさないだらうと思ひます。」

「まあ時機を待ちませう。或ひはさうでなくなるかも知れません。然しあなたの報告をもつと承はりませう。」

「もう餘り澤山お話することがありません。それから二人の男は非常に疲れてあたらしく、直き歸らうとしました。」

彼等は再び令嬢のことを話しました。一人の男は何時連れて来てもしやうに用意がしてあると言ひました。大佐の名で手紙を書いたから確かに連れ出されて来るに違ひない。此處へ来た以上、どんなにわめいても誰にも知れる氣遣ひはないと申しました。

それだけ聞いてもう充分だと思ひましたから再び穴倉へ下りて来て袋の中へ這入り込みました。丁度それは、都合でした。といふのは、直ぐ後に一人の男がやつて来て地下室を見廻りに来ました。

歸宅する前にすべての部屋を見廻つたらしかつたです。やがて上の方で門を開閉する音が聞えて四邊は静かになりました。

そこで僕は愈その家の主人公となりました。そこで更にこの機會に一廻りして来ようと思ひました。しばらくして僕はラーニユヒルドさんを押し込めるに違ひないと思はれる部屋を見つけました。それは窓の一つもない暗い部屋で寢臺が一つ、机が一つ、椅子が二つ三つありました。かうしてラーニユヒルドさんの居る部屋を知つたわけです。

二人の悪漢が食事した部屋には澤山食物が残つてゐました。丁度その時空腹を覺えましたので腰を掛けて思ふ存分に食べました。

それは午前三時でした。非常に疲れてはゐましたが袋の中へもぐり込む前に間諜達の玉手箱、即ち筆筒を改めて見ました。その中には種々の書類がありまして、そこで僕は……

「それはとにかく。」とカリングは遮つて言つた。「あなたは集會の時間までどうして暮されました。ずつとあの冷い穴倉に寝て居られましたか。」

「いえ。さうではありません。然し他の所へ行つて寝るといふことは危いと思ひました。幸に隣の穴倉に二三の薪を入れる袋がありましたのでそんなに冷い思ひをせんでも宜しいでした。それから日中までぐつと一寝入りしてラーニユヒルドさんが連れられて来た時、初めて眼を覺えました。」

「それからどうしました。逃げ出さうとは思ひませんでしたか。」

「無論さう思ひませんでした。土龍達が死體の失つたことを發見したらきつと直様逃げ出して會議も何にも開かないと思ひました。それにラーニユヒルドさんの爲にも止まつてゐなければなりません。した、どんなことがあつてもラーニユヒルドさんと一緒にその家を出る決心をしました。それに土龍達は午前は姿を現しませんでしたから、穴倉から這ひ出してラーニユヒルドさんの部屋に行つて僕が来てゐるからといふことを話して……」

この時突然扉が開いてラーニユヒルドが飛び込んで来た。

「シキステンさん。」と彼女は喜ばしさに言つた。「今この女中に聞きましたら父は寝たさうですよ。ですから今暫らくの間は大丈夫だわ。」

カリングは彼女を手眞似で制したけれど彼女はそれに氣が附かずに中尉の兩腕に抱かれた。

この時、大佐の隠れてゐた幕がさつと開いて大佐は幽霊のやうに眞中に突立つた。

「放して、放して。」と彼は叫んだ。「娘に觸つて呉れるな。」

第二十二章 大團圓

大佐が突然現れたので中尉はすつかりどきまぎしてしまつた。彼はラーニユヒルドを離して二三歩後退りしながら一言も發しないで怒つて居る相手に眼を向けた。

「何故約束を守つて呉れませんか。」とカリングが口を出した。

「約束も糞もありですか。」と大佐は思はず答へて眼を輝かして中尉の方を向いた。わしはいかにも無慈悲な狭量な老人です。わしは常軌を逸した人間です。わしは若い時に賭け事をして暮した人間です。……」

こゝまで言つて彼は急に口を咬んだ。父として威厳を保つにはこんな事を娘の耳に入れてはならんと思ひ附いたからである。そこで彼は中尉に背中を向けてラーニヒルドの方へ腕をのばした。

「おゝ。お前は救はれて宜かつたねえ。」とまるで別人のやうな聲を出して言つた。

ラーニヒルドは然しながら彼を避けるやうにして言つた。

「あなたの傍へは参りません。そんなに無慈悲な方の傍へは参りません。」
この意外な返答に大佐が驚いてゐた時、カリングはラーニヒルドの方を向いて何事かを耳の中へ囁いた。

「まあほんたうですの。」と彼女は信用出来ないやうな顔をして言つた。

「誓つてほんたうです。」と探偵は答へた。

するとラーニヒルドは中尉の方へなつかしさうな合圖をして部屋を去つた。

「そこでお二人の方。」とカリングは二人の男に向つて言つた。「もうお互ひに仲直りされてもいゝでせう。今僕の家には二人の間諜が居ります。その二人とも仲直りしようぢやありませんか。」

カリングがかう言つてベルを押すとローランドが這入つて来た。

「二人の捕虜を連れて来て呉れたまへ。」と命令した。

その間に中尉は幾分か心を恢復した。

「大佐殿は今僕の話ししたことをみんな聞いて居られたのですか。」と彼は訊ねた。

「聞いたとも君。」と大佐が叫んだ。「僕は君の光榮ある……」

「もうつまらぬ喧嘩は止ませう。」とカリングは遮つて言つた。「大佐殿もつと大切なことを考へられたらどうです。感謝されなければならぬ中尉に對して何時までも怒つて居られるといふことはよくありません。」

「感謝するんですつて。どうしてそんなことが出来るのですか。」

「感謝ばかりでなく中尉の許しを請はなければなりません。」とカリングはきつぱり言つた。

この言葉に對して大佐は呆れて物が言へないやうな様子をした。

「何よりも先づ、」とカリングは言葉を續けた。「あなたはあの匿名の手紙を信じられたことに對して謝罪せられねばなりません。今はその手紙があなたの下男即ち外國の間諜の手で書かれたといふことが分かりました。その間諜をあなたは自宅に雇はれたばかりでなく何もかも打明けて居られました。その事は今直接下男の口からお聞きになることが出来ませう。」

この言葉は大佐に非常な打撃を與へた。突然彼は口を噤んで顔色を變へた。

「なに。——ジョンが——この家に——居るのですか。」と彼は吃りながら言つた。

「さうです。現に僕の捕虜となつて居ります。それはそれとして、もう一度あなた自身のことに返ります。あなたは中尉に非常に感謝されなければなりません。中尉の勇敢な取りはからひがあつたればこそお嬢さんは救はれたのです。若し中尉がああ恐ろしい悪漢達に交つて死體の役を勤められなかつたならば、僕自身が非常な危険に迫つて殺されたかも知れないばかりでなく、お嬢さんも無論歸つて来られなかつたのです。中尉はこの事件に於いて人としてなし得る最大のことをして下さつたのです。お嬢さんを助ける爲に中尉は自分自身の生命をかけられたのです。」

大佐は面喰つて人々の顔を眺め廻した。彼は明らかに自分自身の心と戦つて居るらしかつた。

「そりやあね。」と彼は遂に言つた。「成程今になつて見れば手紙を信じたのは僕が悪かつた。又娘を助けて呉れた事に對しては君に感謝するよ。併しわしに對する君のあの侮辱の言葉は……」

「その話はまだ抜きにませう。」とカリングは言つた。「あなたは、盗まれた大切な書類の戻つて来ないことをお忘れになりましたか。」

「何が忘れるものですか。それが見つかりましたか。」

「いゝえ。それがどうも悲しいことにね。」と探偵はわざと心配さうな顔を造つて答へた。盗人が盗人だ、書類をたうとう持つて逃げましたよ。どうも前後の事情から考へて見ますと、とても取り返せる見込みはなさうです。」

この言葉を聞くや否や大佐は椅子にぐつたりと腰を下した。今まで怒り狂つてゐた頑固な様子はす

つかりと無くなつてしまつた。

「それぢやあわしは破滅だ。」と彼は呟いた。

その時、ローランドとグリーンマーとが二人の捕虜を連れて這入つて來た。下男の姿を見るなり大佐は思はず立ち上つた。

「この野郎。間諜奴が。」と聲を濁らして叫びながら、彼の傍へにじり寄つた。

相手はだゞせゝら笑つて居るばかりであつた。彼は探偵の方を向いて訊ねた。

「何時までかうして僕等を捕虜にしておくのです。」

「それは君達次第さ。」とカリングは答へた。「先づ第一どうしてベルクハイム莊に入り込んだか残らず白狀して呉れ給へ。」

捕虜は嘲笑するやうな風をして肩をすくめた。

「僕等の計畫が成功して書類をとつた以上、何もかもお話しませう。質問して下さい。」

カリングの質問に答へて下男はすべての出來事に就いて詳しい報告をした。彼は中尉を讒言する爲に匿名の手紙を書いたことを白した。それから盗人となつて書類を盗み出した一伍一什を告げた。

それはカリングの説と寸分も違はなかつた。

電報は扮装したマリアによつて配達された。彼女は午前中ずつと祕密室に隠れてゐたのである。若し大佐が豫定通りフディングへ來たなら翌日まで、無理に留めて置く手筈になつてゐた。大佐の部屋

の電鈴はいつもマリアがたづねて来た時、それを使用した。ラーニユヒルドが度々聞いたといふのはその音であつた。

下男が最初に盗みに這入つて祕密書類を取り出していざ迂り戸を片寄せて出ようとした瞬間にトルハルト中尉が駆け込んで来たのであつた。

そこで下男は中尉を魔酔させて金庫の後に押し込め中尉のポケットから何もかも取り出してしまつた。その中にはブリムソン夫人に宛てた封筒があつてその封筒の中にストックホルムから留守になつた間に書いた手紙が這入つてゐた。中尉はその時三本の同じやうな手紙を書いたのであるが、その中二本だけを下宿屋のお主婦さんの手からラーニユヒルドへ送つて貰つたのである。そしてこの残つた一本を利用して下男はユーベンハーゲンの本部に宛てた文句を書き込んでブリムソン夫人に託したのである。それはたゞ中尉の嫌疑を深からしむる爲であつた。

殺人の喜劇もカリングが推定した通りであつた。すべての手筈を定めて女中を遮つたマスクの男は下男自身であつた。

「然し何故君は殺されたことにしたかね。」と探偵がたづねた。

「それはです。」とジョンは答へた。「僕も仕事が一瞬片附きましたので、若し突然僕が逃げてしまつたら、きつと搜索されて人相書が各地に送られるだらうと思つたからです。するとその中には捕まることになります。死んでさへ居ればその憂ひはありません。それに殺人事件を加へれば一層事件を紛

糾させて機密書類の盗まれたことは重要視せられなくなると思つたからです。」

「誰がフォン・ヘーデン嬢を誘ひ出したかね。」とカリングがたづねた。

「それは僕です。」とジョンが答へた。「貸自動車の運轉手の風采をして迎ひに行きました。それは何でもないことでした。道で自動車の番號を變へてそれから直接にキルコ街にやつて来ました。お嬢さんは偽の手紙で父上と中尉に會ふことが出来ると思ひ込んで居られましたから、少しも躊躇せずに入つて來られました。別にそれが爲に大した害は受けられなかつた筈です。」

それからカリングが段々たづねて行くと土籠として長い間仕事をしてゐた間諜團の首領はこの二人であるといふことが分つた。探偵は彼等の本名を知らうと思つても言はなかつた。他の者達は唯言ひ附けられた仕事をするに過ぎなかつたのでダイヤの九の外は間諜の仕事をしてゐるのだとは少しも氣附かなかつた。

この訊問は瑞典語で行はれたので、その間、伯爵と稱する男は何のことやら分らずに黙つて立つてゐたが、その時ジョンの方を向いて何事かを囁いた。

「もう澤山だから出して貰つて呉れと伯爵は言ひます。」とジョンが言つた。

「此方がよしと言ふまでは返さないよ。」とカリングは冷淡に答へた。

「そりやいけません。伯爵と僕とが明日の朝大陸行きの汽車に乗らなかつたら、フォン・ヘーデマ大佐とマリア・リベンスキーとの情事が新聞に載る筈になつてゐます。新聞に出たらさだめし面白から

れるでせうよ。」

「何を馬鹿な。黙つて居れ。」と大佐は怒つて叫んだ。彼は中尉にその話を聞かせたくなかつたのである。

下男は大聲を出して笑つた。

「そりや成程、面白くありますまい。」と彼は笑つた。「だからなるべく新聞などに書かんことにした方がいゝでせう。けれどさうするには今直ぐ歸して貰はねばなりません。さもなければ無論公になります。」

「そんな脅し文句には驚かぬよ。」とカリングは落ついて答へた。

「さうか知ら。では話しますがね。僕等が明後日までにコーペンハーゲンに着かなければマリアは自叙傳を出版社の手にわたします。ですから新聞ばかりではありませんよ。さうした曉にはフォン・ヘーデン大佐は交際場裡から葬られてしまひます。そんな事はさせたくないでせう。」

カリングは答へる代りに肩をすくめたが、大佐はそれを見てカリングはその位の事はかまはぬと思つてゐるに違ひないと考へた。然しながら大佐は何も言はなかつた。

「君等はある條件を提出して僕等を脅さうとするんだね。」とカリングが言つた。「條件を出すのは此方の仕事だよ。先づ何よりも前に盗んだ書類を歸して呉れたまへ。」

「愈本音を現しましたね。」と下男は嘲るやうに言つた。「お氣の毒だがそれはもう出来ませんよ。」

僕等自身が取返さうと思つたつて駄目です。今頃はもうずつと離れたところへ行つて居ります。それにあなたは僕等を逮捕する廉がなくなりますよ。」

「さうか知ら。盗みに這入つた事と放火とで充分だと思ふが。君達を間諜として告發するばかりでなく重禁錮に價するやうな外の犯罪の廉で逮捕することはわけないことだよ。又大佐にとつては君が今脅かした事情位は、盗まれた書類が返つて來ない時の結果と比ぶれば何でもないことだよ。」

この言葉を聞いて下男の顔には不安の色が浮んだ。彼はぼんやりとして立つてゐた仲間に小聲で相談した。その結果下男は幾分か當惑した顔付きをしてカリングの方を向いた。

「書類を取り戻すことは出来ません。」と彼はきつぱり言つた。「僕等の行爲に對してどんな事が起つてもそれを堪へる覺悟をして居ります。その結果はあなた方に取つては非常な迷惑になります。」

「僕が欲しいのは全體の書類ではなくてたつた一枚だけだ。」と大佐は口を出した。「その外のは持つて行つて差支へない。その一枚だけには幾ら金を出してもかまはん。」

下男は驚いて大佐を見つめた。彼は大佐の言葉を仲間に翻譯して聞かせた。すると伯爵は苛々した様子をした。

「要求する金を支拂つて呉れますか。」と彼は佛蘭西語で言つた。「金は欲しくないが、その代りお嬢さんを……」

「娘を。」と大佐は怒鳴つた。「よくもそんな圖々しいことが言へたものだ。愛する女をこんな風に賣

買するやうな人間は聞いたことがない。」

「さうですとも。」とカリングが言った。「伯爵殿の今の身分では尙更いけませんよ。間諜として逮捕された人間がお嬢さんを妻にする資格はありません。たとひ秘密書類が戻つたところが出来ない相談でせう。」

「けれどねえカリングさん。その書類はわしの命にかけても取り返さねばなりません。」
カリングはうなづいて言った。

「それではですわねえ。今此處に勇敢な人があつてその盗まれた書類を持つて来て呉れたとします。それが立派な精神の人で勇氣のある人であるとしたならば、あなたはと言ひますか。」

「無論わしはわしの支拂ひ得る範圍でその人の要求するだけの金を支拂ひます。」

「それは分つてあります。けれど僕の言ふのは金ではないお嬢さんのことです。」

「ラーニユヒルドは自分の好きな人と結婚するがよいです。けれどそれには條件が……」

「あなたの許可を得てといふ條件でせう。」とカリングは遮つて言ひながらトルハルト中尉にそつと合圖をして言つた。「無論あなたは同意せらるゝだらうと思つてあります。」

中尉は紙入れの中から一枚の書類を取り出して大佐に手渡した。

「是は誠に大切なものです。」と彼は言つた。「僕は昨夜間諜達からそれを取つて來ました。」

大佐はそれを廣げて見るや否や、満面に喜びの情を湛へて中尉の方へ手を出した。今までの憤慨の

情はすつかり消えてしまつた。

「行りがたうく。君はえらい。」と大佐は感動した調子で言つた。カリングはその間に扉を開けてラーニユヒルドを呼び入れた。

彼女は二人の捕虜を見て顔色を變へたが大佐が中尉と嬉しきうに握手してゐる姿を見てその方へ寄り寄つた。

大佐は彼女を中尉の方へ押しやつて言つた。

「仕方がない。どうなりとするがよい。わしはもう決して文句は言はぬよ。」

カリングはその間二人の間諜の様子を注意して觀察した。ラーニユヒルドが中尉と嬉しきうに抱き合つてゐるのを見た時、伯爵は全身を慄はせて手錠のまゝ彼女に躍りかゝらうとした。が、ローランドによつて抱き止められた。

「さあ今度は君達の番だ。」とカリングは二人の捕虜に向つて言つた。「君等も見た通り君等の仕事も終りを告げた。大佐の爲に今君の言つた新聞一件を防ぐ爲に自由にして……」

「カリングさん。何を言ふのです。」と大佐は叫んだ。「この惡漢達を逃がす心算ですか。」

「あなたの爲を思つてです。」

「どうして……」と言ひながら大佐は立上つた。「どんなことを世間で言はうが誰も僕を間諜だと疑ふ者はありませんまい。僕のした馬鹿なことは世間に知れたとて少しもかまひません。」

かう言つて彼は電話の傍へ行つて警察を喚び出した。かけ終つて彼はカリングに向つて言つた。
「こんな人間達を横行させる位なら、どんな恥をかいてもわしはかまひません。」
カリングは大佐に手を差し出して言つた。
「有りがたう御座います。無論僕には逃がしてやる心算は無かつたのです。只一寸申上げて見たばかりです。あなたのお心は無論よく承知して居りました。」

スピードのキング 終

四枚のクラブ

四枚のクラブ

第一章 父 娘

今年十七になるロザリー・グリュエーテンスは大きな姿見鏡の前に立つて満足な笑みを漏らした。それもその筈、彼女は非常な美人である。

「ジョンさんのおつしやるのも無理はない。私そんなに拙い姿でないもの。」と彼女は呟いた。充分その姿に見惚れてから、彼女は父を探しに部屋を出た。

骨董商のグリュエーテンスは六十になる老人で、数年前に細君を失ひ、今は娘と二人切りである。ロザリーが彼の部屋に這入つて来た時、彼は熱心に讀んでゐた書物から眼を離して見上げたが、その眼に向つては、彼女は今し方、鏡に向つた時のやうな満足の笑みを漏らすことが出来なかつた。

「なんといふけばくしい着物だい。」と彼は不愉快な顔をして言つた。「わしはさういふ風装は嫌ひだ。」

「けれどお父さん。私今オペラへ行く心算なのよ。」

「おや。又今晚留守にするのかい。世間は戦争で物騒なのに餘り家を空ける日が多過ぎるぢやないか。世間の手前もある。」

「世間なんて何と言つたつてかまはないぢやないの。」と彼女は答へたが、いかにも父に氣に入らうとするやうな笑ひ方をしたので、彼は怒ることは出来なかつた。

「ロザリー。ちと口を慎しんだらどうだ。お前はわしの心をよく知つて居る筈だ。段々世間の人氣が悪くなつた今日では、わし達のやうな金を持つて居る者は世間の者から注目目的になるのだよ。だからなるべく質素にして、贅澤をしたり、娯樂に耽つたりすることは止めなければならぬ。わしを御覽。決して外出はしないから。」

「まあ。」と彼女は口を出した。「お父さんは老人ですから、外出したつて何も面白くないわ。一體私がどんな贅澤をするの。」

「今日は芝居、明日は宴會と浮かれ歩いてあるぢやないか。」

「今晚はたゞオペラへ行くだけなのよ。」

「オペラへ。」と老人は鸚鵡返しに言つた。

「そりやオペラへ行くのもいゝさ。けれどオペラが閉場ると、定まつて何處かで食事をして遅く歸つて来るだらう。それがわしには氣に入らない。近頃わしは滅多にお前と二人で夕飯を攝つたことがないぢやないか。」

「だつてお父さん。」とロザリーは少しく驚いて言つた。あなたは寂しい方が却つて好きでなくつて。この頃はまるで一人ぼつちになつて本ばかり讀んでいらつしやるぢやないの。それでも私が傍に

ゐる方がいゝのですか。」

「そりや當り前さ。けれど何もわしはお前に無理なことを言はうとは思はない。お前は年が若いし、種々樂しみもするがいゝさ。決してわしはお前を止めませんが、併しこの頃の様子を見ると餘りやり過ぎではないかと思ふんだ。随分わしはお前のことを心配してゐるよ。」

「お父さんのおつしやる意味はちやんと分つてゐるのよ。」と彼女は不愉快な顔をして言った。

「お前のやうな美しい娘を自由に飛び廻らしておくのはちと危いと思ふのだ。お母さんが生きてゐたら決してそんなことはさせまいよ。」

「では、私には自制心がないと思つていらつしやるの。」

「無論お前に自制心があることは分つて居るが、近頃の娘はどうも遠慮といふことがなく、やりたいことは何でもするとはいふ有様だ。それがわしの心配の種だよ。世間の悪風に感化されやしないかと恐れるんだ。」

「そんな心配は無用にして下さい。」

「然し心配せずには居られないよ。この頃、舊友のギルドネルに聞いたことだが、お前はある若い男と度々一緒になつて居るといふことだ。何でもその男の名はローガンといふぢやないか。」

ローザリーは顔を赧くして言った。

「だつて男の方と散歩する位、悪いことではないでせう？」

「そこだ？」と父は眞面目な顔をしてこたへた。「ローガンといふ男は誰だい。わしはちつとも知らんが。」

「お父さん。」と話の風向きに苦しみを感じて彼女は答へた。「決して私、恥づかしいやうな方とは近づきになりませんから、心配しないで下さい。ローガンさんはそれはく立派な方です。職業は商人です。」

「商人。」と老人は面をふくらかして言った。「商人とだけでは分らない。どういふ商賣をして居るのか。まだローガン商會などいふ名は聞いたことがない。」

「そんなに大きい商賣ではないさうですが、十分生活して行くだけの収入はあるさうです。薪や石炭やその外の雜貨を賣る代理店を持つていらつしやるわ。」

「何處でお前はその人と知り合ひになつたのか。何故わしにそれを話さなかつたのだい。」

「だつて些細なことですもの。」と第一の質問を避けてローザリーが答へた。「お父さんさへ聞いて下さつたら、とうに話してゐたのですわ。あの方ならお父さんのお氣に入るに違ひないわ。」

「それではいつか會ふことになるのかね。」

「さうよ。ローガンさんはお父さんに仕へて見たいと言つていらつしやるわ。單に禮儀の爲ではなくて、特別の理由から、あの方は非常な慈善家だわ。」

「わしだつてさうだよ。」と老人は淡泊に言った。

「けれどあの人程ではありませんわ。貧民の子供を助ける爲にはどんな苦勞でもして適當な方法の見
つかるまでは決して止めないのよ。」

「他人に金を出させるのか。それとも自分でも金を出すのか。」

「さうよ。あんないゝ方、私まだ見たことがないわ。いつも財布の底をはたいては貧乏人の子供にお
やりになるが、いつだつたか私も……」

「中々よく知つて居るねえ。もう長いこと交際つてあるのかい。」

「半年ばかりになるわ。」

「それなのに一言もわしに話さないのだね。どうもお前はわざとわしに秘してゐたらう。わしはさう
いふ秘し事は嫌ひだよ。」

「さうか知ら。」とロザリーは答へたが、その眼には何となく誇りの色が浮かんだ。「ほんたうにお嫌
ひか知ら。」

「何だい。それは。」

「お父さんは御自分のことは人に秘密にすることがお好きぢやないの。」

「何言つてるんだ。」

「だつてお父さんは御自分を私の前で秘さう／＼としていらつしやるんですもの。」

「そんなことがあるものか。」

「否え。お父さんは何度となくあの緑の部屋に閉ぢこもつて誰も這入らせないやうにしていらつしや
るぢやないの。」

「それは讀書の邪魔を拂ふ爲さ。」

「けれどあの部屋はお父さんの留守の時も、錠が下してあるぢやないの。掃除するにもお父さんのい
らつしやる時だけしか、やらさないやうにしていらつしやるぢやないの。一體どういふ秘密を彼處に
持つていらつしやるんです？」

「秘密なんてありやしないよ。高價なものが置いてあるだけだ。」

「高價な物つて。私まだ一度も見ないわねえ。」

「見たつてお前には分らないよ。」

「けれどお父さんは時々妙な手紙をお受取りになつてその度毎に機嫌を悪くなさるぢやないの。きつ
と何か私に秘していらつしやるんだわ。」

「いや違ふ。それはお前の氣のせゐだ。」

「だつてお父さんは先達て手紙の中からクラブの一をお取り出しになつて、死ぬ程びつくりしてい
したぢやないの。それでも私の氣のせゐですか知ら。あの時、お父さんの顔色は壁士のやうに蒼ざめ
て、手がぶる／＼慄へ、カードを下へお落しになつたぢやないの。そしてあの部屋へ閉ぢこもつてた
うとう出ていらつしやらなかつたぢやないの。」

老人は容をあらためて言った。

「クラブの一かい。あれはあの時、昔のいやなことを思ひ出したんだ。」かう言つて彼は額に皺を寄せ暫らく黙つてゐたが、やがて用心深く言葉を續けた。「お前はあのクラブの一をよく見たのかい。」
「え、見ましたわ。私が拾ひ上げたんですもの。それは一種の郵便葉書で、裏に文句が書いてありましたわ。」

「讀んだかい。」

「否え。お父さんが私の手から引き取つたぢやありませんか。棒の引いてあつた文字だけ、讀みましたわ。『復讐せねばおかぬぞ。』と書いてありましたわねえ。あれは一體何ですの。お父さんの命に拘はるやうなことはないか知ら。」

老人は頭を振つた。

「けれど何か意味があるでせう。」とロザリーは言葉を續けた。「確に今の言葉は脅し文句ですもの。」
「馬鹿な。」と老人は言つて、手真似で否定するやうな動作をした。

「お父さんは確に祕していらつしやるんだわ。あの時、確に脅かされたやうな様子をなさつたのですもの。早く警察へ届けたはうがい、でせう。」

「警察。そんなつまらぬことを言ふではないよ。」

「決してつまらなくはないわ。誰か脅迫して來たら、直ぐ警察へ届けて、實行しない前に逮捕して

貰ふのが當り前でせう。」

「警察では決して捕まらんよ。」と老人は顔を曇らせて言つた。「それにわしはそれが誰だか知らないのだ。」

「だから警察で探して貰つたらい、でせう。たゞあのクラブの一を見せたらい、わ。それにあなたは是まで、まだ度々受け取つたでせう。」

「わしは警察を信用しないんだ。」と老人は頭を振り、言つた。「お前も確か覺えてゐるだらうが、ビルンといふ若い男をいつか警察で探して貰ふやうに頼んだことがあるだらう。あの時探偵達に男の特徴をよく話したけれどたうとう駄目だったからねえ。」

「よく覺えてゐますわ。あの時どういふ心算で探偵してお貰ひなすつたの。」

「それはこの場に關係ないよ。」と彼は答を避けた。

「ビルンと言ふ人はもう死んだでせうが、今脅迫をしてゐる男は生きてゐるでせう。」
老人は急に立上つて驚いて娘の顔を眺めた。「ところが死んでゐないんだよ。」と彼は聲を潤らして言つた。「それが不思議でならんのだ。あの脅迫状は死んだ男から來るんだ。」

今度はロザリーが少からず驚いた。さういふ謎であると思へば思ふ程、彼女の好奇心は増した。

「お父さん。何卒話して下さい。きつと誰かあなたに復讐するんです。」

「復讐。何の？」

「それは存じませんわ。少しも事情を知らないんですもの。きつとお父さんは若い時に、誰かに不正なことをしなすつて、それでその人が復讐するんでせう。ねえさうでせう。」

「さうぢやないよ。實はわしも譯が分らんのだ。わし自身が知らないんだ。兎に角心配することはないよ。お前には全く關係のないことだ。」

彼女は父に頼りしてやさしく言つた。「いゝえ。お父さん。私に關係のないことはありません。お父さんの不機嫌な顔を見ると、堪へられないんです。確かお父さんは非常に苦しんでいらつしやるんです。危険を感じていらつしやるんです。ほんたうに事情を話して下さい。」

「いゝや。決して心配には及ばない。全く何でもありません。誰か悪戯をして居るに違ひない。わしも気が、りでないことはないが、然し何しろ世の中は物騒だからね。到る處に血は流され、盜賊は白晝横行をしてゐるんだ。だから気が、りになるのも當然ぢやないか。」

「けれど家には二重の安全錠が掛けてあつて、警報のベルも店と兩方につけてあるではありませんか。だから何の心配もない筈です。」

「だが、お前が外出すれば廊下の扉に門をさすことは出来んからね。」

「家へ歸りさへすれば直ぐ門と鎖は掛けますわ。ねえお父さん。直き歸りますから心配はしないで下さい。」

「こんなな心配するの年所爲だよ。どうも近頃はしみく年を取つたことを感じるねえ。ちと休

養せねばかなはない。だから明日は別荘へ引越さうと思ふのだ。」

「明日。」と彼女は驚いてたづねた。「まるで出し抜けぢやありませんか。」

「さうだ。けれど兎に角引越すよ。もう荷物は用意したからねえ。持つて行くものはあの、階下の大きな箱の中へ入れてあるんだ。明日の朝、取りに寄越させる筈になつて居る。」

「それは餘り出し抜けぢやありませんか。ハンナも私もトムテボへ従つて行くのですか。」

「お前達は後から來てもいゝ。ハンナはよく掃除をして行きたいと言ふんだよ。わしは掃除など見たくない。」

「だつて別荘では誰がお父さんに給仕するんですか。」

「あの老人のラールス夫婦があるぢやないか。細君の方は昔、家でよく使つたよ。だから何も心配はないんだ。田舎の空氣が吸つて見たいし、庭で少し穴でも掘つて見たいのだ。」

「そりや別荘へお出でになれば、ゆつくりなさることが出来ますわ。」かう言つてロザリーは時計を見て慌たゞしく言つた。「おや。もう愚圖々々して居られない。七時にエニーさんの所へ行く約束ですから。」

「ハッデルス夫人の所かい。」

「えゝ。」

「御主人も一緒にオペラへいらつしやるかい。」

「無論さうですわ。」と彼女は少し躊躇して答へた。

「では行つておいで。」

「お父さん、左様なら。心配しないで下さい。今晚は食事して来ませんから。」
彼女が去つてから、老人は再び讀書しようとしたが、思考を纏めることがむづかしかつたので、暫らくして書物を伏せてしまった。彼は今し方、娘と語つた話を考へざるを得なかつた。若し可愛い美しい娘が悪漢の手にでもかゝつたらどうしよう。是非明日はそのローガンと言ふ男を詮索しなければならぬと思つた。

その時突然、彼は娘をオペラから直ぐ歸らせるのは氣の毒だと思ひついた。そこで彼はハッデルス夫人に電話をかけて、食事をして来てほしいと告げようと思つた。

「ロザリーさんですつて。」と電話口へ出たハッデルス夫人は驚いて言つた。此方へは見えませんか。」

「それではもう直き参りませう。参りましたら此方へ電話をかけるやうにおつしやつて下さい。」

「私、只今出懸けようと思つて居りますの。ロザリーさんは今晚此方へ見えるやうなことはありませんまい。」

「御一緒にオペラへ行つて下さると思ひましたが。」

「否え。それは何かのお間違ひでせう。そんな約束をした覚えは御座いません。」

「さうですか。」と言つたが、言葉は咽喉につまつた。「それでは聞き違ひでしたか知ら。」

彼は受話器を掛けてぐつたりと椅子に腰を掛けた。ロザリーは嘘を言つたのである。彼は娘に欺かれたのである。何の爲に彼女は嘘を言つたのであらうか。

言ふまでもなく或る男が蔭で操つて居るに違ひない。それより外に解釋のしやうが無かつた。男は世間見ずの若い女をだまして、彼と會合する爲に、父にまで嘘を言はせる程に誘惑したのでだ。

グリコーテンスは烈しく立上つて、拳を握つて振り廻した。世の中には何といふ悲惨事が澤山あることであらうか。何とかして彼は取返しのかねることにならぬ前に巧く喰止めなければならぬ。

娘をこんな風にしたのは確かにローガンと言ふ青年であるに違ひない。老いたりといへども、眼に物見せて呉れようと、彼はきつぱりと決心したのである。

それから彼は額に皺を寄せ、心配さうな顔付きをして部屋の中を彼方此方歩き廻つた。

第二章 變つた慈善家

老グリュートテンスが娘の秘密を發見をした翌日、二人の男がヤコブ教會の前のクングストレード公園に立つてゐた。二人ともまだ二十五前後の若さで風采は全く異つてゐた。一人は著しく北歐型の脊のすなりとした美髪の男で、確かに立派な容貌をしてゐた。このアッサー・ビルネルは友達仲間で非常な腕力家として知られてゐたが、一方に於いてその落つた態度も人々の評判となつてゐた。ところが今日はいかにも落つかない様子をして居た。

彼はもう一人の男に向つて脅すやうに一步近づきながら、拳を固めて殴りかけようとした。彼の青い眼は輝き、友のジョン・ローガンに向つて聲を慄はせて言った。
「君は拘摸だね。」

かう言ひかけられた男はビルネルよりも四五寸短か、つた。髪と眼は黒色で黄色が、つた蒼白めた顔は綺麗に剃刀が當てられてあつて、非常に瘦せて見えた。飛び出た額、曲つた鼻、がつしりした顎は、聰明、勇氣、決斷の相を示してゐた。

ジョン・ローガンは、この侮辱の言葉を聞いても少しも顔色を變へなかつた。彼は靜かに懐中時計を取り出して、教會の時計と比べて見た。それから彼は瞬きもせず相手を眼をちつと見つめた。

「ほう。」と彼は憎らしい程、落ちついて、微笑を浮べながら言った。さうか知ら。餘りありがたい言葉ぢやないねえ。」

「さうさ。君は正真正銘の拘摸だよ。」

「拘摸だけで幸福だ。」

「どうだか。今のお手際ではどんなことだつてやり兼ねないだらう。」

「御冗談でせう。」

「どうして〜。拘摸を働く人間なら、他の犯罪もやり兼ねないよ。」

「珍らしい論法だねえ。」

「ちと恥を知りたまへ。」

「残念ながらそれは出来ないねえ。さういふ言葉は僕は嫌ひだ。僕は名譽ある稱號を得ることは決して喜ばないんだ。僕はむしろ株屋か戦争ごろにでもなりたいたいんだ。」

「けれど僕は君が寶石店でダイヤモンドの指輪を盗つたところをこの眼で見たよ。君は僕と番頭の眼の前で盗んだぢやないか。」

ジョン・ローガンは大聲を出して笑つた。

「いかにもお言葉の通りだ。」と彼は言った。「あの寶石商は去年一年に利子だけでも百萬から儲けてゐるよ。だから是位のことは何でもないんだ。」さう言つて、彼は落つて巻煙草をケースから取り出しながら火をつけた。君の今の様子ではとても喜ぶまいから、君の品物には手を掛けぬ心算だよ。」

アッサール・ビルネルは地團太を踏んだ。

「い、加減にしないか。」と彼は叫んだ。「では君はほんたうに盗んだんだね。」

「さうさ。君の見た通りさ。指輪はポケットにあるよ。」

「恐しい奴だね。正義の爲に警察へ訴へよう。」

「後悔の種だから止したまへ。が、無論君がそんな野暮なことをする人間でないことはよく知つてを。實は指輪を盗る時、わざと君の眼に附くやうにしたんだよ。こつそり盗む位は朝飯前だ。」

「法螺吹きだねえ。」

「さうか知ら。君の外套の隠しを探つて見たまへ。」

かう言はれてビルネルは慌て、ポケットに手を入れ、取り出して見るとそれは眞珠を眞中にしてダイヤモンドを周囲にはめた美しく小さい首飾であつた。

「これは……」と彼は驚いて叫んだ。

「つまり、僕が君の眼に附かないやうに盗ることが出来るといふ證據を、お眼にかけようと思つただよ。」

かう言つてローガンは笑ひながら、首飾りを相手の手から取つた。兎に角こんな處に立つてゐては人の眼につくから、僕の家へ来たまへ。君の満足する説明をするから。」

「いや〜。君の家の敷居は二度と跨がない。」

「そんな氣の小さいことを言ひたまふな。どうしても君と話さねばならぬことがあるのだ。實はかうして僕の祕密をわざと君に報せたのもその爲なんだ。」

「君の祕密をこれ以上、打明けて貰ふことはありがたいが、僕は著述で飯を食つてゐる貧乏人だよ。だから大抵なことを我慢しなければならぬが、拘摸だけはどうしても我慢が出来ない。」

「さうとも〜。僕だつて自分の爲には拘摸は働かないよ。」

「まあ聞きたまへ。かうして僕の手先に附いて来たすべてのものは、社會の落伍者となつて、苦悶の中に目を送つてゐる者を助ける爲に使ふんだよ。これで僕特有の方法と僕特有の理由とが君には分つたらう。若し君が僕のこれから話さうと思ふことを聞いて呉れたなら、きつと成程と思つて呉れるに違ひない。」

彼はビルネルの腕を取つて歩き出した。ビルネルは厭々ながら引張られて、ノルヂスカ商會の方へついで行つた。

「まるで夢だねえ。」とビルネルは言つた。

「僕の最も尊敬する君がこんな……」

「もう止して呉れたまへ。聞きたくないよ。君は僕の所へ來るのが厭であるらしいから、君の所へこれから行かう。三十分話すなら君の意見はきつと變るよ。」

ビルネルは疑ふやうな顔をして肩をすくめたが、最早や反抗はしなかつた。間もなく二人はクラ、ベルク街の、ビルネル青年の下宿で對座した。

「さあ、これから白狀するからよく判斷して呉れたまへ。」とローガンが言つた。

「僕は何も君の祕密を聞きたいとは思はぬ。」とビルネルは簡單に答へた。

「然し僕は君の意見が聞きたいんだよ。君にいはゞ僕の手のカードを見せたのは立派な理由があると云ふことを察して呉れるだらう。僕は聰明な健全な人の、僕及び僕の行爲に對する判斷が聞きたいん

だ。僕が打明けたいと思ふ人は君より外にないんだ。」

「痛み入るねえ。では兎に角辛抱して君の懺悔を聞かう。だがその前に君のその理由といふのが聞きたいねえ。君には良心の呵責といふものがないかね。」

「ないよ。僕が自分で信じてやる間は少しもない。が他人から見れば無論、解釋も違ふだらう。」

「君は他人の考へ方を少しも考へない術を持つて居るらしいねえ。」

「今までは少なくともさうだつた。然し昨日から違つたよ。僕は昨晩美しい女と一緒に居たが、その女は純な無邪氣な……」

「女が君の意見を變へさせたといふのかね。」とビルネルが口を出した。「君はその女を戀して居るのかい。」

「冗談は止して呉れたまへ。」とローガンは眞面目な顔をして答へた。「戀してゐる？ 戀してゐるとも死ぬ程戀してゐる。」

「で先方は戀を容れて呉れたかね。」

「さうよ。そこで僕はこの話の最も肝要なところを話すが、僕は僕の妻となる女にはどんな秘密も持たない心算だ。けれど僕は彼女が不愉快に思ふやうな、又、怖れを感じるやうなことを話して、僕の手を離れてしまふやうなことはしたくないんだ。だからその前に君の意見を聞きたいんだよ。」

「それはありがたい。では君の良心は幾分か軽く感じるだらう。喜んで君の話を承はらう。」

「さて、そこでだ。僕は、この世の中のこと、いふものはどんなに人間が力を盡したつて、それは結局無用であつて、人間は唯、盲目的な運命、氣まぐれな偶然にのみ支配されるものだ」と確信してゐるのだ。だから何方を向いて見ても悪事が報いられたり、善事が罰せられたりするやうな矛盾した事實を日常見て居るのだ。僕はこの不公平を無くする爲に、人知れず正義を行つてやりたいと思ふのだ。これがつまり僕をして慈善家とならしめた所以なのだ。」

「君の年で慈善家とは。」

「成程、不思議に聞えるかも知れんが、然し僕はこれまで、随分變つた生活をして來て、時には非常に不愉快なことをも忍んで來たよ。十七歳の時に僕は両親を無くして、アメリカへ出懸け、最初貧いどん底に落ちてあはれな生活を送つた。その時に僕は貧民といふものがどういふ悲しい生涯を送つてあるかといふことをしみく知つたのだ。僕はむしろ好んで饑ゑること、凍えること、缺乏に堪へることを経験したよ。そしてその時、僕は若し將來頭を上げるやうなことがあつたら、貧民救助に身を捧げようと思つたのだ。」

今僕はこの慈善を二様の方法で行つてゐる。その一つは直接貧民へ宛て、又は慈善事業に匿名で大小の金額を寄附し、今一つは時々貧乏人の中へ交つていろくの忠告を與へ、彼等を慰めてやつてゐるんだ。」

「君が貧乏人と交つてゐる姿は一寸想像に浮び兼ねるねえ。」

「僕が貧民窟へ行く時には今のやうに髭を剃つたり、片眼鏡を掛けたり、立派な風装をしたりしては行かないよ。一度僕は芝居の下役をしたことがあるから扮装することは上手だ。大抵の探偵には負けない心算だ。自分の姿を變へると言ふことは非常に面白いものでねえ。貧乏人の所へ行く時は貧乏人のやうな風をするんだよ。そして誰が一番苦しんでゐるか、誰を至急に助けねばならぬかといふことを探し、一方では餘り物を取つて来て、それを與へて喜ぶ顔を見るんだよ。」

「それは慈善方法としては誠に立派な方法だが確かに危険だねえ。」

「危険などを僕は少しも恐れてゐない。恐れなければかりか、むしろ歓迎するよ。青白いこけた頬に笑ひの浮ぶのを見たり、絶望の眼に喜びの光を見る程、僕に取つて喜ばしいことはないのだ。だから僕は僕獨得の理由でその慈善を行つて行くのだ。君は僕を良心のない犯罪者だと言ふかも知れぬ。が、すでに僕も法律の網をくゞつて居る以上、さう言はれても仕方がない。」

アッサール・ビルネルは何もかも打明けた友の顔を當惑顔で眺めた。二十世紀の秩序ある世の中で法律を無視して行動するとは何といふ奇人であらうかと彼は思った。

いかにもその動機は美はしいけれど、兎に角ローガンは間違ひもなく犯罪者である。さうして彼が今語つたことが一言一句間違ひないとはどうして斷言出來よう。彼の商賣は辛うじて收支が償ふ位であるのに、彼はいつでも澤山の金を持つてゐるではないか。

「實際君は自分自身の爲にはさうしたことを行はないんだね。」とビルネルは疑ふやうにたづねた。

「君は僕の言ふことを信じないと見えるねえ。」とジョンは顔を曇らせて答へた。さういふ方法で得た金は最後の一錢まで、慈善に用ひると先刻話したぢやないか。僕自身の使ふために持つてゐる金は堂々たる方法で儲けたものだよ。その事は後程君にお話ししよう。

僕の慈善の方法に對する證據として、僕は、その一例を君にお話ししよう。君は新聞で此頃中、集まつた慈善事業の寄附金の中へ二萬クローネといふ大金を匿名で寄附した慈善家を知つてゐるだらう。

あれは實は僕だよ。無論取り次いだただけだがね。つまりほんたうの出し主はあの貪慾な高利貸のベルンソンさ。」

「さうく。ベルンソンはついこの頃、紙入れを盗まれたねえ。あの時は僕もあの場に居合せて僕等はみんな不愉快にも身體検査を受けたぢやないか。」

「さうだよ。あの身體検査は僕が言ひ出したことだよ。」とローガンは笑つて答へた。

「だつて君は彼處にゐなかつたぢやないか。」

「あつた。無論違つた姿をしてゐたがね。いやもうあの太つた高利貸が財布を拘られた時の面は實にいゝ見物だつた。」

「さうく。あの時、白髪の爺さんが身體検査をして貰はうぢやないかと言つた。確かその爺さんは監督さんと呼ばれてゐたよ。」

「あれが僕だつたんだ。あの姿の僕を町の人はよく知つて居るんだよ。あの窃盜は君も知つてる通り

大變な評判になつて絶對に不可解だとされてしまった。高利貸は探偵のレオ・カリングに事件を依頼しようと思つたのだが、あの人は昨今獨逸に滞在してゐるので留守なのだ。犯人を僕たと見抜くのはあのより他にはない。

「兎に角珍らしい事件だつたよ。」とビルネルが言つた。ベルンソンは辯護士のズッフエルトと一緒に這入つた時までは確かに紙入れはあつて、念の爲に押入れの中を覗き込んで再びポケットの中へ入れ、それからカフェーへ來た時に突然失くなつてゐることを發見したと言つたねえ。確か千クローネの札が二十枚だつたねえ。

「その通りだよ。紙幣の番號を記しておかなかつたから警察でも手のつけやうが無かつたのだ。」

「何でも辯護士のズッフエルトが有力な嫌疑者に目されて、もう少して逮捕されるところぢやなかつたかい。」

「さうだよ。併し巧く逃げてしまつたよ。あの男は如何はしい男であつて、嫌疑を受けるのも、これまで暗い生活をして來た罰だよ。」

「さう言へば高利貸も同情を引かない男だねえ。第一あの身體の肥え具合や水々した眼つきなどがいけないよ。」

「ありや悪黨さ。」とローガンは無情な態度で言つた。「つまり法律の手では何ともすることの出來ぬ悪黨の一人さ、今ぢや三百萬ばかりの財産だが、これまでにどれだけの人を泣かしたり、殺したりし

たか知れないよ。奴から少しばかりの金を盗つて貧民に恵んでやつたとて犯罪とは言へなからうぢやないか。」

「そりやまあさうかも知れないが。」とビルネルは少し躊躇して言つた。「それにしても拘捕は拘捕だからねえ。それはそれとして君は一體皆の前でどうやつて拘つたのだ。」

「そりや極めて簡単に。尤もチャンスのお蔭だね。僕は高利貸とズッフエルトと殆んど同時にカフェーへ這入つたのだ。外套をかける所で僕はあの男が如何にも勿體なさうに紙入れを取出して、それからポケットへ入れた心算で下へ落したのを見つけたのだ。そこで僕はそれを拾ひ上げようとすると、辯護士の奴め、僕より先へそれを拾つて自分のポケットへ入れてしまつたのだ。高利貸はそれをも氣が附かなかつたのだ。そこで僕は考へたねえ。一つ僕も腕を働かせて見よう、と決心したのだ。それから二人はカフェーで坐つたが暫らくすると辯護士は何か外套の中へ忘れて來たからと言つて外套をかける所へ行つたのだ。これはついきり今の紙入れを隠す心算だらうと思つてついて行くと、驚いたことに奴は只外套から煙草入れを取出した切りなのだ。然しその満足した顔つきからして僕は奴が外套の中へ紙入れを入れたと思つたんだ。再び歸つて來ると二人は世界戦争の話をし續けてゐたが、僕は傍にゐたから、何もかも聞き取ることが出來たのだ。ベルンソンはその時新聞に出てゐた戦争を讚美する歌を歌つたが、辯護士は全く反對の考へを持つてゐたと見えて、少し嘲るやうな口調で、「君は近頃大分儲けたと見えるね。」と訊ねるとベルンソンは如何にも満足げに、「さうとも。」

「今日も一手で二萬クロネを儲けたよ。」と言ひながら手を無意識に紙入れの方へやつて、はつと驚いたねえ。まるで何かで殴りつけられたかのやうに眞蒼な顔をして額に冷汗を流しながら、手を慄はせてよろ／＼と立上つたよ。

そこで僕は老人の面喰つた顔が見たくないのだから關へ出たよ。ヒイッといふ叫び聲に外套を番してある男はカフエーの扉の所へ走つて行つたのでその留守を見て早速働いてそれから便所へ何喰はぬ顔して、行つたよ。紙入れだけはすたく／＼に裂いて便所へ流してしまひ、札だけをまんまとポケットの中へをさめたよ。」

「恐しくすばしこいことをやつたものだねえ。」とビルネルが言つた。

「何、是などは何でもない事だよ、逮捕されるといふ危険は全くなかつたから。折があつたら又随分烈しい冒険の話もしよう。若もお望みなら君と一緒に懸けて一寸した冒険をやつて見てもいゝが。」

「いやもうそれだけは澤山だよ。」

第三章 ローガンの最初の事件

ジョン・ローガンは新しく巻煙草に火をつけて愉快さうに煙の輪を天井へ吐き出した。彼はビルネルに白狀して重荷が下りたやうに感じた見え非常に晴れ／＼した顔になつた。

「一體何日からそんなことをやり出したのか。もう長いことやつてるのかい。」

ローガンは暫らく考へて、やがて言つた。

「抑々のはじめは非常に面白い冒険だったが、もう少しでやり損なつて了ふところだつた。全くほんの偶然のことからやるやうになつたのだ。其時程偶然といふものに左右された仕事はその後一度もなかつたよ。恰度今から三年前で、アメリカから歸つて来た早々でもうそれまでには度々貧しい財布の底をはたいて貧民に施して来たんで、知人の富豪から金を出させようとしても何もかも失敗に終つたんだ。中にも豪商のベルトマンは少くとも二十萬の年收がありながら、鏝一文も寄附しない人だ。」

「あゝあのベルトマンか。随分無情な男ださうだね。何でも今ぢや、人を嫌つてとぢこもつて居ると言ふぢやないか。」

「それは僕がこれから話さうとする事件が起つた後からだよ。その以前は非常に社交的な男で、愉快な生活を營んで極めて享樂的だつたのだ。しかしお話にならぬ吝嗇家で、自分のことより外考へない我利々々亡者だよ。」

「だが世間では非常な慈善家のやうに言ふぢやないか。」

「さうさ。さういふ評判になつたのも實は僕がさうしたのさ。つまり僕の爲に精神の大打撃を受けて別人になつてしまつたのだよ。僕が何度貧乏人を助けてやつて呉れと言つてもいつも鼻であしらつてゐたのさ。或る日、僕が街を通つて居ると、見すばらしい、顔色の悪い女が近寄つて来て物乞ひをしたよ。それは吹雪のする寒い／＼日で、その子は齒をがたく／＼と慄はせてゐたよ。「母ぢやんが病氣だ

のに食ふものも焚くものもありません。」と悲しきうに言ふぢやないか。そこで僕はそれがほんたうかどうかを確かめる爲にその子について行つて見ると、嘘ではなく母親は病氣で寝て居つて、なほその他に寒い暗い部屋の中には四つになる男の子が腹を空らして泣いてゐるぢやないか。その時僕は五クローネしか持つてゐなかつたのでそれで差當り入用なものを買つて、明日はもつて来てやると約束して其處を出たのだ。ところがどうして金を造つていゝか、僕にも見當がつかないので、二三人の朋友をたづねたが、誰も持つてゐなかつたのだ。すると偶然僕はスケートに行きかけのベルトマンに逢つたから、もう一度僕はあの頑固な心をやはらげて見たのだ。無論それは不成功に終つたね。奴は僕が自分の金を乞食に來たのだらうと言やがつたよ。そこで止むを得ず僕は初めて、君の言ふ犯罪と名のつくものをやつて見ようと決心したのだ。約束を違へないやうにするには、どうしても金をこしらへねばならぬ。それにはベルトマンの奴に出させてやらう。かうして僕は奴を槍玉に上げようとしたのだ。

僕は、奴がさういふやうな娛樂にでた晩にはいつも酔つぱらつて、深更に歸つて來ることをよく知つてゐたものだから、その晩僕は奴の家へ這入つてやらうと決心したのだ。私は顔を見ないから知るまいが、僕と奴とは姿が似て居つて髪の色も黒ければ脊の高さもほとんど同じだから、奴に扮するのは何でもないことだ。あの黒い鬚をまねるにはつけ鬚をすればわけはない。つまり僕はスモーキングを着てベルトマンになり済ましたのだ。それはいざと言ふ場合に女中や家政婦に出逢つた場合の用

心にしたので、合鍵やその他二三の窃盗用の道具をたづさへて、いよく奴の家にでかけたんだ。中に這入るのは造作もないことであつて、這入つて見ると、廊下や食堂は眞暗で、ベルトマンの事務室からは弱い電燈の光が戸の隙間から洩れて來たのだ。多分それは街燈の光が窓から這入つて來たのだらうと思つて、中へ這入つて見ると、そのとたんにパツと懐中電燈が目の前について、じやらじやら聲で『手を舉げよ。』とどなるぢやないか。僕は思はず手を舉げてしまつたね。見るとマスクをかけた男がピストルを僕の方へ向けて如何にも輕蔑したやうな聲で、『やい貴様はちと早く來すぎたよ。俺が仕事してしまふまでは動いてはならぬぞ。さあ、あの椅子に腰かけて居れ。』生憎僕はピストルを持つて居なかつたので、先方の言ふ儘になるより仕方がなかつたのだ。やがて僕は丈夫な繩で椅子にしぱりつけられたが、マスクをかけた男はベルトマンの金庫の方を向いて、やがて言つた。『もう直にこの錠をあけるからその間だまつてゐてくれよ。もし聲を出すならうち殺してしまふぞ。』察してもくれるだらうが僕の立場はあまり氣持のよいものでもなかつたよ。腰かけながら一流の盗人が僕の代りに仕事をして居るのを見て居るなんてね。その實僕もベルトマンの金庫を開けに行つたわけなんだが、しかしさうして盗人の遣り方を見て居つた時、窃盗と言ふむづかしい技術についてかなり多く學ぶ所があつたね。奴は實に巧妙で、如何にも手早く且つ音も立てずに仕事をしたよ。何しろ名にし負ふホルゲル・チムだからね。』

「なに、チムだつて。それで思ひ出したよ。奴はベルトマンの家に盗人に這入つてつかまつたぢやな

いか。」

「さうだよ。其處が中々面白い話さ。全く思はぬ結果に立ち到つたからね。しかも僕は何等それには關係なかつた。僕はその時、その氣味の悪い困難な立場からどうしたら逃れ道を見出す事ができるだらうかと色々頭をなやましてゐたのだ。この盗人はやがて金庫を開けて僕を放つて行くに違ひない。ベルトマンはその中に歸宅して金庫の開けられた事と自分の替玉が椅子にしばらくつけられてるのを見るに違ひない。僕がベルトマンの家に居ると言ふ當然の理由がないから、無論僕が犯人と思はれるか又は共犯者として逮捕せられるに違ひない。殊に氣の毒なのは僕が助けてやる約束をしたあの貧民を飢ゑさせてしまはねばならない事だ。かう考へると僕はあまりに大膽な僕のやり方を後悔せざるを得ないやうになつて來たんだ。そこでいつそこれは目の前の盗人に事情を話した方がよからうと決心して將に口を開かうとすると、突然、扉が開いて二人の警官がピストルを向けて這入つて來たではないか。見ると其後にはベルトマンの家政婦が立つてゐた。警官の一人は、ピストルを向けられて驚いて立ち上つたチムに向つて、『いよくつかまへたぞ。』と言ひ、もう一人の警官は僕に向つて『ベルトマンさん、恰度い、時に來ましたでせう。どうか御安心なすつて下さい。』それと同時に老家政婦は人間離れのした聲をして僕の方へ駆けつけ、僕の膝を抱いて息をはずませて言つたよ。『まあほんとによかつた。廊下の錠のがちやりと言ふ音を聞いたんで、よう側へは來ませんでした、臺所の扉から滑り出して、恰度都合のよい事にお巡査さんに會つたのです。』さうしたわけで盗人はその場で捕

まへられ、僕は自由の身になつたのだ。恰度都合のよい事に警官達の這入つて來た時に、盗人は金庫の扉を開く事ができたのだ。もう少し遅かつたら無論金は持つて行かれた所だつたんだ。警官の一人は何か失つては居りませんでしたかと言つて物珍らしさうに、金庫を覗き込んだので、僕は、何も取られては居ない、と言つて手厚く感謝の辭を述べると、やがて警官は盗人を連れて立ち去つたんだ。家政婦は非常に正直な女で、うれし泣きに泣き出し、階下へやるのにずるぶる骨が折れたよ。しかしそれから間もなく僕は金庫をさらへてあるだけの金、凡そ數千クローネを盗み出して逃げてしまつたよ。それから間もなく眞物のベルトマンが歸つて來て盗みの行はれたのを發見して大騒ぎをしたんだ。家政婦は先刻警官に何も盗まれてゐないとおつしやつたではありませんかとつ、こんだので、かへつて彼は家政婦を逮捕させて、殊に二人の警官達の言葉から共犯者としてしまつたんだ。

多分君は覺えてるだらうが裁判は實に滑稽であつたよ。ベルトマンが法廷にあらはれた時、人々は彼の精神状態如何をうたがひ出したよ。殊にその晩酒に酔つてくはしい事を覺えてゐなかつたので、到頭彼は醫者の手に渡されて、診察の結果、アルコール中毒ときめられてしまつたのだ。それ以來彼は禁酒黨となつてしまひ、遂には熱心な宗教信者となり、今では君も知つての通り大變な慈善家に變つた。それと言ふのも皆僕のした仕事なんだよ。だから僕のかくれた仕事如何に世のためになつたかを君も今初めて知つただらう。」

アッサール・ビルネルはローガンの話をだまつて聞いてゐた。彼は彼と近付きになつてから三年に

なるが、初めから何となく彼にひきつけられるやうに感じた。二人はほとんど毎日顔をあはせ、ますます親密な友達となつた。しかも今この友達が突然彼の前に二重生活を営む人、色々な姿になりかはつて窃盗をさへ働く人として現れたのである。しかもローガンはまるで世間普通の事を話すかのやうに何もかも打ち明けてしまつた。

「ずる分驚いたらしいね。」とジョン・ローガンは言つた。「君は僕を定めし危険な人物と思ふかも知れない。しかしそれは君がまだ僕の觀念をよく了解しないからだ。」

「正義の觀念だつて。恐らくそれを素直に了解する人は餘り澤山はあるまいね。若しこの我々の秩序ある社會で、澤山の人々が自分勝手に理論から、勝手に行動をして甲の人から金を奪つて乙の人に與へるやうな事をしたら、世の中はまるで滅茶々々ぢやないか。」

「いや大丈夫だよ。これはたゞ僕一人限の解釋で、誰一人行つてはゐないからね。少し自慢が交るかも知れんが、かうした手先の仕事をするには僕のやうな特殊の才能を備へたものでなければできないからね。かう言ふ事のできる男は僕の知つてる限りでたつた一人他にあるきりだ。しかしその男はその才能を別の方面に働かしてゐるのだ。即ちその男はその才能を法律と言ふ固苦しい範圍の裡で活動せしめてゐるのだ。」

「それは誰かね。」

「私立探偵のレオ・カリングだ。」

「君はあの人を知つてるかい。」

「よく知つてゐるよ。僕の知つてゐる中で最も愉快な男だよ。ことに僕にとつて興味のあるのはあの人が僕にとつては危険だからさ。しかしあの人も慈善と言ふことに關する僕の理論に同意するかも知れん。君は肩をすくめるが、とにかく一度でいゝから僕と一緒に、病氣や貧乏に苦しめられてる家へ來て見たまへ。おそらく君はその光景にぞつとするに違ひない。昨晚君が僕等と一しよに居てくれたら、ずる分かはつた所をお目にかける事が出來た筈だ。」

「僕等つて。誰と一緒に居たんだい。」

「先刻君に話した若い婦人さ。あの人は僕が知つてる最も優しい心の女だよ。前から貧民窟へ連れて行つてくれたのまれてゐたが、僕は容易に連れて行かなかつたけれど、到頭昨晚連れて行つたよ。目の前に貧民の苦しい有様を見て、彼女はすぐ様持つてるだけの金をやつてしまつた程動かされてしまつた。」

「そんなに金持かい。」

「さうだ。しかし未だ年が若いから元締は無論そのお父さんだが、そのお父さんが又非常に親切な慈善心に富んだ人なんだ。」

「それでは君は先方では評判がいゝ譯だね。」

「いやまだ僕は會つた事がないんだ。けれど二三日の中には訪問するつもりなんだ。」

「結婚の申入れか。」

「冗談言つちやいけない。そんなにまだ深入りはしてないんだ。」

「僕も君に従って行つて君の慈善事業を日撃したいのは山々だ。それは兎に角、君が今金を取りに行かうと言ふ心當りのあるのはどんな人々かね。」

「まづ高利貸が主だね。ブラック・リストはすつかりつまつてゐるよ。」

「君はまるで探偵のやうな話方をするね。まるで法律の祕密の保護者のやうな立場ぢやないか。それにもかゝらず君は法律の埒外に立つてるんだね。」

「そこが臆て僕の強みで素人探偵として既に相當の腕を發揮したよ。僕の手下は皆僕の主義の共鳴者だよ。既に僕はこれまで警察が解決のできなかつたやうな刑事事件を度々解決したことがある。」

「聞けば聞く程驚く事ばかりだね。」

「それでは君は探偵であると同時に……」

「犯罪者と言ひたいんだらう。」と、ローガンが口を出した。「いかにも其通りだ。探偵であつて同時に犯罪者である事は突飛ではあるが、相互に補ふことが出来て、別々ではとても出来ないやうな驚くべき仕事ができるからね。しかしこれは皆正義の爲だと言ふ事を忘れて呉れ給ふなよ。」

「何故君は今までのこの事を僕に隠してゐたんだね。」

「實は君の、友情をためして見ただけさ。」

「その結果は。」

「充分満足したよ。たとひ君が僕を法律上の所謂犯罪者だと判断して僕にそむきもしなければ、警察に密告することもない事が分つたよ。君は僕が貧民のために缺くべからざる神様である事を知つて呉れるだらうからね。」

「いかにもその通りだよ。」とビルネルは言つて彼の方へ手をさしだした。

「君は他の人間を測る物尺で測つてはならない人間だ。」

「遂には君が賛成してくれるとはかねて覺悟してゐたよ。」と友の手を強く握りながらローガンは答へた。「君が僕を道徳的の立場から判断すべきでないと言つてくれるのは實に嬉しい。」

「君の動機は如何にも美しいが、しかし君の方法に賛成する人間はあまり澤山はあるまい。」

ジョン・ローガンは深く考へ沈みながら部屋の中をあちらこちら歩いた。

「さうだ。その點だ。だから彼女に話してはいけないかも知れない。」と彼はつぶやいた。「彼女はきつと君のその方法に賛成するに違ひなからう。兎に角こゝろみて見たまへ。試験するだけの價值はあるよ。」

ローガンは机の前に立ち止つて深い考へに沈みながら全く機械的に机の上にあつた一枚の新聞を取り上げてそれを擴げた。所がそれにちらと目を通すなり彼は息づまつたやうな叫聲を上げてひよろひよると後退りした。

「大變だ。ほんたうかしら。」と彼は叫んだ。

「どうしたんだ。僕もまだ新聞は見なかつたよ。」とビルネルはたづねた。

ローガンの肩越しにうつむきながら、彼は次のやうな太い活字で書かれた記事の標題を讀んだ。

驚くべき窃盜殺人

骨董商グリユーテンス氏は自宅で殺され犯人はその場で逮捕された。

「グリユーテンス。君はこの人を知つてゐるかね。」とビルネルはたづねた。

「いや。」とローガンは少し曖昧な調子で言つた。「直接會つた事はないが、噂は聞いてゐる。評判のいい人だ。まあよく記事を讀まうぢやないか。どんな奴が殺したのかしら。」

記事はすこぶる簡單で次のやうにかゝれてあつた。

眞夜中にグリユーテンスの家の臺所の戸が開かれてゐてその前に一人の酔つぱらひが寝てゐた。人が良く家の中を調べて見ると驚いた事に、骨董商は金を盜まれた上殺されてゐた。すべての事情はその酔つぱらひの男が加害者であるやうに思はれた。一夜中かゝつて彼に對する證據はますます擧げられた。所が本人は頑強にそれを否定して、決して殺人に關係もなく又死んだ人にも何の關係もない事を主張した。本人の話す所によると、骨董商の令嬢に昨晩街で偶然會ふと、令嬢は彼をすゝめて家に來らしめパンと酒を與へ、かつ金を與へたのであつた。その男は二十五歳でズーネ・ビルンと言ひ、職を失つた風來坊であつたのである。

「ヤツ、ズーネ・ビルン。あゝ、それこそきつと僕の兄弟にちがひない。」と、アッサールは聲を喚らして叫んだ。

第四章 謎

ところが、ジョン・ローガンは、ビルネルの叫聲が聞えなかつたらしく、まるで新聞の記事が初から終りまで分らぬかのやうにぢつと新聞を見つめてゐるだけであつた。

「何と言ふ事だ。何と言ふ事だ。」とローガンは遂に呟いた。

さうして更に低い聲を出して、語記でもしようとするかのやうに記事を読み初めた。

「實に驚いた。いや實に大變だ。」と彼は讀み終つてから叫んだ。

「君はどうして大變だ。」とビルネルはたづねた。「どんな事があつても、僕ほどの打撃を君は受けない。君は今僕の言つたことを聞かなかつたか。このズーネ・ビルンと言ふのは確かに僕と兄弟だよ。」

ジョン・ローガンは飛び上つて、驚いた顔で相手を見つめた。

「君と兄弟だつて？ 君は今まで一度も兄弟があるとは言はなかつたぢやないか。」

「それはさうさ。しかし君は僕がこれまで一度も僕の父の事を話したことも聞かなかつたらう。つまり話さぬ方がよい譯があつたんだよ。」

「かうなつたら何もかもお互ひの祕密を言つてしまはう。」とローガンは言つた。「君は君で僕の驚い

たことを不審に思ふかも知れんが、實は昨晚僕が連れ立つたその若い女と言ふのが、この新聞に出てあるグリューテンス嬢だよ。」

「なに？ 殺された骨董商の娘さんだつて。」

「さうなんだ。」

「新聞で見ると、お嬢さんが加害者を家へ引張りこんだとあるぢやないか。」

「そんな馬鹿な事はない。」とローガンは叫んだ。「僕は彼女と八時半頃まで一緒に居たんだ。それから僕は彼女を自宅まで送り届けて別れて来たよ。無論それだからそれは加害者の作り話さ。兎に角僕はもつとこの事件を深く調べて見よう。」かう言つて彼はしばらく顔を曇らせて黙つて居たが、やがて言つた。「兎に角これからあの人を呼び出して聞いて見よう。」

彼はそこでグリューテンスの家へ電話をかけて彼女を呼び出してくれるやうに頼むと、先方の電話口へ出た人は、「お嬢さんはあまりに以外な出来事のため神経をいため、醫者が睡眠薬を與へたので只今眠て居られるから、今二三時間は起してはなりません。」と答へるのであつた。

「あなたは何方ですか。」と彼はたづねた。

「女中で御座います。」

「僕はお嬢さんのお友達です。只今新聞で恐しい事件を讀んだところですよ。殺人を見つけたのは誰ですか。」

「お嬢さんと私とでござります。恰度お嬢さんが昨晚お歸りになつた時でござります。」

「それは何時頃でしたか。」

「確か十二時頃でした。十二時が打つて間もなくお嬢さんは臺所の戸口に酔つばらひが居るから私に起して呉れとおつしやいました。それから間もなく旦那様が殺されてお出でになるのを見つけたのでござります。」

「お嬢さんはほんたうに十二時にお歸りになつたんですか。」

「はあ、御自身でさうおつしやいました。オペラへいらつしやつたんださうです。」

「ふむ、さうですか。いや、どうも有難うございました。今二三時間経ちましたら一度かけて見ます。若し目をさましたら、ローガンから宜しく言つたとおつしやつて下さい。」

「妙だ。」と彼は電話を切つてから死人のやうに青ざめて言つた。「全く妙だ。何か誤解があるに違ひない。」

「さうだね。君が八時半におくり込んだとすると十二時に歸つたと言ふのはをかしい。しかし……」

「しかし何だね。」

「しかし君が別れてから、も一度外出したのかも知れない。」

「馬鹿な。そんな筈があるものか。」とローガンはきつぱり叫んだ。

「君は内密にお嬢さんと婚約したのかい。」

「さうだよ。君だから言ふが、ロザリーさんと僕は固い約束をしたのだよ。」

「不思議だね。」とビルネルは深く考へ込んで言つた。「して見ると僕等二人は偶然に同一の殺人事件で深い痛手を被つた譯だ。殺されたのが君の未来の舅だし、殺したのが僕の兄弟なんだからね。」

「君の兄弟だつて。それはたゞ君が察したに過ぎないぢやないか。第一名前からして君とは違つて居るぢやないか。」

「いや、實は僕は本來は矢張りビルンと言ふのだ。それは僕が四歳の時に死んだ母の名前なんだ。僕は父の顔を知らないばかりか、父の名前さへも知らないんだよ。」

「愈々妙だね。それでは君の父も君の兄弟のやうな悪い性質が有つたのかね。」

「いや、さうとは思はない。少くともさう思ふべき理由はないんだ。僕はたゞ父の名を知らないだけなんだ。今はもつとも死んで居ないがね。」

「父も知らぬと言ふ事は誰でも妙な感じがするだらうね。僕だつたら知れるまで調べないでは置かないが。」とローガンが言つた。

「いや、調べたけれど分らなかつたんだ。」

「しかし生きて居ない事が分つて、その外の事が分らんとは不思議ぢやないか。」

「それは母が秘密を抱いた儘死んでしまつたから分らないのさ。どう言ふわけで秘密にしてゐたのか分らないが、とにかく母は父を誰にも知らさないつもりで居たらしい。僕はやはり、いくら金を出し

てもいゝから、知りたと思ふよ。しかし今はそれよりも兄弟の事が心配でならない。若しほんたうに加害者だつたら大變だからね。」

「君はもう長い事交際はしないのか。」

「二人が八つの時に別れた切りだ。實は僕等は雙兒なんだよ。母が死んだ時に僕等は知らぬ人に引き取られたんだ。母は一文も残しては行かなかつたが、それから十年間と言ふものは毎月きまつて知らぬ人が月々僕等の養育費を支拂つて呉れたよ。それが多分僕等の父らしい人だ。僕等を養つて呉れた人は、母の友達で、親切なお婆さんだつたが、僕等が八つになつた時死んだので、それから二人は別れ別れになつてしまつたよ。僕は或家族に拾はれ、ズーネは外の家で養はれたが、どうもそこで悪い感化を受けたのか、或は生れつき悪い性質を持つてゐたのかも知れぬ。一年経つてから何處かへ逃げ出してしまつて、それ以來僕には何の音沙汰もしなかつたのだ。」

「君は一體發育期にどんな事をしてゐたのか。」

「僕はテレザ・ビルンと言ふ女の人に拾はれたが、その人は非常に親切にしてくれて、僕は幸福だつたよ。その人の忠告で僕は今の名のビルネルに變へたんだよ。」

「それで君は全く八つの時から今まで兄弟の事を聞かなかつたのか。」

「さうとも。だから僕は死んだ事だと思つてゐた。」

「それでは君の父の死んだのも同じく想像だけではないか。」

「いや。それははつきり分つてゐる。」

「君はお母さんの手紙か書類のやうなものは持つてゐないのか。」

「殆ど無いね。たゞ一枚、言はば遺言状のやうな物が有るよ。それは母が死ぬ少し前に書いたので、二人の子供の事が書きつけてあるんだ。その外に母が父に宛て、書きかけた手紙が一本あるが、終ひまで書いてないんだ。しかし父が僕に呉れた手紙を一本持つてゐるよ。それはタイプライターで書いてあつて、父よりと署名してあるだけだから、何の手掛りにもならない。」

「何處の消印が押してあるね。」

「カナダのモントリオールだよ。」

「それが分つて居たら立派な手掛りぢやないか。お父さんは金持だつたのか。」

「どうか知らない。しかし僕等が育つ間金を送つて呉れたから多少は持つてゐたらう。恰度四年前に五千クローネ送つて来たよ。今の手紙を受取つたのも同じ頃だ。」

「一つその手紙を見せて呉れないか。」

「いゝとも。」

ローガンは最初にビルネルの母が書いたと言ふ手紙を讀んだ。それは二十二年即ち彼女の死ぬ一年前に書かれたので、疑もなく、二人の子の父に宛てられたものであつた。しかし初に「友達へ」と書いてあつて、最後に署名がないから、父に宛てられたものであると言ふはつきりした手掛りは無い

やうだつた。手紙は恰度或文句の半分どころで切られてあつたが、内容は置き去りにされた女が心の儘をさらけ出したものであつた。一言も誹謗めいた事は書かれて無かつたが、非常に深い悲哀が紙面にみなぎつてゐて、總ての將來の希望が破られた事が述べられてゐた。そして決して將來は金を送つて呉れるな。二人の母として彼の側に住むことが出来ない以上彼の助けを受ける事は厭だ。しかし自分死んだ場合には子供達の面倒を見て呉れと書かれてあつた。手紙の最後の文句は次のやうであつた。私は貴方が貴方の自由意志で私を捨てたのでない事をよく知つて居ります。貴方は悪い人達の爲に不本意ながら私との仲を裂かれたのです。私達の愛よりもつと強い事が……。」

こゝで手紙は中斷されてゐた。「さうだ。」とローガンは言つた。「此手紙は滿更捨てたものでもない。たしかに重要な證據を與へてゐるからね。お父さんが無理にお母さんから別れねばならなかつたと言ふ事實だけでも大切な手掛りだよ。もう一つの方を見せて呉れ給へ。」

それは確に母が死期の近づいた事を感じて書いたものらしかつた。手は頗るふるへてゐて少しくあやふやな所があつた。最初に二人の子に別れの言葉を告げ、何も残して行くものはないがたしかに面倒を見て呉れる人があるから心配するな。二人は何處までも仲よくしてお互ひに助け合ふやうにしなければならぬ。と書かれ、それから母としての子に對する色々の注意や警告が書かれ、最後に二人の父は姿は見えないけれど全然見棄てたのでは無いから、父を悪く思はないやうにし、又父を探すやう

な事はしてはならない。若し探さうとしても決して分る譯のものでもなく、それには非常な危険が伴つて居る。どんな危険かは言はないけれど、若し父の在所を發見して父に近付かうとすれば、必ず不幸な事が起ると書かれてあつた。

「中々面白い事が書いてあるね。」とローガンは叫んだ。「不幸な事とは一體何だらう。危険とはどんな事だらう。非常に突飛な事かも知れない。」

「僕はそれについて色々考へたが、どうもはつきり分らないんだよ。しかしたつた一つだけ確だと思ふ事は、その危険が直接父から来るので無くて外の方から来るに違ひないといふ事だ。」

「さうかも知れない。つまり両親の間を裂いた人だね。」

ビルネルはうなづいて言つた。

「僕もさう思ふんだ。しかし僕の父に關してまだもつと不思議な事が澤山あるんだ。」

「それは何かね。残らず聞かせて呉れ給へ。」

「今から恰度五年前に一人の使者が僕に小包を持つて來た。何でもある老人が僕の所へ持つて行つて呉れと言つたさうだ。如何にも宛名が僕だつたから、受取つて聞いて見ると、この箱が出たんだよ。」

かう言つてビルネルは机の抽斗を開けて小さな箱を取出した。その箱は褐色の木で出来てゐて、蓋と側面とに印度模様彫刻がしてあつた。

「この箱の中に僕の名になつてゐる三千クローネ以上の貯金帳が入れてあつたよ。」とビルネルは言

つた。

「大變な贈物だね。お父さんから來たのか。」

「さうだ、この手紙が恰度それと同じ時に郵便で來た。讀んで見給へ。」

ローガンが開いて見ると、次のやうに書かれてあつた。

吾子アッサールへ

不幸な運命の爲に直接お前に逢へない事を遺憾とする。然し遂にお前を探し出す事の出來たのは非常に喜ばしかつた。お前は今母の名を名乗つてないので探すのにかなり骨が折れた。お前の兄弟を探さうとかなり骨折つたが不幸にしてまだ見付け出す事ができない。様子を聞いて見ると、お前もズーネの行方を知らないと言ふ事だ。若しお前が彼を發見したなら、カナダ州モントリオールセント・ゼームス街四十七番地辯護士スチーヴンス氏へ直様知らせて呉れ。ズーネはお前と同じやうに腕にある目印を持つてゐるからそれで確に認定する事が出来るんだ。

此處にお前宛に、同時に、少し許りの金を送つて置くから、それで生活の足しにして呉れ。しかしこの箱だけは大切にしてください。適当な時節が來たら、このスチーヴンス氏から私の話を聞

くであらう。同氏には何もかも打明けてあるから、同氏の言ふ事は何でも聞いてその忠告に

從ふがよい。しかし同氏といへども。目の前の障害物が取り除けられない前には、父が誰だと言ふ事をお前に告げないであらう。お前が勤勉な立派な人間になつてくれた事は非常に喜ばしい。將來名を擧げるやうに神様に祈つてゐる。

父より

「ふむ」とローガンは言つた。「如何にも妙な手紙だ。この手紙の中に目印し云々とあるが、それは何だね。」

ビルネルは黙つて右の前腕をまくつてローガンに示した。其處にはトランプのクラブの一の形をした赤い目印しが付いて居た。

「それは痣か。」とローガンが尋ねた。

「いゝや。多分焼いたか又は入墨をしたのだらうと思ふ。兄弟にはこれと同じ形のもものが左の腕にあるんだよ。自分が公然逢ふ事の出来ない子供にかう言ふ印を付けて置くなんて、父は餘程變つた人間だよ。」

「中々賢い遣方だね。」と、ローガンは自信を持つて言つた。「竟り何日かは君達に逢ふつもりがあつたんだ。この印のお蔭で、加害者として逮捕されたビルン君が兄弟かどうか直ぐに分るね。」かう言つて彼はぢつと考へながら、小さな箱を眺めた。此箱の事も妙ぢやないか。お父さんは、此箱に比べ

ると三千クロネ位何でもないやうな口振ぢやないか。だから秘密は此箱に纏つてゐるに違ひない。」

「秘密はもう知れたよ。」とビルネルは答へた。「實は數日前にスチーヴンス氏から手紙が來たんだ。その最後の手紙で秘密が分つたんだよ。」

「それではもう何遍も手紙が來たんだね。」

「全體で四本來たよ。最初の手紙は五ヶ月前、最後の手紙は昨日受取つたんだ。」

「スチーヴンス氏の自筆かね。」

「さうだよ。これが第一の手紙だ。見給へ。此處には父が死んだ事と父の遺書の執行を委任された事が書いてあつて、誤りの無いやうに正當な法律上の手續を踏む事を申出で、最後に兄弟のゼーネを發見したかどうかと尋ねてある。」

ローガンは手紙を非常に精密に検査した。彼は先づ紙をすかして見、蟲眼鏡で製造所のスタンプを調べ、精しく名前を調べた。

「この手紙はスミス・ブレミヤト製の紙に書かれてある。妙だ。實に妙だ。」と彼はつぶやいた。

「何がそんなに妙だね。」

「それは後で話すよ。君はこの手紙にどんな返事を出したのか。」

「僕は出産證明書を送つて、腕にある目印のことを書き、父が小箱を送つて呉れたことを述べて置いたんだ。」

「それからどうした。」

「スチーヴンスと言ふ人は非常に疑ひ深い人であると思つて、次の手紙に確かな證據を得たいから、父の手紙と小箱を送つて呉れと言つて來たんだ。」

「君はそれをしなかつたんだね。」

「さうさ。スチーヴンス氏の疑ひ深い性質が僕には氣に入らないんだ。僕はそんな學校の子供のやうな取扱ひを受けたくはないんだ。しかしその實心は頗る迷つたね。父は一方ではその箱を大切に仕舞つてどんな事があつても人に渡すな。渡せば悲運に陥ると言つて置きながら、一方では萬事スチーヴンス氏に託してあると言つて來たんだからね。」

「それで君はどうした。」

「竟り中庸を取つてスチーヴンス氏に宛て父の手紙の寫しと、箱の委しい模様とを書き送つたんだ。」

「それや中々うまい遣方だ。それからどうなつたね。」

「數日前にスチーヴンス氏から第三の手紙を受取つた。それは實に以外な手紙でね。その中にかう言ふ事が書いてあつたんだ。先づその箱の蓋を開けて前側にある花片を押して御覽なさい。今まで氣のつかなかつた物が出ますから。中から出たものは出来るなら此方へ送つてもらひたい。しかしお嫌だつたらその寫しでよいから頂きたい。もし、その中から手紙が出たらそれを寫眞にとつて送つてもらひたい。又若しその外の物、たとへば鍵のやうなものが出たら石膏の形を取つて送つてもらひたい。」

と書いてあつたんだ。」

「何が出たね。」

「かう言ふものだよ。」

ビルネルが、箱と同じ木質で刻まれてある花片を押すと、ギツと言ふ低い音を立て、底がもち上り秘密の入れ場が現はれた。その中から折りたゝんだ一枚の紙が出て來た。ビルネルがタイプライターで二三行書かれた包紙を開くと、その途端に特有な形をした小さな扁平な鍵が出て來た。

「これは父が書いたんだが手紙とは言へないね。」と彼は言つた。「何が何だかさつぱり分らない。そしてこの鍵は半分しかない。君はこれで何か判斷する事が出来るかね。」

ローガンは鍵をちらと見ただけで、手紙を読みにかゝつた。その初めの部分は次のやうに書かれてあつた。

わが子アッサールへ

若し二本の手紙を繼ぎ合せ、鍵の半分宛を合せながら、吾が二人の息子に關する約束を果した事になる。

かう書いた後に取り止めの無い二三行の文字が竝べて書いてあつた。

ワガウダットヨウユースノニテカネガアレガハコギデハコカニユイジョアルザツユーノアニ
ザンガシテ

そして最後に父よりと書かれてあつた。

「何だいこれは。」とローガンが言った。「お父さんは難しい謎を提供して呉れたね。」

「さうだよ。僕にもとても解けさうにない。」

ローガンは今一度その譯の分らぬ文字の排列を讀んだ。

「お父さんは餘程變つた人らしいね。」と彼は言った。「しかし確かにこの文字の底には非常に眞面目な大切な事が隠されてるに違ひない。正しくこれは子供と母とに與へた打撃を償ふために書かれたもので、しかもそれを表立つて書く事が出来ないんだ。」

「何故だらう。」

「計畫を人に覺られるといけなから。殊に生前お父さんを苦しめ且つ死後お父さんの意志をも拒まうとする力を持つてる人に覺られるといけなから。しかし若し君が僕に委して呉れるなら、多少の時日はかゝるが、この問題を解いて見せるよ。兎に角事の真相が何の關係の無い人に知られるよりも遙かにいゝよ。」

察するところお父さんは君達二人に同じ箱を一つづつ作つたらうと思ふ。そしてお父さんの積りで二人が力を合せてその謎を解かうとすれば容易に解けるやうな仕掛けにしてあるんだ。君はこの手紙のある箱を受取つたが、君の兄弟はきつとまだその箱を確に受取つて居ないんだよ。と言ふのはスチーヴンス氏が兄弟の在處を知らないからね。

さあ、さうなるともう一つの箱は誰の手に有るだらうか。果して誰かこの暗號の手紙を發見してその解決を試みてゐるであらうか。」

「それか、もう既に暗號は解いてしまつて、たゞ全體の祕密を解くために僕のこの半分の鍵を欲しがつてるのかも知れぬ。」

「まさかそんなことはあるまい。たしかに二本の手紙は相互の解式になつてゐるだらうからね。もつとも、ゆつくり時間さへ與へられれば、二通の手紙を合せずとも解けるだらうと思ふ。そこで僕はそれを試みたいと思ふんだ。それを寫させてもらつてもいいかね。」

「いゝとも。」

ローガンは暗號を寫してから、鍵をも圖に書いた。

「この鍵は縦に不規則に切り割つてあるね。」と彼は言った。これは確に二重の廻手を持つて居て、金庫の鍵らしい型だね。」かう言つて彼は鍵をよく調べ、やがて尋ねた。

「スチーヴンス氏から來た最後の手紙は？」

「昨日來たこれだよ。御覽の通りごく簡單に、豫定の計畫を變更して、近日中ストックホルムへお伺ひすると書いてあるよ。だから寫しを送つて呉れとも何とも言つて無い。」

「さうだね。恐らく手紙と一緒にこちらへ來たんだらう。若しつづねてこられたらどうするかね。」

「さうしたら同氏を信用して、この暗號の手紙と鍵とを見せや、と思ふ。」

「いやそれは止したまへ。スチーヴンス氏は君に信用してもらふ事を欲してない。」
「何だつて？ でもこの手紙は同氏が自分で……」

「いや。スチーヴンス氏が自分で書いたんではない。」
「何故。」

「僕はアメリカに居る時分全一年モントリオールに住んだ事があるよ。」
「それで？」

「僕はスチーヴンス氏を良く知つてゐるよ。」

「だつて君の言ふ事は分らんぢやないか。」

「話せば分るよ。ジョージ・スチーヴンス氏は半年前に死んだのだ。死んだ人が手紙を書かう筈がないよ。」

第五章 新事實

スチーヴンス氏が半年前に死んだ！

ビルネルはわが耳を疑つた。彼は驚いてローガンを見つめた。

「そりや君ほんたうなのかい。」と彼は吃りながら言つた。

「ほんたうとも。カナダの新聞に出て居たし、同事務所から僕宛の手紙に、スチーヴンス氏の死後は

リトスンがゆづり受けたと言つて来たよ。それで澤山だらう。」

「けれど死んだ人の名で僕に手紙を書くやうなものは誰だらうか。」

「それのみならずわざ／＼此地へ旅行して、スチーヴンス氏の替玉になつて君を尋ねようと言ふんだ。いやもうその人に逢ふのは非常に面白いことに違ひない。無論その人は君達兄弟が秘密を解く前にそれを知らうと努めて居る人だ。ことによると大きな財産に關係した事で、それをその替玉が奪はうとするのかも知れない。」

だからこの秘密を知るためには、とに角、もう一つの方の箱の中味を見なければならぬ。しかし君の兄弟がお父さんから同じやうな通知を受取つてないとすると、多分君の受取つただけの半分で謎を解いてしまはなければならぬが、それは實に容易な事では無からう。所が替玉のスチーヴンス氏は確にこの秘密の一部分を知つて居て、僕等よりも解決の手掛りを餘計に持つてゐるに違ひない。だから、この替玉を丁寧にあしらつて、事によると僕等の道具にするやうにした方がよからう。少しも疑つて居る様子を示さないで、二本の手紙と鍵とを喜んで見せて、寫しを渡したまへ。もつともその寫しは明日僕がまるで意味をなさぬ暗號を作つて来るからそれを渡すことにし、鍵の代りとしては、金庫の鍵を引き割つて持つて来るよ。それが今施すべき最上の策だらう。」

「成程。そりやい、考だ。しかし君もその時に立合つてもらひたいもんだね。一人きりでさういふ冒険家に逢ふのは氣味が悪いから。」

「無論お手傳ひはするよ。たゞこのグリュエーテンス氏の殺人事件に手間の取らないやうにしたいもんだ。どうも令嬢が事件の渦に巻き込まれたかも知れんので、さうした場合に僕は何をさておいてもあの人を救ひ出さねばならぬ。今度こそは僕の探偵能力を真剣に働かせんければなるまい。これから警察へ行つて殺人の模様を充分調べて見ようと思ふ。」

「僕も連れて行つて呉れよ。」とアッサールは熱心に言つた。「さうすれば、兄弟か兄弟でないかを確かめる事が出来やうから。」

二人が出懸ける前に、彼は印度の箱を机の中へ仕舞ひ込んだ。

「あまりよい保存場所ではないね。」とローガンは言つた。「この箱の中味が一身代あるとすれば、銀行へ預けて置いた方がよいやうだね。」

「ほんたうだ。明日は早々、金庫をかりて手紙とこの半分の鍵を預けよう、箱だけは残しておいて君が書いて呉れる偽物を容れて、スチーヴンス氏の来た時の用意にしよう。」

二人は警察へ行つた。ビルネルを外に待たせて置いて、ローガンは探偵課へ行つて、課長とそれから近付きの警部ザンデルゾンとに會つて話をした。しばらく経つて出て来たローガンの顔を見て、ビルネルは大切な事を聞き出して来たに違ひないと思つた。

「君の兄弟は一八九三年の五月二日に生れたのかい。」とローガンが尋ねた。

「さうだよ。」

「お母さんはエバ・ビルンと言つたか。」

「さうだよ。」

「それでは今捕つてるのは君の兄弟だ。お氣の毒だが最早疑ふ餘地は無い。」

「左の腕の印の事を聞いて呉れたか。」

「無論聞いたよ。小さなクラブの一の有る事は、一件書類の中にさへ書いてある。」

ビルネルは士のやうに蒼ざめた。一縷の希望はローガンの言葉で全く絶えてしまつたからである。

彼の兄弟はまさしく窃盗殺人罪を犯したのである。

「もう白状したらうかねえ。」と彼は興奮して尋ねた。

「いや、頑固に否定して居るさうだ。證據は愈々ますます重つて来たさうだが、飽まで無罪を主張して居るさうだ。殺人どころか骨董商の顔さへ見た事がないと言つてるさうだ。」

「ではグリュエーテンス嬢に連れられて来たと言ふことも相變らず主張して居るだらうね。」

「さうだよ。」とローガンは顔を曇らせて答へた。「いや實に作り話にも程がある。とてもほんたうとは思はれないよ。けれどそれがため反つて自分自身に取つては不利益なんだ。」

「警察はどう言ふ考で居るかね。」

「ザンデルゾン君は非常な残酷な窃盗殺人だと言つてゐる。つまり君の兄弟は骨董商の家に忍び込んで、骨董商が机に腰掛けて居る所を何か重い固いもので打ち下して頭蓋骨を粉碎したんださうだ。もつ

ともその兇器は見付からないさうだがね。それから彼は金庫の中にあつた三千クローネの現金を取り出して成功を祝するため強か酒を飲んだのだ。」

「いや驚いたね。」とッアサールは身を慄はせて言つた。「それでは老人はたつた一人であつた一人で家に居て女中なんかは居なかつたのかしら。」

「女中はたつた一人居るばかりで、気分が悪かつたので早く床につき、眞夜中過に令嬢に起きられるまではぐつすり寝込んで何も知らなかつたさうだ。」

「では令嬢はどうしたんだらう。君と別れてから何をしておたんだらう。その時が八時半だとすると、實際は家の中へ上つて行かなかつたんだらうか。」

「その點は何も聞かなかつた。」とローガンは不愉快な顔をして言つた。「女中も警察の人も令嬢がオベラへ行つたんだと信じて居るらしいんだよ。實はそれは出がけに口實にただだけで、父親に僕と會ふ事を話したくないのでさう言つたまでだ。老人は非常に舊式な人で若い男と外出する事は許さんかからね。」

「令嬢は君にその話をしたかい。」

「うむ。初めてお父さんに嘘を言つたと話したよ。嘘を言ふ事は非常に氣持が悪いから、これから後嘘を言はないでもいゝやうにとて、二人で相談して僕は早々骨董商を訪ねる事にしたんだよ。」

「成程それはいゝ考だつた。けれど令嬢は、君と別れてから女中を起すまでの間何をしておたんだらうか。」

「うか。」

「一まるで探偵のやうに質問するね。」とローガンは額に皺をよせて言つた。「その質問に返答できるのは令嬢より他にはないさ。君を待つまでもなく僕自身が幾度もその質問を心で發したんだが、どうも適當な答を見出すことはできない。」

「僕の兄弟は何時何處で令嬢から家へ来るやうに誘はれたんだらうか。」

「何でもワースト街で話し掛けられて自動車で連れて來られたと言ふ事だ。本人の話によると九時少し過ぎらしい。」

「君が八時半に別れたんだから、それから直ぐ令嬢が外出したとすると、恰度その時間はきちんとなふね。」

「そりやさうだ。けれどあの人は二度目の外出はしなかつた筈だよ。その點を僕は確信して居る。外へ出て何の用がある。それに突然ワースト街へやつて行つて偶然其處に居た知らぬ男を連れに行くと言ふ事は考へられない事だ。少くも常識では判断が出来ない。それとも君はどう思ふか。」

「君の言ふ通りさ。或は、僕の兄弟が令嬢をもとゝ知つて居たのかしら。」

「いや。君の兄弟は一度も令嬢を見た事がないときつぱり言つたさうだ。」

「令嬢の方でも知らぬのだね。」

「さうよ。たゞ臺所のドアの前に寝てゐるのを見たのが初めてださうだ。いやもうあの人に會ひさへ

すれば萬事簡單に分つてしまふよ。」

「まだ現場は警察が番をしてゐるかね。」

「さうよ。けれど僕は許可を得て来たんだ。これまで警察に色々力を盡して来たし、殊に警察のザンデルゾン君の信用を得て居るから、何時でも現場検査に立會ふ事が出来るんだ。だからこの事件にも僕は立會つて見ようと思ふ。」

二人は其處で別れた。ビルネルは仕事するため家へ歸り、ローガンは骨董商の家を訪ねた。

第六章 殺人現場

刑事グリーンマーは被害者の家を精密に検査するやう命ぜられた。ローガンがたづねた時、彼は恰度廊下で仕事をしてゐる時だつた。

「一體事件は何ですか。窃盗殺人ですか。」とローガンが尋ねた。

「さうらしいですね。」とグリーンマーは肩をすくめて答へた。「だが僕に分らう筈がありませんよ。しかし何だか少し可笑しい所がありますかね。」

「どう可笑しいですか。もう加害者を逮捕したではありませんか。」

「それはさうです。しかしそれだけで事件は未だ解決したとは言はれないやうです。」

「どうか隠さず話して下さい。」とローガンは言つた。「たつた今僕は探偵局長に會つて来ましたたが、

僕には一伍一什を話しても構はぬやうに言つて居られました。」

「成程ね。」とグリーンマーは笑つて言つた。局長も警部と同じやうに曖昧な所があるんですよ。今まで君が色々警察を助けて呉れたので今度も助力を仰ぐつもりなんでせう。」

「だつてもう事件は解決してゐるんだから、助力も何もあつたもんぢやないんでせう。」

「所が中々さう簡單なものぢやなささうなんです。」とグリーンマーは不思議に堪へぬと言ふやうな顔付で言つた。たとひあのビルンが殺したと白状しても事件の謎は解決したとは言へないんですよ。と言ふのは被害者の一件なんです。實は昨夜言はゞ僕等の目の前で被害者の死體が消えて無くなつたんです。」

「まさか。」

「いえ。ほんたうです。まるで風に吹き飛ばされたやうに突然死人が無くなつたんです。」

「ぢや死んだのではなかつたんですか。」
「間違ひなく死んで居たんです。ステルン醫師が昨夜僕等に同行して来ましたたが、直ぐ死體の検査を始めて少くとも死後三時間は経過して居ると言ひました。警部も僕も居ましたが死人は大きな傷を顚顚に受けて、机に覆ひかぶさるやうに死んで居たんです。そして僕達がビルンを起して死體に引き合せようとして連れて来ると、死體が消えて無くなつたと言ふ始末です。どんな風に消えて無くなつたかはどうしても分らないんです。」

「新聞にはそんな事が少しも書いてなかつたぢやありませんか。」

「さうですとも。局長は當分黙つておく方がいゝと言ひましたから。しかしすつとこの家に居た僕達の目の前で死人が消えたと言ふ事なんかは確に警察の恥ですよ。世間の人が何と言ふと思ひますか。外には警官が番をして居り、中には刑事が現場搜索をして居り、しかもその間に被害者の死體がなくなるんですからね。」

「ふむ。」とローガンは考へ込んで言つた。ひまつとしたら屏の見張りが悪く誰かが忍びこでんで死體を持つて行つたのかも知れませんか。」

「そんな事はありません。部屋の模様を見ればすぐ分ります。一緒に來て御覽なさい。」かう言つて探偵は熱心に事情を知らしめようとした。

「實は僕は令嬢に逢ひに來たんです。何處に居られますか。」

「居間ですよ。多分まだ寢て居られるでせう。君は御存知なんですか。」

「え、よく知つてゐます。定めしこの惨事は令嬢にひどい打撃を與へたでせうね。」

「警部が歸つた後で強いショックを受けたので、あわて、醫者を呼んだくらゐです。」

「令嬢はどうして殺人を發見したのですか。」

「令嬢の話によると、昨晚二三人のお友達とオペラへ行つて十二時に歸つたんださうです。女中は氣分が悪くつて八時に床に就いたと言ひます。何でも身體がぞくぞくしてひどく頭が痛かつたさうで主

人からキニーネのカプセルをもらつたんださうです。そのためぐつすり寢込んで何事も知らなかつたんださうです。」

「女中は貴方にどんな感じを與へましたか。」

「何の疑はしい所も無いやうです。アンナと言つてもう四十ださうですが、肉付は中々よくどんな質問にもはきくと答へてしまひました。令嬢にゆり起されて、見ると令嬢は身體をふるはせながら、臺所の戸が開いてゐて酔つぱらひが中に寢てゐると告げたのださうです。何でも令嬢は食堂の食卓が妙な状態になつてゐたので臺所へ行つたんださうです。」

食堂は御覽の通りで、食卓は令嬢が歸へられてからのまんまになつて居ります。この通りベンが端くれまで食べてしまつてあるし、チースの皮まで食べてあるし、テーブル掛けは汚れ放題でナイフもホークもごちやくくに投げだされ、到るところに酒の汚點がつき、葡萄酒は二本まで空になつてゐます。しかもコップはたつた一つきりしか使つてありません。グリーンテンス氏は酒も飲まなければ、又何時少食なんです。だから令嬢はこの有様を見て、誰か父親以外に此處に居たに違ひないと思つたんです。所がナブキンはたつた一つかしてテーブルの上にはありません。」

刑事はそれからローガンを客間へ導いた。客間の机の上には半分程空にされて、打ち破られたウイスキーの壺が横はつてゐた。机の傍の敷物の上に割れたコップがあつた、巻煙草の灰吹殻とが到る處に落ちてゐた。

「この部屋も発見當時のまゝです。」と刑事は言葉をつづけた。「御覽なさいこの有様を。グリューテンス老人は嘗て巻煙草を口にした事がないんださうです。」

「成程。」とローガンは言つた。グリューテンス嬢はこれを見て非常に驚き、女中を起しに行つたんですねえ。」

「さうです。そして臺所へ来てその悪漢即ちビルンが裏階段の端のドアに沿つて、死んだやうになつて寝てゐるのを見付けたんです。アンナはそこで門番に電話をかけて来てもらひなさいと令嬢に告げました。所が令嬢が電話を掛けて見てもどうしても返答がなかつたさうです。それもその筈、よく調べて見ると電線が切つてありました。そこで二人は、盗人がはひつたんだと考へたんです。で令嬢は取敢へずお父さんを起さうと思つて、寢室へ行つて見ると、意外にも寢室は空で寢臺は使はれてなかつたんです。びつくりした令嬢がアンナを連れてグリューテンス氏の事務室即ち緑の部屋へ来て見ると、世にも恐ろしい光景が現れたんです。老人はタイプライターを前にして椅子に腰掛けたまゝ、殺されて居たのです。何か書かうとした所を加害者に襲はれたらしいのです。上體は机の上にもたれかかり、両手はまだタイプライターの文字に觸れて居ました。そして顛顛に大きな傷が口を開いて居たのです。」

「どんな兇器が使用されたんですか。」

「まだ発見してゐませんから斷言する事は出来ません。多分大きな重い槌だらうと思ひます。加

害者が捕げられて居ながら兇器がないと言ふ事も實にをかしいです。だから共犯者がなくてはならぬ筈です。」

「何れにしても妙な共犯者ですね。しかしまあお話を聞きませう。」

「この有様を見た令嬢はそのまま、氣絶してしまつたんです。アンナも初めは吃驚して啞然としてゐましたが、やがて門番の所へかけつけ、警察に電話をかけさせ、門番をつれて歸つて來たんです。そこで門番は酔つぱらひを臺所にはこびこんで扉に錠を下しました。その時アンナは悪漢が主人の最近おろした洋服を着てゐるのを見付けました。最も洋服は上から下まで汚れて汚點で一杯でした。その汚點は調べて見るとウイスキーと血痕だつたんです。」

「そりや有力な證據ですね。」

「もつとそれよりも有力な證據があります。それなのに……。」と言ひかけて刑事は頭を振つた。それなのに僕には、どうもビルンが犯人だとは思へないんです。何故かと言ふ理由は僕にも分りません。證據は歴然としてゐて誰だつて彼が犯人だと言ふに違ひありません。グリューテンス氏の部屋には練瓦製のストープがあつて、その中に幸ひにも半焼になつた彼の着物がありません。それには一杯血痕が付いて居ました。タイプライターの傍に一枚の紙があつたがその上にビルンは酔つて前後不覺だつたんですから、うっかり血のついた手を觸れたのです。そこにははつきり彼の三本の指紋がとれてゐるのです。その外に尙彼の外套のポケットの中に三千クローネの紙幣を容れた封筒があつたん

です。その紙幣の番號はグリユーテンスの札の中にあつた控の番號と一致してゐるんです。最後にほ、他のポケットの中にもちやくにした紙がありました。それが恰度タイブライターにかけた紙で、半分引き裂れたので半分はまたタイブライターに残つてゐました。間違ひもなくグリユーテンス氏が加害者におそはれた時に書いて居た手紙なんです。その手紙の書き出しは、「ズーネ・ビルン君へ。」と言ふので、その文句は餘り強迫を續けると今度こそは警察に告げるぞと書いてありました。勿論文句は中途で切れて居ましたが。」

「成程どれも皆立派な證據ですね。それで、加害者と被害者との間に格闘の行はれた證據はありませんか。」

「少しもありません。死人はアンナが寝る前に見た通りの寝巻姿でした。何一つ道具はいざつて居らず、どの抽斗も皆開けてはなかつたのです。たゞ金庫の扉がひららかれて居て、錠の中に主人の鍵束が差してありました。」

「さつき君は令嬢が氣絶したと言はれましたが、それからどうしたんですか。」

「さうく。門番とアンナと二人で令嬢を寢室に移したんですが、餘程経つてから正氣を回復したそうです。アンナの言ふ所によると、令嬢は熱にうかされたやうになつて、お父さんがこれまでいつも盗人をこはがつて居られ、何でもクラブの一の形を書いた不思議な強迫狀を受取られた事を話されたさうです。」

「何。クラブの一ですつて。恰度それはビルンの左の腕にある印ではありませんか。」

「さうですよ。だからこれも彼が犯人だと言ふ有力な證據でせう。」

「愈々ビルンに取つては不利益な事ばかりですね。」とローガンは顔をくもらせて言つた。それぢやもう逃れつこはありますまい。」

「さうらしいのです。僕等が彼を正氣に返して警部が訊問を始めた時にも、あまりよい感じを與へませんでした。食事をして酒を飲んだのも皆自分のしたこと。突然氣分が悪くなつて、そのまゝ氣を失つたのだと白狀して置きながら、人殺しとは何の關係もないときつぱり否定したのです。そこで、どうしてしからば此處へ来たかと問ひつめられた時、令嬢に偶然街で會ふと來いと言はれたから來たのだ。さうして家へ來ると新調の着物を貰つて御馳走をよばれたのだと言ふ作り事を話したんです。」

「令嬢はそれをどう言ひましたか。」

「非常に弱つて居られるので醫者がまだ訊問を許しません。」

「けれどお金を持つてゐた事と、引裂いた手紙を持つてゐた事をビルンはどう説明しましたか。」

「手紙の事は全く知らないと言ふんです。嫌疑をかけるために誰かに入れて置いたんだらうと言ふんです。金は令嬢からもらつたんだと言ひました。」

「しかし三千クローネは大金ですよ。どう言ふわけでそんな贈物をしたんでせう。」

「同じ質問を警部もしたんです。するとビルンは當惑してお嬢さんが昔彼に命を救つてもらつた事が

あるから、その報酬に上げるんだと言ふあやふやな答をしました。自分にはそんな覚えがないからお嬢さんは誰か人達をして居られるんだらうと言ひました。」

「そいつはいかにも怪しいですね。令嬢は今まで僕に一度も生命のあぶないやうな目に會つたことを話しませんでしたよ。」

「警部もその點を確かめるためにアンナを令嬢の所へ聞かせにやると、令嬢は今まで誰にも救はれたやうな覚えがない。さつき臺所で見るとは一度も見た事がないと言ふ答でした。」

ローガンはほつとためいきを洩らして呟いた。

「無論さうだらう。僕もさうだと思つた。」

「所が不思議な事があるんです。」と刑事は言葉を續けた。「警部がビルンに向つて彼を連れて来た婦人はどんな様子をしてゐたかと尋ねると、グリーンテンス嬢の事を寸分の違ひもなく述べたのです。」

「それや何も珍しくないぢやありませんか。多分度々彼は令嬢に街で會つて、目についたもんだからよく覚えてゐただけの事でせう。」

「さうかも知れませんが。所が彼は令嬢の昨晚の姿を述べたんですよ。僕等も女中の證言で初て知つた位です。」

「だつて彼は令嬢に對決せしめられたぢやないですか。」

「いゝえ。ひどく疲れて居られたのでそれが出来なかつたんです。僕等がビルンを訊問して時に令嬢

は起き上らうとされたが二度目に又氣絶されたんです。」

「可哀想に。随分ひどい心の打撃を受けたのでせう。」とローガンは呟いた。グリーンマーはうなづいて再び言葉を續けた。

「それから先刻お話しした不思議な事が起つたんです。ビルンはグリーンテンス氏を一度も見つた事がないとあくまで主張したので、警部が死人に引き合せようと思つて、死體の横はつて居た事務室へやつて來ると、すでに死體は其處に無いぢやありませんか。いやもう實に驚きましたよ。全く譯が分らないんですもの。」

「死體が無くなる間君達は何處に居ましたか。」

「その間客間と食堂とに居たんです。グリーンテンス氏の部屋は御覽の通りたつた一つの扉しかありません。どんな人間でも死體ほどの重い荷物を持つて客間を通つて行つたら、それが分らないと言ふ筈はありません。たしかにその間、この扉を出入りしたものはなかつたのです。」

「それぢや窓から消えて無くなつたんでせう。」

「如何にも窓は庭に面してゐて、死體を投げ出すには比較的容易ですが、窓のホックはどれもこれもしつかりとかけて有つて、庭の上を見ても血のついた死體が落ちて來たやうな所は少しもないのです。尙又朝まで醫者の外には確に誰もこの家を出たものはないのです。」

「それぢやグリーンテンスさんの部屋に秘密の出口があるんでせう。」

「僕もさう思つて探して見たがどうしても見付らないのです。」

「僕に見せてもらへませんか。」とローガンは尋ねた。

「いいですとも。」かう言つてグリーンマーは机の方へ行つて何か探してゐるらしかつたがやがて大きな呪ひの聲を出した。

「どうしたんですか。」とローガンは尋ねた。

「鍵が無いんです。僕は部屋に錠を下して、あなたが来られるすぐ前に確に錠をこの机の上に置いたんです。それが何時の間になくなつてしまつたんです。」

「女中でも持つて行つたんぢやありませんか。」

「そんな譯は無いです。三十分程前に女中は出て行きましたが、その時はまだ扉が開いてゐたんです。少くとも一時間は外出して来ると言ひました。」

彼は扉を開けようと試みたが鍵がかつて居て開かなかつた。そこで彼は鍵穴に耳をあてがつて中の模様を聞いた。

「誰か中に居る。をかしいぞ。誰か中に確に居るやうです。」と彼はさゝやいた。

「令嬢かも知れませんか。」

「こゝで暫く扉の番をしてゐて下さい。すぐ歸つて来ますから。」

グリーンマーが去つてから、ローガンは耳を鍵穴にあてがつた。確に誰かが居るやうだつた。出来る

だけこつそりと何かやつてゐるらしかつた。低いミシ／＼と言ふ歩く音が聞え、非常にそつと抽斗を開け閉てする音が聞えた。それから錠をかけるやうな音がして、再び静かになつてしまつた。

「令嬢はまだ寝て居られるんです。一體何者でせう。」とグリーンマーは戻つて来て言つた。

「たしかに人の氣配がしましたから、多分その家へしのびこんでた悪漢が、君の留守の機をうかつて、錠を奪つて事務室にはひりこんだのでせう。僕だつたらそんなに軽々しく錠を手放さなかつたでせう。」

「僕はこの家に自分より外誰も居ない事を知つてたんです。しかし、この報告だけはしておきませう。警部がきいたら定めし怒るだらう。」と刑事は苦笑して言つた。

それから彼は電話をかけてこの事を警部のザンデルソンに告げると果してザンデルソンは苦り切つて答へた。

「やつ等は僕等を馬鹿にしてゐるんだよ。今朝銀行で行はれたのと同じ手さ。この事件に關係してゐるのはきつと大きな徒黨を作つてゐるに違ひない。」

「銀行ですつて？ それは何の事です。」と、グリーンマーがたづねた。

「今朝早くエンスキルダ銀行のグリーンマーの金庫が盗難にかつたんだ。」

「ほんたうですか。」

「ほんたうとも。銀行が開店すると同時に、グリーンマーと寸分違はぬ男が金庫に用があつて来た

と申出たんだ。掛の女は新聞をまだ読んでなかつたので骨董商が殺されたとは知らず、當人だと思つて開けてやつたんだ。それから其男は手鞆の中へ中味を入れて行つて了つたんだよ。其すぐ後で掛の女が新聞を開いて、初めて今の男が替玉である事を知り、恐らく加害者に違ひないと思つたんだ。これは又大變な事をした、どうしたらよからうかと彼女が思つてる所へ、もう一人今度は別の替玉が来て金庫を開けて呉れと言つたんだよ。彼女は吃驚して、警報器をならす事もわすれて、男の顔と新聞とを代る代る眺めてみると、男もそれと悟つたものか、ぼつと逃げ出して何處へか去つてしまつたんだよ。」

「狡猾な奴ですね。」とグリーンマーが言つた。「しかしその二度目の男は、前に来た男が何か忘物を取りに来たのではないでせうか。」

「いや。二度目のは少し扮装がまづかつたので、掛の女がすぐ二人が別の男だと感付いたんだ。」

「それぢや今グリーンマーさんの部屋に居るのはそいつかも知れませんか。」

「さうかも知れぬ。十分氣をつけて誰一人にがさぬやうにしたまへ。僕はすぐ行くから。」

かう言つて警部は電話を切つた。

第七章 令嬢の現場不在證明

「愈々ますます事件が複雑になつて來ましたね。」とローガンは今の話を聞いて言つた。「事件は別の

方へ發展したやうですね。」

「僕は何だか頭の中で風車が廻つてゐるやうな氣がします。」と、言ひながらグリーンマーは再び鍵孔に耳をつけた。「もうさつぱり音がしませんね。たしかにもう誰も居ないんでせう。かうしてぼんやり立つてるなんて馬鹿げて居ます。扉をたゞき割つて置けばよかつたのですが、何しろ厚い樫の木で出來てるし、おまけに錠は盗人除と來てますからね。」

「中へはひつた所が何もこれと言ふものは見付からんでせう。死體さへなくなつたんだから、生きた人間が逃げ出すのは難作ないでせう。相手は實に狡猾な悪黨です。銀行へまはつた所を見ると、實にかしこい奴に違ひありません。」

「勿論です。それでビルンは少くとも二人の共犯者をもつことになります。しかもおの／＼別々に仕事をやつてゐるやうです。」

「と言ふと、お互ひに連絡なしに競争的に仕事をしてるとでも言ふのですか。いや／＼この事件はそんな簡單なものではないらしいですよ。」とローガンは言つた。

「ではあなたはこの事件をどう説明しますか。」

「僕の考では二人の替玉があらはれたことは、確に二つのことを意味して居ると思ふのです。第一はビルンが一人の共犯者をもつてゐること、つまり彼は加害者でないこと、第二にはその二人はお互ひに少しも各自の計畫を知らないと云ふことです。つまり二人は相棒どころか敵となつて窃盗を働いて

居るのです。」

「何の窃盗ですか。グリーンテンヌさんの財産ですか。」

「さうぢや無いでせう。何か他のものでせう。しかし恐らく財産と同様の価値あるものでせう。」

「では加害者はどうです。ビルンが犯人でないとしたら、一體誰ですか。」

「まるで僕が現場を見物してゐたかのやうにたづねますね。」とローガンは笑ひながら言つた。「僕は勿論誰が加害者か知らないけれど、たとひ加害者が捕へられてもそれで事件が解決するとは思ひませんね。銀行の話を知ると、單なる窃盗殺人であると言ふ説は成立しませんからね。ビルンの自白は如何にも作り話であるらしいが、假にほんたうだとすると、この事件は未曾有のむづかしい犯罪だと思ひます。」

「僕も何だかビルンに同情したくなつてゐます。けれどあなたでも彼の無罪を證明する事は非常にむづかしいでせう。又彼が共犯者を持たぬといふ事を證明するのも困難でせう。一體死體を持つて行つたのは誰でせうか。」

「君がさう言はれれば、僕も一體何のために死體を持つて行つたかと聞きたいです。身許も確に分り、死因も醫者によつて確定されたのだから、何故に死體を残しておかなかつたんだせうか。それから共犯者の話ですが、ビルンを殺人の現場に捨て、行くことは餘程大膽な仲間ですよ。ビルンもたつぷりお禮を言ふがいゝ。」

「それやおそらく、何かに驚いて連れて行く暇がなかつたのでせう。」

「さうとしても臺所の扉を立てる位の暇はあつたでせう。わざ／＼見えるやうな風にして置くのはおかしいぢやありませんか。それ所か、地下室へでも運ぶとか、又は他の處へ移すだけの時間はあつたのでせう。若し少しでもビルンをかばふ氣なら、數々の證據を多少は無くする事が出来たでせう、たとへば死體の傍の血の手紋位はたやすく消す事ができた筈です。だから僕にはビルンに共犯者があつたと言ふ説は信じられないです。」

「何も殺人の際に共犯者があつたと言ふ譯ではないんですよ。」とグリーンマーが反對した。「恐らくビルンは自分の手で殺人をやつてのけたんでせう。しかし恐らく他人にそのかされたのでせう。してその男が蔭にかくれて犯罪の獲物を私したんでせう。或はビルンが催眠術をかけられたのかも知れません。」

「どうして君はさう言ふ事を考へるのですか。」

「あの令嬢と會つて、令嬢に連れられて來たと言ふ作り話が僕にはさう言ふ考を起させるのです。僕は確にビルンが自分の言つてる事を自分ではほんたうだと信じてるに違ひないと思ふんです。」

「しかし、令嬢と會つたと言ふ話は確に偽ですよ。令嬢にはそんな事はなかつた筈です。」

「それは僕も知つてゐます。昨晚オベラへ行かれたと言ふんだから、ビルンと一しよに居なかつたと言ふ證據を立てる位雜作もない事ではせう。」

ローガンは、背中に冷水をかけられたやうに感じた。そんな現場不在証明をする必要があるだらうか。成程、その證據を立てる事は大切であるが、果して彼女はそれをする事ができるであらうか。この時彼は隣室に聲音を聞いたやうに思った。

「令嬢が起きて居られるやうですから一寸僕は話して來ます。」と彼は言った。

「ロザリー・グリューテンスは果して起きて居た。ローガンが扉をあけるなり彼の方へ近寄つて來た。美しい顔は非常に蒼ざめ、兩眼は泣き腫れ、銅色に輝く美しい髪は頗る亂れてゐた。

「ほんたうにお氣の毒です。」とローガンは心から同情して言った。

「お、ローガンさん。察して下さい。」と彼女は歎息して言った。「父に、私の最も愛する父にあんな非業な最期を遂げさせたのも皆私の罪です。何もかも皆私の罪です。」

「あなたの罪ですつて。」とローガンは不安な面持で尋ねた。「そんな事はないでせう。悪漢が此處へ闖入してかうした犯罪を行つたといふではありませんか。あなたとは少しも關係がないでせう？」

「それはさうですわ。けれど私は父を獨りで残して置きましたもの。家にさへ居ればこんな事にはならなかつた筈です。」

「けれど家に居たんぢやありませんか。僕が戸口でお別れしたのは八時半頃でしたもの。」

「けれど私は家へはひつては行かなかつたんですの。」

「何ですつて。それではあの悪黨が言ふ通りに貴女が道で出會つて此處へ連れて來たんですか。」

彼女は美しい眼を大きくむいて彼を眺めた。

「まあ。あなたまでそれをほんたうにしていらつしやるの。」と彼女は尋ねた。

「いえ。僕は決してそんな筈が無いと思つたんです。」と彼は力をこめて言った。

「私も今日アンナからその悪黨の作り話を聞きました。けれどそれはたゞ酒の加減か又は冗談だと思ひました。それに私は悪黨の言つた事をまだ皆聞いて居りませんのよ。」

ローガンは其處で知つて居ただけの事を話した。

「きつと氣が變なのでせう。」とロザリーはきつぱり言った。

「警察も皆偽りだと言つて居ます。」とローガンは言った。

「無理もない事ですわ。」

「しかし警察は貴女が昨晚オペラに行つていらつしやつて、漸く十二時頃に歸つて來られたと貴女自身がお話になつたと言ひましたよ。」と彼は言葉を續けた。

「それはほんたうなのです。」と彼女は當惑顔に言った。「十二時頃に歸つて來た事はほんたうです。確か家へ歸つた時恰度十二時が打つたと思ひます。」

「それぢや僕がお別れしてから貴女は一度お出懸けになつたんですか。」とローガンは吃驚して尋ねた。

「さうですよ。それはかう言ふ譯です。あなたにお別れしてから、すぐ上へ上つて行かうと思ひま

した。その時私は、父がいつもの通りもう床に就いた事と思つて居りました。しかし私が廊下へ來ると、屏のぞき窓から、食堂に燈の付いてるのが見えましたので、父はまだ起きてるのだなと思ひました。それで私は吃驚してオペラへ行くと云つて出たのですから、こんなに早く歸つてはならぬと思ひ、も一度外へ出たので御座います。」

「そんなに遅くたつた獨りで出たんですか。」と彼は責めるやうに言つた。「そしてその間何處で暮したんです。」

「大變お腹が空いて居ましたので、カステンホーフへ行つて何か食べようとはじめは思ひましたが、急に何日かお話しした祖母の女中をして居たソフィー婆さんの事を思ひ出したんです。婆さんは今病氣をして居ますので尋ねてやらうと思ひました。先方へ行きますと、婆さんはたつた一人で思つたより容態が悪うござりました。色々話をして、それから直様家へ歸つて來ました。」

ローガンはほつと安心のためいきを洩らした。

「まあよかつた。それぢや大丈夫です。」と彼は言つた。

「大丈夫つて何の事ですか。」

「事件の様様では、逮捕された男の作り話が全然偽だと言ふ事を貴女は證明しなければならぬのです。それにはつまり貴女が悪黨の言ふ時間に別の處におゐてなつた事を證明すればいい譯です。」

「若しその證明が出來なかつたらどうなりますの。私はよく母の墓參りをしますが、若しそんな事で

もしてゐたとするとどんな事になりますの。」

「さうすると貴女は非常に嫌な破目に陥るのです。何しろ問題の男はよく貴女の人相を知つて居りますし、着物の事までも委しく知つてゐるのですから。」

「それはをかしいですわ。あの着物は昨晚初めて着たんですもの。」

「極最近に新調なやつたんですか。」

「いゝえ。三週間前にある筈の晩餐會の爲に作らせたんです。けれどそれはお流れになりました。」

「全く不可解ですね。」とローガンは頭を振りながら言つた。「謎に謎が重りましたね。しかし貴女がきつぱりと時間の點を證明の出來るのは何よりです。ソフィー婆さんは大變悪いんですか。」

「さうらしいですよ。熱は高くありませんが心臓が大變弱つてゐます。何しろ八十に近い年ですからね。こんな事がおきなければ今日もう一度行つてやらうと思つて居ましたの。それで先刻アンナにポルドー酒と、その外の強壯藥を持たせて見舞にやりました。もうかれこれアンナの歸つて來る時分です。」

恰度この時屏が開いて、アンナが非常に興奮して這入つて來た。

「お嬢さま。可哀想にソフィー婆さんがなくなりました。」

「えゝ。なくなつた。」とロザリーは宛も耳を疑ふかのやうに叫んだ。

「はあ。私が行きましたら、屏が閉つてゐまして何度叩いても誰も開けて呉れませんでした。そこで

お隣の女の人を呼んで来て這入らうとしましたが、鍵が中に入れてあつたのでどうしても開かなかつたんです。それで警察へ行きまして錠前屋を呼んで、漸く開けてもらつてはひると、お婆さんは地面に倒れてゐました。扉から寢臺へ行く道で倒れたらしいんです。巡査が走つて醫者を呼んで來ましたら、醫者の言ふには十二時頃に心臟麻痺でなくなつたんだらうと言ふ話でした。」

ローガンとロザリーは黙つて顔を見合せたが、二人とも同じ考を抱いた。即ちこれで證據を上げることが出來なくなつてしまつたと考へたのである。

アンナが出て行つた後で二人は非常に不安を感じながら、どうしたらいいかを相談した。

「オベラへ行つたと言はなかつたらよかつたのですのに。」とローガンは言つた。「若し貴女が警部に別の説明をしたら、無論信用はして呉れますまい。しかし、事があります。昨晚僕が九時に貴女と別れたと言ふ事を知つて居る男が一人あります。それは逮捕された男の兄弟です。僕はこれから直ぐにその男に話して見ませう。」

かう言つて、ローガンはビルネルにグリュートゥスの家へ來てくれるよう電話をかけた。

第八章 スチーヴンス來る

ビルネルがローガンの要求で出懸けようとすると、入口のベルが突然鳴つた。扉を開けると其處に胡麻鹽頭の紳士が立つて居た。彼は光つた、殆ど白くなつた顎鬚を生して、大きな金縁の青色眼鏡を

かけて居た。

「御免下さい。貴郎はアッサール・ビルネルさんでございませぬか。」と紳士は帽子を取つて言つた。まづいスウェーデン語の使ひ方で、それが直ちに外國人である事が分つた。

「さうです。しかし何の御用ですか知りませんが、僕は一寸今出懸けねばならないのです。」

「僕はスチーヴンスと申します。私の出しました最後の手紙はお受取り下さつたでせうか。」

「受取りました。實は毎日お待ちしてゐたのです。しかし残念ながら今は非常に急いで居るのでございます。」

「それぢや、明日お訪ねする事にしませう。かなり時間のかゝるお話ですから。」

ビルネルはこの人に決して疑をかけるやうな様子をしてはならんと言つた、ローガンの忠告を思ひ出して、スチーヴンスに向つて如何にも愛想よく應對し、父が何でも打明けていゝと言つた事や、父のためにわざと長い旅行をして呉れた事を心から感謝すると語つた。

「仰せの通り、私はなくなつたお父さんの爲にするのでございまして、お父さんの遺言を執行する爲にはどんな面倒をもちとはないのでございます。」

二人は話しながら一緒に階段を下りて行つた。

「以前にスウェーデンにおゐになつた事があるのですか。大變スウェーデン語がお上手のやうですね。」とアッサールは尋ねた。

「ずつと以前に一度この國へ來ました。それに辯護士としてモントリオールに居りますと、スウェーデンのお方と交際する事が多いもんですからスウェーデン語を習つたのです。言葉もお國の風景と同じやうに美しいですね。」と彼は如何にも愛想よく言つた。

「御兄弟の手掛りはまだ少しもありませんか。」と彼は少したつて尋ねた。

「所がありましたよ。」とビルネルは顔を曇らせて言つた。「今日の新聞をお読みになりませんか。」

「いえ。まだその暇がありませんでした。何か新聞に御兄弟の事が出てゐるのですか。」

「さうなんです。兄弟は昨晚恐しい殺人を行つたと言ふ嫌疑をかけられて居ります。」

「そりやどうも。」とスチーヴンスは呟いた。「大變ですね。お察しします。殺されたのは誰ですか。」

「グリーンテンスと言ふ骨董商です。」

スチーヴンスは急に立ち止つて、ビルネルの腕を握つて叫んだ。

「何と仰しやる。それぢや私の來やうがおそかつたんです。」

「それはどう言ふ事です。來やうがおそかつたとはどう言ふ事です。」

「あゝ、それはお分りになりません。貴方にお分りになる筈がないです。何もかもあの骨董商が元です。どんな殺人が行はれたか話して下さい。御承知の事も何もかも仰しやつて下さい。」

スチーヴンスの言葉を聞いて、ビルネルは嫌々ながらも多少の興味を感じて來た。この男は確に色色の事を知つて居りながら口に出して言はないのだなと思つた。

「貴方は骨董商を御承知ですか。」と彼は尋ねた。

「いえ。直接會つた事はありませんが、關係はありました。」

アッサールがスチーヴンに向つて恰度今これから殺された骨董商の家へ行く所だからこれ以上お話しする事が出来ないと話すと、スチーヴンスは自分も一緒に同伴をすると言ひ出した。

「自動車で参りませうよ。」とスチーヴンスは活潑に言つた。

「それやいけませんよ。知らぬお方をこの事件にはひつてもらう事は出来ません。まして外國の方ですからね。警察が許しませんよ。」

「あゝそりや貴方の誤解です。警察は却つて私に感謝しなければなりません。私はモントリオールで辯護士をはじめ前長の間探偵をして居りました。英國警視廳のスチーヴンス探偵と言へば、その時代には相當評判だつたのです。」

ビルネルは考へた。何故この人は殺人現場へ行きたがるのか。もしこの人が今少し早く來たならば殺人は起らなかつたであらうか。この恐しい犯罪はこの人の來た事と關係があるのであらうか。

ビルネルがスチーヴンスをちつと眺めた時これらの疑問が彼の頭の中に湧いて聞た。青色眼鏡の爲に直接目を見る事は出来ないけれど、スチーヴンスの顔はビルネルに信頼するに足る人であると言ふ印象を與へた。グリーンテンスの宅へ案内しても別に危険はなからうと彼は思つた。探偵として仕事かしたいと言ふのは何も自分の關係した事でない。この人が替玉であると言ふ事は、その中には分る

事である。

「では一緒に参りませう。」とビルネルは言った。

「結構です。どうか途中でこの事件に就いて御承知の事を聞かせて下さい。」

「宜しい。しかしその前に伺ひたい事が有ります。さつきあなたは骨董商が殺されたと聞いて非常に驚きなされたが、あれはどう言ふ譯ですか。」

「私の驚いた事は殺人そのものでなくて、貴方の御兄弟が嫌疑者になられた事です。無論殺人そのものも私には不可解です。しかし私は多少グリューテンス氏の家庭の様子も知つてゐますし、個人についても色々知つてゐます。ですから何かお役に立つ事もあらうと思ふのです。殊に御兄弟の爲にも、御兄弟は今非常な不利益な立場に立つて居られるのですか。」

彼の言葉は、如何にも同情に富んでゐて心から絞り出されたやうな眞實な調子を帯びて居たので、ビルネルは何だか引き付けられるやうに思つて、知らずに殺人に關する事は残らず彼に語つた。もとより死體の紛失した事などは、彼は知らなかつた。又グリューテンス嬢が八時半と十二時の間不在であつた事も語らなかつた。

「不思議な事件ですね。それで警察は今どんな考で居るのですか。」

「警察は有りふれた窃盜犯人で、犯人は僕の兄弟だと思つてゐるのです。」

「成程今のお話ではさう考へられるのも無理はないです。しかしかう言ふやうな事件では、その後

発見される何でもないやうな事が、或は一寸見逃されたやうな事が、すつかり今までの説を變へるものから、まあ／＼そんなに落膽する事もないでせう。」

「どうですスウェーデンの探偵はいい頭ですか。」と彼はしばらくの後尋ねた。

「何れも腕利き揃ひです。解決のつかぬやうな犯罪事件はめつたに無いやうです。」

「結構ですね。しかしこの國には世界に有名な私立探偵が一人居るではありませんか。私の言ふのはレオ・カリングさんの事です。」

「さうです。所が残念ながらあの人は今外國に居るのです。」

「それは遺憾千萬です。」と、スチーヴンスは呟いた。

「昔近づきになつた事もありますから、舊交を温めるつもりでしたのに。」

この時、一人の夕刊賣が大聲を出してこちらへやつて來た。夕刊賣は、じやらじやら聲を出して叫んだ。

「グリューテンス事件の怪聞。死體の消失。」

「何ですか。」とスチーヴンスは尋ねた。「死體の消失とはをかしいぢやありませんか。どんな事が書いてあるか買つて見ませう。」

彼は一枚の夕刊を買つて不思議な記事を讀んだ。

最初に、今朝早く新聞社に何者かが電話をかけ、警察の人達が嫌疑者を訊問してゐる間に、不思議

にも殺された骨董商の死體の消失した事を報告したので、新聞社員は悪戯にそんな事をするのだらうと思つたが、念のために警察に電話をかけると、初めは否定してゐたが後にはそれを肯定したと書かれてあつた。

新聞はすべての経過を忠實に報告した。そして、警察の人達が家宅搜索をしてゐる最中に、大切な證據となる死體を盗まれたのは、非常な手落ちであると責めた。

世界戦争中は澤山の外國の冒險家がこの市街に入り込み、その中には多くの危険な犯罪者も交つてゐるから警察は絶えずそれに注意して居るべき筈だつたのである。骨董商の殺人事件でも、明かに或犯罪者の團體が關係してゐるのであつて、その點を警察はよく注意すべきであつたのである。酒を呑んで正氣を失つて寢て居るやうな愚な犯人を一人捕へてそれで安心して居たのがそもその間違ひである。警察が若し一味の者を捕へなかつたならば、それこそ全世界の嘲笑的になるであらうと書かれてあつた。

「これは餘り有難くない記事ですね。」とスチーヴンスは笑つて言つた。「私は今は探偵ではありませぬけれど、しかし死體を盗まれるとはいさゝか變ですね。」

「僕はグリューテンスさんは死んでゐないと思ふんです。」とビルネルが自信を持つて言つた。「つまり自分で歩いて行つたんでせう。」

「さうすれば煙突からでも逃げ出したことになりますね。この新聞で見ると、窓からも、扉からも逃げ出した形跡は無いとありますから。それになんでも願願をひどく打ちこまれたと言ふぢやありませんか。」

二人はそれから尙グリューテンスの事件や、恐らくゾーネが死んだらうと言ふ事等を話し合つた。

ビルネルは段々とスチーヴンスに引きつけられ、スチーヴンスの冒險家である事などはすっかり忘れてしまつた。到頭二人はグリューテンスの家に来た。戸口には一群の見物人が集つて居た。

「此處です。」とビルネルは言つた。

「階段は幾つあります。」

「一つです。」

「一寸待つて下さい。」とスチーヴンスは言つて、他の町の側へ歩いて行つて、其處から家の有様を委しく觀察した。

「二階は門番の仕事場、いや、住所らしいですね。」と彼は戻つて来て言つた。「昔の習慣で、まづ庭を一つ検査して見ませう。」

かう言つて彼は隣家との境にある高い壁の上へのぼり、其處から庭を見渡した。

「街へ出口はたつた一つしかありませんね。これぢや問題は極めて簡單です。それからこれが臺所への階段で、その一番上の處にあなたの兄弟が居たといふ譯ですね。一寸上つて見ませうよ。」

ビルネルはスチーヴンスについて行つた。スチーヴンスは門口や、その門側や、階段の上をまるで

指紋でも見つけようとするかのやうに検査した。さうして、一ばん上のところで彼は立ちどまつて、ちつと考へた。

「御兄弟は此處に寝てゐたんですね。さうして扉は開いてゐたんですね。」と彼は尋ねた。

「半分程開いて居たさうです。」

「折角此處まで來たのですから、いつそ此處から入れてもらひませう。」かう言つて彼は臺所の扉を叩いた。

アンナは扉を開けに來たが、カナダ人の姿を見るなり「ひやつー」と言ふ叫び聲を上げた。彼女はまるで幽霊でも見てゐるやうにスチーヴンスを凝視した。

「まあ。」と彼女は殆ど聞えぬ位の聲で言ひながら、よろ／＼と二三歩後退りした。「まあ。」

「何故そんなに驚くのです。」とスチーヴンスは尋ねた。

彼女はそれに答へないで、ひたすら彼を凝視した。

「あなたは女中さんでせう。」とビルネルは彼女の妙な驚き方を見て言つた。

「はあ。」と彼女は小聲で答へたが、尙スチーヴンスから目を離さなかつた。

「何故そんなにじろ／＼眺めるのです。あなたはモントリオールに居た事があるのですね。」とスチーヴンスが尋ねた。

この質問を受けたアンナは漸く我に歸つて答へた。

「いゝえ。一度も。」

「では何故私を見てそんなに驚くのですか。」

「お姿を見て外の人を思ひ出したのでございます。どうぞ御免下さい。」

「何だか私もさう言へばあなたを見たやうに思ふ。」と、スチーヴンスは考へながら言つた。「しかし間違ひかも知れない。あなたも私の姿から外の人を思ひ出したんでせう。私もあなたが誰だか思ひ出せません。」

「一體何の御用ですか。」とアンナは簡單に尋ねた。「誰も入れてはならんと警察から言ひつかつてゐます。」

「それぢや扉を開けに來るにも及ばないぢやありませんか。」とスチーヴンスは笑ひながら言つた。

「失禮してはひつて行きますよ。」かう言つて彼はつか／＼と女中部屋の方へ歩いて行つた。

「いけませんよ。其處へはひつてはいけません。それは私の部屋です。」と彼女は道を塞いで叫んだ。「邪魔してはいけませんよ。」とスチーヴンスは、彼女を押しつけて言つた。「どんな様子か見るだけです。」

彼女の抵抗するにもかゝらず、彼は扉を開けて中をのぞき込んだ。

「大變きれいだ。立派なものだ。」と彼は言つた。

アンナは顔を蒼くした。

「恥知らずですね。」と彼女は叫んだ。「こんな風に押込んで来るなんて。すぐ言ひつけて来ますよ。」
「扉を閉めなさい。又誰かはひつて来るといけないから。」とスチーヴンスは命令するやうな口調で言つた。

それから彼は彼女を側に立たせて置いて、外の扉を開けて奥へはひつて行つた。ビルネルは彼の態度を小氣味よく思つてついて行きながら、この男が突然ローガンに會つても矢張り平氣で居るかしらと考へた。

二人は物置部屋を通つて食堂へ来た。すると其處には刑事のグリーンマーが居て、彼等の姿を見て吃驚して立上つた。その時スチーヴンスは如何にも機嫌よく笑つて、手を差し出しながら彼の方へ近付いた。

「やあ、久し振りですね。お別れしてからもう餘程になりますね。」

グリーンマーはおづく差出された手を握りながら面喰つて立つて居た。

「お忘れですかね。私は昔英國警視廳に居たスチーヴンスですよ。いつぞや一緒に仕事した事がありますね。」

これを聞いた刑事の眞面目な顔には薄笑ひが浮んだ。

「やあ、さうでしたね。どうも失禮しました。何しろあまりに意外ですから。しかし兎に角いゝ所へ来て呉れました。大變難しい殺人事件をひかへて居るんです。」

「私は實は探偵として来たのぢやないんです。ビルネルさんの一家の用事を片付けに来たのです。つまりモントリオールの辯護士としてね。ビルネルさんのお話によると、何でも恐しい殺人事件があつて御兄弟が犯人嫌疑者として捕へられてあると聞いたもんですから、直様こゝへかけつけて来たやうな次第です。」

「何れにしてもよく来て呉れました。きつと色々ためになつて頂く事が出来ませう。」

「さうかも知れませんが。殊にあの有名なカリングさんが留守だと言ふ事ですからね。しかし私が手を出しては、警察の方はどうですかしら、迷惑ぢや無いでせうか。」

「恰度今ザンデルゾン警部が来てありますから話して来ませう。」

「あ、一寸待つて下さい。」と言つてスチーヴンスはポケットから手帳を出し、何やら二三行書き、それを破り取つてグリーンマーに渡した。ではどうぞこれを警部に渡して下さい。あなたもお読み下さつても構ひません。」

グリーンマーはそれを讀んで、スチーヴンスを意味ありげな目付で眺め、そのまゝ部屋を去つた。

ビルネルはこの偽のスチーヴンスの、如何にも自由な、落着いた態度に愈々驚いた。刑事も初め彼を見た時は全く知らぬ様子であつて、漸く一緒に仕事をすると話された時に記憶がよみがへつて「よく来て下さつた」と言ひながらも如何にも探るやうな目付で彼を眺めて居た。

疑もなくこの男の扮装は非常によく出来てゐるのだ。彼は明に、誰もまだ本物のスチーヴンス

が死んだ事を知つてゐないのだと悟つたらしかつた。若し本物のスチーヴンスが死んだと言はうものなら爆裂弾のやうに作用して、この男を根本的に叩きつける事が出来るであらう。しかし決して早まつてはならない。先づその前に充分この男を研究して、此方の手の内をのぞかせ、それから最後の手段にうつたへてもおそくは無であらう。

やがて刑事が戻つて、警部が是非お目にかゝりたいと言つたと告げたので、ビルネルも一緒に隣室へはひらうとした。

「あゝ、あなたはいけませんよ。」とグリーンマーは言つた。「警部はたゞスチーヴンスさんだけにお目にかゝりたいと仰しやるのです。ローガンさんが令嬢の部屋で待つてゐますから、あなたはそちらへいらつしやい。」かう言つて刑事は側の扉を指した。

ビルネルがはひつて行くと、ローガンは非常に浮かぬ顔をしてゐた。グリーンテンス嬢は全く絶望的な表情をしてゐた。ローガンは彼に向つて、令嬢が昨夜お父さんへの申譯のために、ついつつかりと警部にいつはりを話したために、困つた立場に陥つた事を話した。たつた一人、燈心となつて呉れる老婆が突然死んだために、最早確かな證據をあげる事が出来ない旨を告げた。

「その老婆は何處に住んでゐたんですか。」とビルネルが尋ねた。

「ついそのペリダレバン街です。」とロザリーが答へた。

「それぢや五六分で行ける所ですね。すると途中では誰も知つた人に會はなかつたんですね？」

「はあブルンケベルグ街をとほつて、非常にいそいで居ましたから、誰も知つた人には逢ひませんでした。」

「それは困りましたね。」とビルネルは言つた。

ローガンはそこで、グリーンテンス嬢が一晚中自分と一緒に居たやうに計らはうと言ひ出したが、ビルネルは反對した。

「さういふ事をするのは僕は嫌だね。」と彼は言つた。「さうすると僕の兄弟までが、迂闊すると悲境に陥るかもしれぬ。僕はどんな事があつても、全力を盡して彼が放免されるやうに働く積りだ。」

「君の言ふのももつともだ。」とローガンは言つた。「許して呉れ給へ。矢張り眞實を其儘話すより他はなささうだ。しかしロザリーさん、落膽してはいけませんよ。たとひ一時は疑はれても、その中には證據を擧げる事もできません。僕も全力を盡してそれに骨折りますよ。」

それからビルネルはスチーヴンスの替玉が尋ねて來た事、此處へ一緒に連れて來た事、この殺人事件に少なからぬ興味を持つてゐる事、刑事をまんまとあざむいた事などをローガンに語つた。

「きつと警部の信用も譯なく得るだらう。何しろ堂々たる態度だからね。」

「確に世界を股にかけてゐる犯罪者だよ。兎に角これから一緒に逢つて見ようぢやないか。」とローガンは言つた。

ローガンは興奮したロザリーに再び床に就くやうに言つて、ビルネルと共に部屋を出た。

「あの人はほんたうの事を言つてゐるのかい。」とビルネルは尋ねた。

「誰、ロザリーさん？ 無論さ。」とローガンはきつぱり答へた。

「失禮だが僕にはどうも。」

ローガンは立止つてビルネルの肩へ手を置いて言つた。

「君の關係してゐる所と、僕の關係してゐる所と此事件では同じでないよ。二人とも恐しい場面を通過しなければならぬ。即ち僕は死ぬ程愛してゐる女のために、君は無罪であるべき兄弟のために。

しかしそれかと言つて、二人が敵になつてこれまでの友情を破壊するには及ばんぢやないか。」

「それは僕も絶対に欲しないよ。」とビルネルは答へて彼の手を強く握つた。二人が親友である事は誰でも知つてゐるぢやないか。殊にこのスチーヴンスに對しては尙更力をあはせてかゝらなければならぬ。」

二人が客室へはひると、ザンデルゾンとスチーヴンスの談話がよく聞えた。

「それぢや、君はこの殺人事件の背後には、中々錯雜した深い陰謀があると云ふんですね。」と警部は言つた。「それは僕も反對しません。何しろ君はこの事件の前編を僕等よりもよく知つて居られるやうですからね。手傳つて下さる事は此上もない好都合です。」

二人はスチーヴンスの答を聞取る事が出来なかつた。

「宜しいとも。」とザンデルゾンはそれから言つた。何でも仰せの通りに計らひますよ。人数がいる

ならいくらでも言つて下さい。命令通りに動くやうに話して置きますから。僕はこれで歸りますが、グリーンマー君が此處に居ます。」

ローガンは此時ビルネルを客室の隅へ引張り込んだ。やがて警部は二人に氣付かすに出て行つた。

「よかつたよ。」とローガンは囁いた。これで大將一人きりになつたからね。賭をしてもいゝがすぐ正體をばらしてやるよ。僕がまさか本物のスチーヴンスを知つて居やうとは思ふまいからね。さあ、來給へ。」

殺人の行はれた部屋で、机の上にかがみこんで調べてゐたスチーヴンスは二人の蹙音を聞いて驚いて頭を上げた。暫くの間彼の顔に驚きの表情が浮んだが、やがて先刻刑事に逢つた時のやうなこゝろに變つた。

「これはこれは。」と彼は叫んでローガンの方へ走りよつた。「ローガンさんぢやありませんか。實にお珍らしいですね。此處でお目にかゝらうとは、こんな嬉しい事はありません。」かう言つて彼はローガンの手を強く握つた。

ローガンは餘りに驚いて、しばらくは物を言ふ事が出来なかつた。目の前に居るのは確かに本物のスチーヴンスであるからである。どんなに目をみはつて眺めても、寸分の違ひも發見する事が出来なかつたからである。顔ばかりでなく、聲も言葉も、身振さへもスチーヴンス其人に相違なかつた。どんな事があつても二人の人間がお互ひにこれ程よく似る事は出来ぬと思つた。

「ほんたうにあなたはスチーヴンスさんですか。」とローガンは心から驚いて尋ねた。「スチーヴンスさんは死なれたと思ひましたが。」

あまりに驚いたので、彼は言つちやならぬ事をうっかり言つてしまつた。

「死なれたですつて。」と相手は言つた。それでは噂が此國までも擴がつたんですね。噂の出たのは實はかういふ譯なんです。實は私が北氷洋の海岸地方へ航海をしましたので、其處で災難のために死んだと言ふ偽報が出たんです。つまり別の人と間違へたんですね。私はちやんとエスキモー人と一緒に居て、相も變らずビチ／＼して居ました。「かう言つて彼は如何にも落着いて語つたので、總ての疑を吹き飛ばしてしまつた。」

「しかし、僕は新聞で死亡廣告を見ましたし、リトソンさんからも手紙が來ましたよ。」とローガンは言つた。

「さうですとも。リトソンは少し早まつたんです。そしてもう自分が後繼者になつたかのやうに言ひ振らしてしまつたんです。しかし御承知かも知れませんが、私は奇を好む性質ですから、その中に爆弾のやうに現れて、再び私の事務所を占領しますよ。」

「けれど以前には色眼鏡をお掛けになつては居なかつたやうですが。」とローガンは反對した。

「さうです。これはエスキモー人の居る地方へ旅行してからかける事になつたんです。雪のために目をいためて、それからと言ふものは光線に堪へる事が出来なくなつたんです。」

この説明でローガンはすつかり疑を晴し、その旨をビルネルに目くばせで知らせた。

「一體どう言ふ御用でおいでになりましたか。」とローガンは尋ねた。

「ビルネルさんからお聞きだと思ひますが、ビルネルさんのお父さんの遺言執行に參つたんです。」

「それは財産に關係してあるのですか。」

「さうです莫大な財産に關係してゐます。」

「僕等が父から譲り受けたいと思ふ最も大切なものは名前ですが、父はどうもそれを呉れたく思はないやうです。」とビルネルは苦笑して言つた。

「それはしかしどうだか分りませんよ。遺言狀を開いて見なければ。」とスチーヴンスが言つた。

「貴方は遺言狀の事はかりでなくこの殺人事件にも、興味を持って居られるやうですね。」とローガンが尋ねた。

「勿論です。逮捕された人は或意味で私の依頼者になつてゐますからね。ですからビルネルさんに出るだけの盡力をしたと思ひました。」

「結構です。」とローガンは言つた。貴方はこの道で評判ですから、非常に好都合です。この事件は警察の人達の考へてある程簡單なものではありません。僕はこれを普通の窃盜殺人だとは決して思ひません。」

「私も貴方と同じ意見です。」とスチーヴンスは答へた。「刑事は先刻此處に誰か居たと言はれたが、

「それも何だかほんたうらしくありませんね。」

「而しそれは確です。僕もはつきり音を聞きましたもの。」とローガンは言った。

「不思議ですね。そしてその人がグリーンマーが客間にうっかり放り出しておいた鍵を、盗み取つたと
言ふんですか。」

「さうです。その人はこの部屋から出て行つて邪魔にはひられずに鍵を取り去つたに違ひないと思ひ
ます。もう御覽にもなつたでせうが、この扉も廊下の扉と同じやうに内側からは鍵なしで開ける事が
出来るんです。」

「して見るとその人はこの家のどの部屋も通らずに此處へ来たと言ふ事になりますね。」

「さうです。死體も昨晚同じやうな不思議な方法で消失しました。」

「警部が先刻此處へ来て扉を破らせて見たら、部屋はもう空っぽだつたさうです。」とスチーヴンス
は考へながら言つた。しかも何も盗まれたやうな形跡はありません。もつともまだ委しい検査はして
あませんけれど。「かう言つて彼は机の側へ行つて、黄灰色の小さい箱を持ち上げた。「これさへ此處
にあるぢやありませんか。」そしてビルネルの方を向いて彼は尋ねた。「分りますか。」

ビルネルは近付いてやがて叫んだ。

「これは僕のあの印度製の箱です。一體どうして此處へ来たでせう。」

「貴方のぢやありません。貴方の御兄弟宛の箱です。」とスチーヴンスは落着いて答へた。

「それが此處にあらうとは？」

「貴方の御兄弟が犯人かも知れぬといふ人殺しのあつたこの部屋にあるんですよ。これが單なる偶然
だと思へますか。」

第九章 四枚のクラブ

「さあ。」とビルネルは答へた。僕は兄弟がこの箱を持つて居たとは思ひませぬね。」

「無論そんな筈はありません。私は保証しますが、この箱は貴方の箱と共に同じ人がスウェーデンに
保管して居たんです。それは恰度今から五年前のことです。お父さんの手紙と私の手紙から御承知の
やうに、御兄弟の様子を知る事ができなかつたので、この箱は一時骨董商のグリーンテンスさんの所
へ預けられたのです。何故お父さんがさうなされたかと言ふ理由は、今一寸お話しすることができま
せん。」

「すると、この箱はその間ずっとグリーンテンスさんが持つて居たのですか。」

「さうです。グリーンテンスさんは使の者に受取證をお渡しになりました。」

「グリーンテンスさんは、この箱が誰の者になるかを知つて居られたでせうか。」

「それはお答へしますまい。然しそれはグリーンテンスさんに内證では無かつたやうです。」
「貴方は箱の中味を調べましたか。」

「調べました。」とスチーヴンスは答へて箱を開いた。貯金帳のあるべき上の部分には御覽の通り二本の綱鐵のペン先があるだけです。さつき此處に居た女中からグリューテンスさんがいつもこの箱を机の上に置いて居たと聞きました。多分、グリューテンスさんはこれをペン先入れにして居られたんでせう。」

「して見ると、グリューテンスさんは、この箱を大したものに思つて居られなかつたのですね。」とローガンが言った。「秘密の入れ場は調べて御覽になりましたか。」

「は、はあ、ビルネルさんはあなたに何もかも話したと見えますね。如何にも調べて見ました。全く豫想してゐない物が出て來たんです。」かう言つて、彼はそれを開いて、中から三枚のカードを取出した。それは三枚共手垢のついたクラブの一であつた。

「手紙は。」とビルネルは尋ねた。

「ありません。たゞこの三枚のカードだけでした。然しよくこのカードを調べて見ると中々面白いですよ。どれにも裏に二三行文句が書いてあります。これを讀めばすぐ順序立つた脅迫状である事が分ります。第一のにかう書いてあります。——貴様は一八九三年二月二十日のカルタ會を忘れたか。今初めてこの警告を與へるが、後悔しても、もう遅い。二枚目にはかう書いてあります。——これが二枚目のカルタだ。身體がふるはずには居れないだらう。用心せよ。それから三枚目にはかう書いてあります。——これが第三の警告だ。四枚目になつたら、愈々復仇するからさう思へ。どうしたとて罰

は免がれ得ないから用心しろ。」

刑事のグリーンマーが恰度其處へやつて來てこの最後の言葉を聞いて言つた。

「その四枚目のカルタは昨晚死體の傍の机の上に有りましたよ。而し裏には何も書いてありませんでした。」

「これでどうやら分つて來たやうですね。」とスチーヴンスが言つた。昨晚クラブの一を持った男が此處へ來て、グリューテンスさんに昔のカルタ會の復仇をしたのです。」

「クラブの一を持った男とは誰です。幽霊ですか。」とローガンが尋ねた。

「それは存じません。然しその幽霊は確に今逮捕されてる人ではありませんね。と言ふのは覺え違ひかも知れませんが、そのカルタ會があつたと言ふ年に、ビルネルさん達は生れなすつた筈ですから。」

「さうです。兄弟もその數ヶ月過ぎに生れて居ます。ですからズーネはその會には居る譯がないです。」とビルネルが説明した。

「それはどう言ふ箱ですか。誰が持つて來たんですか。」とグリーンマーは尋ねた。

「兎に角私たちがありません。」とスチーヴンスが答へた。私のはひつて來た時に、この机の上に有つたんです。その時はたゞ警部が一人此處に見えただけです。」

「昨晚調べた時はそんな箱はなかつたです。」とグリーンマーははつきり言つて一枚の紙をポケットから取り出した。僕は検査の際机の上にあるものはすつかり記しておきましたが、御覽の通り箱の事は

こゝには書いてありません。確かに僕は今初めてそれを見ました。」

「しかし女中はこれを見て直様、何時もこの机の上に置いてあつた、と言ひましたよ。」

「それは別の時でせう。昨夜も今朝も確かに無かつたのです。」と、グリーンマーはぶつきらぼうに言つた。

「それではこの箱が無くなつて、又持つて來られたといふんですか。」とスチーヴンスが尋ねた。さうすると、誰かがこの部屋へ來たと言ふ事になりますね。従つて、おき、になつた聲音は氣のせめばかりでも無いやうですね。」

「氣のせめぢやありません。確かに誰か居ました。」とローガンが言つた。

「さあ。」とスチーヴンスは肩をすくめて言つた。さうとすると、問題は愈々複雑になつて來ましたね。夜分姿を見せなかつた不思議な人間が、この箱を持つて來たとすると、検査は先づこの點からはじめなければなりません。」

かう言つて彼はローガンとビルネルに向つて客間に居るやうに告げ、刑事と共に今一度すべての事實を點檢した。それから彼はアンナと門番と、若し氣分がよければ、グリュエンス嬢も訊問しようとした。

逮捕されたズーネ・ビルネルに關して、警部の語つたところによると、初め彼は自分の無罪を言ひ張つて見たが、今はもうすっかり黙つてしまつて、何を聞いても返答せず、仕舞に紙とペンを貸して呉

れと申し出し、話すより書いた方がよいと言ひながら頻りに書きつゝあるのだと言ふのであつた。

ローガンとビルネルはその間に客室へ腰を下して巻煙草に火をつけた。

「それでは僕等も此處に居る事にしようか。」とビルネルが尋ねた。

「さうよ。スチーヴンス氏が訊問を終るまで去つてはいけない。それはさうとして、スチーヴンスは面白い男だね。」

「君はあの人を眞物のスチーヴンスだと思ふんだね。」

ローガンは肩をすくめて言つた。

「どうもね。確かにスチーヴンスだと思へる所もあるが、何だかさうでないやうな氣もするのだ。とにかくあの眼鏡が邪魔になるよ。眼鏡を取つてくれたら、眞物が偽物かすぐに分るが。」

「では眼鏡を取つてもらつたらどうか。」

「それはいかぬ。若し替玉だつたら僕等が欺かれてゐると思はせておかなくてはならぬ。初めに君に話した通りだ。さうすれば、その中に先方の心が分らうと言ふものだ。だから……」

恰度この時ロザリーが這入つて來たので、ローガンは口をつぐんだ。

「私、どうもちつとして居れませんわ。」と彼女は訴へるやうに言つた。「段々心配が増えて來ますもの。私故に父が死んだかと思ふと、たまらなくなつて來ます。」

「まあそんなに言はないで。」とローガンは彼女を慰めようとした。「今に訊問がはじまるんです。そ

んな事を仰しやつてはいけません。」

「いつそ何もかも話してしまつたらどんなに氣が楽になるかと思ひますわ。ほんたうに私さうするつもりですわ。さうしなければならんと思ふのですもの。」かう言つて彼女はがっかりして椅子に腰を下した。

ローガンはあくまでそれに反対したけれど、彼女がどうしても聞き入れないので、止むなく緑の部屋を叩いて、二人にグリーンユーテンス嬢が訊問を受けに来た旨を告げた。

二人は直ちにやつて来た。スチーヴンスは手帳を手に持つて居たが、扉の所に立つて二三行書き加へた。

「妙だ。實に妙だ。」と彼は呟いた。

彼が合圖をみると、グリーンマートは令嬢に向つて訊問を初めた。

「貴女は昨晚十二時にお歸りになつたのですね。」と彼は尋ねた。

「はあ。」と彼女は小聲で答へた。

「お友達とオペラへ行かれたんですね。」

「いゝえ。」とロザリーは深く顔を根らめて言つた。「それは間違ひです。昨晚私は病人や貧しい人を訪ねに行きました。」

「それはをかしい。」とグリーンマーは眉を高く上げて言つた。「女中は貴女がオペラへ行くと話された

と言つてゐたし、貴女も警部にさう言はれたではありませんか。」

「死なれたグリーンユーテンスさんは一寸變つた所の有る人でして。」とローガンは口を出した。「令嬢が貧民を訪ねられる事を嫌つて居られたのです。だから昨晚オペラへ行くと行つて出られたのです。宵の口令嬢は僕と一緒に居ました。」

そこでロザリーは二人が九時頃に家の前で別れるまで、何處に居たかを告げ、それから或家の家根部屋に一人で住んでゐた昔の女中を訪ねた事、その女中が昨夜突然死んでしまつた事を語つた。

スチーヴンスとグリーンマーとは意味ありげな目付をして見合つた。

「疑ひになりますか。」とロザリーは當惑顔に言つた。

「ふむ。」とスチーヴンスは言つた。「實は餘りに意外な事ですから、一寸考へたのです。」

刑事はポケットから絹紙を取り出して、其中からダイヤモンドを纏めた小さな金のハートを取出した。

「これは貴女のですか。」と彼は尋ねた。

「はあ。」とロザリーは息をはずませて言つた。「何處でお拾ひになりましたか。それは腕輪について居つたものでございます。今晚家へ歸りました時になくなつてゐるのを見つけたのでございます。」

「これは逮捕した男のチョッキのポケットにあつたのです。」とグリーンマーは言つた。「そして彼はこれを貴女からもらつたと言ひました。」

ロザリーはその小さな手を固く組み合して叫んだ。

「まあ。どうしませう。どうしてそんな作り事が言へるのでせう。」

「けれど。」とスチーヴンスは輕蔑するやうな態度で言った。「貴女がオペラへ行つたと仰有つたやうに彼も諛を言ふのにはそれだけの理由があるのでせう。只無暗に諛を言ふものはありませんからね。」

ロザリーはますます顔を赧くした。

「まあこの質問はあとまはしにしませう。」とスチーヴンスは手短かに言った。「それで貴女が昨晚經驗なすつた事をお話し下さい。」

ロザリーは總ての事を簡單明瞭に物語つた。

「お父さんが恰度殺されなされる時に書いて居られた手紙から見ると、被告は前々から脅迫して居つたらしいですね。それについて貴女は何か御承知ありませんか。」

「恰度三ヶ月程前に父が或手紙を受取りまして大變落着かなかつたやうでございます。私はそれを讀みませんでしたけれど、中にカードが一枚はひつて居りました。そして父は平和に暮したいものだ、と呟きました。色々その時尋ねましたが、どうしても事情を話して呉れませんでした。」

「そのカードはどんなのだつたか覚えていらつしやいますか。」

「いゝえ。けれど裏が赤かつたやうに思ひます。」

スチーヴンスは印度製の箱から取出した三枚のクラブの中の一冊はじめに來たのを彼女に示した。「これぢやないですか。」と彼は尋ねた。

「さうですね。どうもこれらしいです。やはり裏側に何か書いてあつたやうですから。」

「それからお父さんを苦しめるやうな事でもありませんか。」

「恰度その一月ばかり後に又手紙を受取りまして大變驚いたやうでございました。アンナがそれを持つて行きましたが、その話によりますと、カナダの切手がはつてモントリオールに消印がしてあつたと言ふ事です。」

「さうらざらんない。」とスチーヴンスはローガンの方を向いて言った。「ローガンさん分りましたか。段々この事件の中心に近寄つて來ましたよ。」かう言つて彼は再びロザリーの方を向いて尋ねた。

「その封筒の中に何がはひつて居りましたか。」

「存じません。父はその場で封を切らないで、いつも靜かに考へたい時にやるやうに、緑の部屋へそれをもつて行つてとちこもりましたから。」

「それからこの手紙と關係があるとお思ひになるやうな事はありませんでしたか。」

「有りました。恰度一週間ばかり前でしたが。私達が朝食を終つた所へ郵便が參りましたので、父は自分で立つてそれを取つて來ました。私が部屋の隅に居るのを氣がつかずにその中からクラブの一を取出しました。そしてその裏を一目見るなり、『愈々危険が迫つた。』と叫びました。そして餘りに驚いたためか、手をふるはせてそのカードを下に落しました。そこで私が、急に立ち上つて走り寄つてひろひますと、父は驚いて奪つて行きましたが、その時私は、『もう復仇するぞ。刑罰は避けられぬ』

ぞ。」と言ふ文字を讀みました。」

「其通りです。」とスチーヴンスは言つて、彼女に三枚のカードを渡した。「二度目の手紙にも矢張りこの通りクラブの二がはひつて居ました。」

「父の側の机の上にクラブの二が一枚あつたと何方が仰有つてゐましたか、この中の一枚がそれですか。」とロザリーは言つた。

「いゝえ。それは四枚目のカードです。此處へ来た時に持つて来たんです。」

「殺した男がですか。まあ。」と彼女は小聲で言つた。「初め三枚送つて驚かして置いて、それから到頭最後の事をしたので御座いますか。何と言ふ恐しい事です。」

「お父さんは三枚目を受取られてから、どんな御様子でしたか。」

「段々氣をくさらせて行つたやうですが、むりに氣を引き立て、居ました。」

「お父さんには敵がありましたか。」

「そんなやうには思ひませんでした。」

「これまでお父さんはビルンと言ふ名を仰有つた事はありませんか。」

「申しました。昨日初めてです。二三年前からビルンと言ふ姓の若い男の方を父は大變骨折つて探して居りました。名の方は忘れましたが、警察にまで頼みましたけれど矢張り分りませんでした。」

「どうか正直に仰有つて下さい。」とスチーヴンスは突込むやうに言つた。「貴女はお父さんが何か秘

密を持つておゐでになつて、過去のことをかくさうとして居られるのではないかとお思ひになりませんか。」

「思ひます。」と彼女は小聲で言つた。父はなくなる時までたうとう私に秘密を言つてくれませんでした。考へれば考へる程、父は過去に持つて居るばかりでなく現在にも秘密を持つて居る事が分りました。私ばかりでなくこの世の中の總ての人に匿したいと思つて居たやうです。私にはその秘密が、線の部屋にあるやうに思はれてなりません。父は度々あそこにもりましたがその間は決して誰もはひつてはなりません。幾時間も続け様にそこに居る事がありました。又、留守中はどんな事があつてもはひる事はなりません。女中の掃除さへさせませんでした。そして何時も扉に鍵が下りて居りました。」

「少し立ち入つた質問をして甚だ失禮ですが、女の方と言ふものは生れつき好奇心が多いものですか、貴女も何か線の部屋でお探しになつて見た事はありませんか。」とスチーヴンスが尋ねた。

「もう私も十七です。鍵孔からのぞいたり、そんなやうな事をする時代は過ぎました。」とロザリーは圓滑に答へた。

「私のお尋ねするのは最近の事ではありません。もつと以前の事をお尋ねするのです。」

「正直に申しますれば、あの線の部屋は大變私の想像力をそゝりました。殊に母が死んだ當座は尙更の事でした。私は恰度その時十四になりましたが、父はよく晝寝しまして、部屋に錠を下すのを忘れ

る事がありました。其時内緒で見にはひりましたが、別にこれと言ふ特別のものを見付ける事はできませんでした。けれど、確かに何處かに秘密の部屋があるに違ひないと思ひました。と言ふのは、一度こんな事がありましたからです。ある日父が例の如くとちこもりました時に私はこの客室に居りまして、扉のすぐ傍の椅子に腰掛けて本を讀んで居りました。所がその本の中に一寸むづかしい文章がありましたから、父に聞かうと思つてはひつて行きますと、驚いた事に部屋の中は空でした。

「それは貴女の氣のつかぬ中に出て行かれたのではないのですか。」

「そんな事はございませぬ。私の腰掛けてゐた傍の入口は一つしかありませんもの。私は大變心配になりました。女中を呼びますと、女中も今貴女が仰有つたやうな事を申しました。そこで私が客間へ歸つて來ますと、緑の部屋から父の聲が聞えまして、誰だ戸を開けつばなしにして置くのは？ と叱りました。そこで私は戸を開けたのは私です、と言つて、お父さんは何處へ行つていらつしやいましたか、と尋ねました。すると父はずつと部屋に居たんだよ。抽斗にひつかつた鍵を取るために机の下へはひつて居たからそれで居ないやうに思つたのだらうと申しました。

この見え透いた謠に私はあきれて物が言へませんでした。机の周りをまはつて見ましたから、父が其處に居なかつた事は全く確かでした。それに何度も父を呼んで見ましたが返事がありませんでしたもの。」

「それは大切な手掛りです。」とスチーヴンスは言つて、手帳に何か書き込んだ。「それ以後貴女はお

父さんとその事について何かお話しになりませんでしたか。」

「はあ。それからと言ふもの、長い間父に向つて臆病になりました、父を信用できなくなりました。何だかその話をするに恐しいやうな氣がしました。」

「貴女がお父さんをお探しになつた時、どんな風にお歩きになつたか、も一度やつていたゞけませんでせうか。」

そこで人々は殺人の現場である緑の部屋へはひつた。見ると特別にこれと言ふ變つた様子も無かつた。入口から中へはひると、庭に面した二つの窓が正面にあつて、その窓の間に舊式の金庫が置いてあつて、その兩側には古風な物置箆があつて、その中には陶器や、塑像や、古びた飾り物等が並べてあつた。左側の壁の眞中處に書類を入れる大きな箆があつたが、その兩脇に本立があつて、高價な表装をした古書籍が立てられてあつた。その外、壁に沿つて、印度風の喫煙テーブルを持つたトルコ長椅子と二三の新式の革椅子があつた。

大きな机は部屋の中央に金庫の前に置かれてあつて、机の前に腰かけると恰度扉に背中を向ける事になつた。扉の左にあたる隅に煉瓦製のストーブがあつたが、それは妙な形をした古風なもので、低い廣い火をもやす所と、廣い地床とがついてゐた。そのストーブと本箱との間に臺があつて古い日本の甲冑が置かれてあつた。扉の右に當る隅には鏡臺があつてその前に椅子が置かれてあつた。窓掛も毛氈も皆美しい緑色の物で作られてあつた爲にこの部屋が緑の部屋と名付けられた譯である。

ロザリーは背に水を浴びせられたやうに思つて、入口に立ち止つた。

「お父さんの死骸がなくなつたと言ふのはほんたうですか。」と彼女は吃りながら言つた。

「さうです。どうしてなくなつたかはまだ分りません。」とグリーンマーが答へた。

「先刻私はこの部屋をよく調べましたが、生きた人も死んだ人もかくれられるやうな處は何處にも見付かりませんでした。」とスチーヴンスは言つた。

「それだのにその暫く前に同じやうな不思議な事が起りましたよ。」とグリーンマーが口を出した。「客室の机の上から鍵を取つて行つて、この部屋に入り、それから又出て行つた人間があるんです。」

スチーヴンスは一方の窓の側に歩みよつて庭を眺め下した。

「如何にも不思議ですね。」と彼は言つた。「下には警官が立ちづめで庭を番してゐたし、君も警部の來るまで扉の外に居たんだからね。」

「さうです。しかも扉を破つて中へはひつて見ると、影も形もありませんでした。」

「無論それでは誰も知らない祕密の抜道があるに違ひない。」とスチーヴンスは言つた。「だから一度よくしらべて見ませう。それより外に説明のしやうがないんだから。どうもそれにちがひない。」

「しかしその人は何しに此處へ來たのでせうか。」令嬢は尋ねた。

「その印度製の箱を返しに來たとも思はれますが、しかしさうでもないでせう。きつと何か大切な物を片づけに來たのでせう。お嬢さん恐れ入りますが、何か部屋のものでなくなつてゐはしないかよく見

てくださいますせんか。」

ロザリーは物置箆や書架を調べにかゝつたが、突然手を止めて言つた。

「此處に石膏の頭が二つありました。それはオーギュスト・ロダンの試作で、バルザックとユーゴーの塑像の一部分でした。それがなくなつて居ります。」

「それは高價な物でございませうか。」

「よく存じません。父は恰度一年半ばかり前にモントリオールに居る父の弟のルドウィッヒからそれをもらひました。其時一緒に小さな鐵の手提金庫も送つて來ましたが、確かそれは銀行の金庫にあつた筈でございませう。」

「その手提金庫も取られましたよ。」とスチーヴンスは簡單に言つた。「窃盜は或一定の方法で行はれたらしいです。」

「その石膏の頭は昨夜調べた時には此處にありましたよ。」とグリーンマーは目錄を眺めて言つた。「この目錄は死體がなくなつた事を見付けて直ぐ作りましたが、箱もなくなつてゐますね。しかし頭はたしかにその位置に有りました。しかし今はなくなつてゐます。して見ると、誰か目に見えぬ男が警察の目の前で勝手な道具替へをしてゐるらしい。實にどうもけしからんですね。」

「何故そんなら昨晚持つて行かなかつたでせうか。」とローガンは尋ねた。

「先づ事件が起つた順序をよく考へて見ませう。」とスチーヴンスは言つた。「昨晚グリーンマーテン

んの死骸とビルネルさん兄弟に取つて大切な箱とがなくなりました。その時にはズーネ・ビルンさん宛の暗號の手紙と鍵の半分だけはまだ箱の秘密箱に確かにあつただらうと思ひます。それから今朝グリューテンスさんの銀行の金庫が巧妙な方法で開けられ盗まれました。それが終つて初めてその人間は警察の目をくらまして、も一度この部屋へはひつて来て箱を返しました。箱の中には唯三枚のクラブの一角があるばかりでした。そしてその代りあまり高價なものでもない二個の石膏像を持つて行きました。

この關係がよくお分りになりますか。ローガンさん、貴方は噂によると探偵能力を豊富に持つて居られるさうですが、以上の事實からどう言ふ結論を下されますか。

「さうですね。」とローガンは言つた。「加害者、或は正しく言へばその共犯者達は何を望んでゐたのか、まだ昨晩は自分ながら正しくは知らなかつたでせう。そして銀行の金庫の中の品物をしらべてから始めてそれが分つたに違ひありません。」

「恐れ入りました。如何にもお説は急所にふれて居ります。それより外説明できません。しかしながら、この家は嚴重に見はられてゐて誰も出入した人がないと言ふ事ですから、此處に二つの可能性が考へられます。此處へやつて来た人間は警察官にも門番にもよく知られてゐて自由に出入りする事のできる人間であるか、或はその人間はまだこの家にあるか、この二つです。」

「未だ家に居ますつて。」とローガンは叫んだ。「ではこれから探しに掛からうではありませんか。」

「まあ、まあ、そんなに急ぐには及びません。」とスチーヴンスは言つた。「先刻グリーンマー君が一層見張りを嚴重にするやうに言ひましたから、誰も抜け出す事は出来ません、先づ是を御覽なさい。一かう言つて彼は石膏の頭が置かれてあつた臺を指差して言葉を續けた。「この上にもこの前の床の上にも御覽の通り石膏らしい粉がこぼれてゐます。盗賊がこれを持去つた時に落したと思はれます。ですから餘程急いでゐたに違ひありません。」

「それは違ひますよ。」とグリーンマーが言つた。「その粉は昨夜も此處にあつたのです。この外にも小さな石膏の破片がありましたから僕はそれを小さな灰皿に入れて置きました。これがそれです。」

「妙ですね。」と石膏の破片をしらべたスチーヴンスは頭を振りながら言つた。「すると盗まれた石膏の頭は昨晩も荒い取扱ひを受けた譯ですね。恐らく殺人と關係があるのでせう。然しそれが今日になつて持ち去られたのは可笑しいですね。バルザックとユーゴの頭がこの悲劇とどう言ふ關係があるのでせうか。どう言ふ秘密を持つてゐるのでせうか。果してそれがこの事件の謎を解く鍵を持つてゐるでせうか。」

第十章 ローガンの結論

「さてお嬢さん。又貴女を苦しめますかも知れませんが、二三承りたい事がございます。お父さんは昨日何處からか手紙をお受取りになつたか、又は貴女のお出懸けの前にお客の訪問を受けられたや

うな事はありませんか。」

「そんな事は無いやうでした。もつとも私は、午後、用があつて出ましたが、それが恰度郵便の来る時分でした。アンナに聞けば分ると思ひます。」

「女中はもう長い事お宅に居りますか。」

「秋からでございます。」

「貴女がお出懸けになる頃はもう気分が悪いと言つて居りましたか。」

「いゝえ、私にはさう申しませんでした。」

「此處にお父さんの鍵束がありますか、數は皆揃つてあるでせうか。」

「この部屋の鍵がございませぬ。」とロザリーは鍵束を調べてから言つた。

「それは僕達が抜きましたよ。さつき盗まれたのがその鍵ですよ。」とグリーンマーが言つた。

「それにもう一つエンスキルダ銀行の父の金庫の鍵が失くなつて居ります。」とロザリーは言葉を續けた。「一月ばかり前に父はそれを私に見せてくれました。金庫の番號は二四三で萬一の事があつても、お前より他誰にも開けさせてはならぬと申しました。その合鍵はこの金庫の中にございませぬ。」

「金庫の中には鍵はありませんでしたよ。だからきつと盗まれたんです。」とグリーンマーが言つた。

「無論さうですとも。二人の人間が開けに来たんですから鍵は二つとも盗まれたんです。」とローガンは言つた。「けれど盗まれたのは同じ時でなくてはなくて、別々なんでせう。そして盗人はお互ひにそれ

を知らなかつたに違ひありません。」

「さうかも知れませんが、その考はあまり深入り過ぎてあるやうですね。」とスチーヴンスは皮肉な言ひ方をしながらロザリーに向つて更に言葉を續けた。「貴女はお父さんの殺されなすつたのを見て、すぐ氣絶なされたさうですが、して見ると、御覽になつたのはほんの僅かの間ですね。」

「はあ。足の立たぬ程驚いてしまひました。」

「確かに殺されてゐたのはお父さんでしたか。」

「はあ、確かに。」と彼女は身を慄はせて言つた。

「お顔を御覽になりましたか。」

「いゝえ、頭は机の端にうつむきになつて居りました。」

「ではどうしてお父さんと分りましたか。かう言ふ事をお尋ねするのは大變心苦しいですけど、どうしてもそれを伺つて置く必要があるのです。」

「色々な點で父だと分りました。先づいつもの寢衣を着て居りましたし、白髪交りの頭と首すぢの形、タイプライターにのつてゐた手など、それに共済組合員の指輪、赤い傷痕などよく眼に這入りました。」

「どんな傷痕ですか。」

「右手の甲にある火傷の跡です。」

「恐れ入りますが、一寸廊下まで来て戴けませんか。」かう言つて人々はグリーンマーだけに番をさせて置いて廊下に出た。

「お父さんの帽子の下にかゝつてあるこの外套を御覧下さい。見覚えがありますか。」と彼は尋ねた。「いゝえ。」とロザリーは外套を裏返へして見てから答へた。一度も見た事がございません。裏にL・Bと頭文字が書いてございますがどなたのか存じません。警察の方でお忘れになつたのではございせんか。」

「お父さんの外套は何處にございますか。」

「何日も此處にかゝつて居る筈でございます。昨日の午前に来まして、それから誰も持つて行つた筈はございません。父が何處かで間違へて来たのかも知れませんが、それならば私達も氣が着く筈でございます。」

「どうかしてこの取りかへられた理由の分るやうにしたいものです。」かう言つてスチーヴンスは人と共に再び緑の部屋へ歸つて来た。「又別のお尋ねをしますが、さつき貴女はお父さんに兄弟がおりますのやうに仰しやいましたね。」

「はあ、ルドウィック叔父の事を申しました。けれど私は一度も見た事はございませんでした。カナダに居りましたさうですが、一年程前になくなつたと聞きました。」

「さうですか。それを御承知ですか。お父さんはその通知をお受取りになりましたか。」

「はあ確かスチーヴンスと言ふ辯護士事務所から通知が来たと思ひます。」

「如何にもその通りです。私の事務所からその通知を出しました。叔父さんは溺死されたのです。叔父さんは商賣、いや、正しく言へば家主をして居られました。御夫婦の間にお子さんはありませんでしたが、妙な事をする御老人でした。」

「その通りです。」とローガンも口を出した。僕も時々會つた事がありましたが、奥さんも矢張り變つた方でしたね。」

「さうですよ。決して外出もなさらなければ、お客さんを招待された事ありませんでした。その後どうなさいましたか知つてあるものは餘りありません。夫婦中も餘りいゝやうではなくて、何でも叔父さんは別れたいやうでしたが、奥さんがどうしても聞かれないやうだつたのです。ですからボートが河で覆つて溺死なされた時も自殺だらうと言ふ評判が専らでした。殊に生前富豪だとはかり思はれてゐた人が、死後調べて見ると鏝一文も後に残してなかつた事が分つて、ますます自殺説が有力になりました。」

「ビルネル君。」とローガンは、この時力をこめて言つた。君のお父さんのなくなつたのは何日だつたかね。」

「一年前さ。それはスチーヴンスさんの方がよく御承知だよ。」
スチーヴンスはうなづいた儘何事も言はなかつた。

そこでローガンは尋ねた。骨董商のグリューテンスさんがズーネ君宛の箱をビルネル君の知らないお父さんから受け取つたと言ふ事は、ずる分妙な事ではありませんか。それにこのクラブの一件もさうです。二人の雙生兒兄弟がクラブの一の形をした印を腕に持つてゐる事も偶然の事ではないでせう。」

「そんなに一時にお尋ねになつては困りますが、ズーネ・ビルンは御承知の通り浮浪生活を送つてゐたんですから、探す事が出来なかつたんです。さもないければ無論その箱をもらつたでせう。」

「さうかも知れませんが。しかし何故その箱をグリューテンスさんに送つて来たのでせう。ビルネル君に両方送つてよこして、兄弟の在所が分るまで保存しておくやうにしておけばよかつたぢやありませんか。」

「貴方は暗號の手紙の事を忘れておゐでになります。ビルネルさんが二つとも受取れば暗號を解いてしまはれるから、お父さんは多分それを欲しなかつたのでせう。」

「多分などと仰有つては困ります。」とビルネルは興奮して口を出した。貴方は父の意見をよく御承知ではありませんか。父の全信賴を受けて居られるではありませんか。」

「總ての點に信賴を受けて居ると言ふ譯ではありません。御令息二人に關する秘密は貴方同様にも知れて居ないのでございます。」

「貴方は口で仰有る以上の事を御承知だらうと思ひます。」とアッサールは言つた。

「お父さんが生前仰有つた事がありますから、それに従はねばなりません。」とスチーヴンスは肩をすくめて答へた。

「まあその話は後廻しにしようではありませんか。」とローガンはさへぎつて言つた。それで僕がさつき言ひかけた質問を考へて見ようではありませんか。骨董商の御兄弟が一年前にモントリオールでなくなつた、ビルネル君のまだ顔を見た事のないお父さんも同時に同所でなくなつたと言ふ事であるし、しかも骨董商はビルネル君の父から信用されて大切なものはひつてゐる印度製の箱を預つたのであるから、この二人は餘程親密な中であつたに違ひありません。ロザリーさん、お父さんは叔父さんの外にもう一人モントリオールに知合を持つて居られませんでしたか。」

「一度も聞いた事はございません。」

「して見るとどうです。ビルネル君のお父さんとグリューテンスさんの御兄弟とが同一人であると考えては。」

「何だつて。」とビルネルは驚いて尋ねた。

「さうすれば萬事説明がつくぢやありませんか。」とローガンは言葉を續けた。即ちグリューテンスさんの家の第二の箱のある事もよく分るし、ズーネ・ビルンが加害者の嫌疑を受けてゐる事も分るではないか。」

「さうです。さうです。」とグリーンマーは言葉を強めて言つた。あの嫌疑者が被害者の甥だとすれば

殺人の動機も容易に分ります。」

「とまをしますと、どう言ふ動機でございませうか。私には一向わかりませんが。」と、ロザリーが尋ねた。

「つまり、ビルンは骨董商即ち叔父さんが大切な箱を持つてゐる事を聞き出して、それが大變な遺産であると思つて取りに来たんです。豫め脅迫状を出しておいて到頭殺すに到つたのです。」

「さうかも知れませんが。」とローガンは言つた。グリューテンスさんはビルンが果して本物かどうかを知る事が出来なかつたために箱を渡すのを拒まれたのでせう。その結果殺人が起つたのかもしれない。

「しかしどうしてズーネはグリューテンスさんとの親族關係を知つたのでせうか。」とグリーンマーは尋ねた。「ズーネはお嬢さんに此處へ連れて来てもらつたんだと言つてゐるんですからね。」

「それだけはどうぞもう、お話しなさらぬやうに。」とロザリーは言つた。「私と顔を合せても果してそれを言ふだけの勇氣がございますかしら。」

「會つて御覽になるのが成程一番、ですよ。」とスチーヴンスは言つた。

グリーンマーは電話で警部にスチーヴンスの意見を告げ、ローガンとビルネルはスチーヴンスとロザリーが警察へ行つて歸つて来るまで留まる事にした。

グリーンマーが電話で知らせた時は恰度ビルンの訊問が再び始められてゐた時であつた。局長が自ら

訊問してゐたが、それを打切らないで不意にロザリーと突き合はせてビルンを驚かさうと思つた。

ビルンは相も變らず、何ときかれても黙つてゐて飽まで私ではありませんと言ふだけであつた。そしてぼんやり地面をながめて、まるで腑の抜けたやうな風をしてゐた。

所が突然若い女が這入つて來たのを見て、彼の態度はがらりと變つた。彼は急に晴れやかな顔をして、ロザリーの方へ歩み寄つて、吃り勝ちに言つた。

「ロザリーさんですか。到頭來て呉れ……」かう言つて彼は急に黙つて、突然驚いた顔付をして尋ねた。「貴女は確かにグリューテンスさんのお嬢さんでせう。」

「さうです。ロザリー・グリューテンスでございます。」と彼女は冷靜に答へた。「貴方に殺された人の娘でございます。かうして面と向いても尙貴女は私に會つたと仰有いますか。」

「確かに昨晚お目にか、つたぢやありませんか。私を連れて來て下さつたのは貴女です。それでもさうぢやないと仰有るのですか。」

「さうぢやありませんよ。よく私を見て下さい。」と彼女は彼をさへぎつて言つた。ロザリーは帽子を取つて、房々した銅色の髪を揺りながら、ビルンの傍に歩み寄つて行つた。

「よく見て下さい。私に間違ひありませんか。」

彼女は徐々に身體を廻轉して四方から眺めさせた。

「これや不思議です。」と彼は吃つて言つた。髪のももそれから鼻も目も同じですが、口が違ひます。

それから聲が違ひます。何だか分らんやうになつてしまつた。」かう言つて彼は不安げな顔をした。

「では君は昨晚この方と話したと言ふ事を、斷言出來ぬのだね。」
彼は當惑して答へた。「初め一寸見た時は此方に違ひないと思ひましたが、お聲を聞いたら……」

「違ふと言ふのかい。」
「何だか分らなくなりました。まるで狐に化されたやうです。」かう言つて彼は両手で頭を抱へて、ガリガリと搔いた。すると突然何事か思ひ付いたと見えて、
「どうぞ手を見せて下さい。」とロザリーに言つた。

ロザリーは両手を差し出した。

「昨晚金製のハートを頂いた時に、お手を接吻しました。」と呟いて、彼は身をかゝめてよくその手を見た。違ひます。この手ぢやありません。小指の爪が、外のとちがつて折れて居ました。貴女のは長くて美しく切つてあります。」それから彼は彼女の目を眺めて言つた。違ひます。貴方ぢやありません。では矢張り君は何處までも女の人に會つたと言ふんだね。」と局長は尋ねた。「よく考へて見給へ。もう誰もそんな話を信用する者はないよ。」

如何にも絶望して、ビルンは頸をぐつたりと垂れた。私の申し上げる事に偽りはありません。」と彼は力の無い聲を出して言つた。

「君は何の爲にいつまでも強情を張るのだ。かうなつたらどんな事があつても逃れられないよ。それよりも早く白狀して、心の重荷を下したらどうだ。」

ビルンは答へなかつた。

「何故君は黙つてゐるんだ。何故何時までも無罪をよそほふのだ。此方では君が加害者だと言ふ間違の無い證據を上げてゐるんだ。しかも君は現場で捕へられたではないか。君の良心は君に白狀をしると命じてゐるだらう。だから潔く良心の命に従つて、萬事を語りたまへ。」

ビルンは頭を振つて黙つた。

「何處までも言ひ張るのか。どうしても白狀しないのか。」

「しません。たとへ死んでも白狀しません。」と齒を食ひしばつて言つた。彼の言葉には犯すべからざる威嚴があつた。

「彼方へ連れて行つて呉れたまへ。」と局長は手短かに言つた。「それから被告の書いた紙を持つて来て呉れ給へ。何を書いたか見たいから。」

第十一章 ビルンの履歴

スチーヴンスはビルンとロザリーとの對面の際とりかはされた、一語一語を耳をそばだて、聞いて居たが、その時ロザリーに向つて言つた。

「大變い、都合でした。私はこんな事にはなるまいと思つて居ましたが、人違ひの事をはつきりと言つたのには驚きましたよ。このズーネ・ビルンと言ふ男はずるぶん變つてゐますね。あんなに何處までも、連れられて行つたのだと言ふ所を見ますと、貴女ではなくて替玉でせう。」

「しかしそれはどうも眞實とは思へないではありませんか。」とロザリーは言つた。

「さうです。ですからあのやうに殆ど判決を下されたと同じ破目に陥つてしまつたのです。」

局長はグリーンテンス嬢に禮を言つて、彼女を歸らせた。しかしステーキズはビルンが未決監で書いた報告を聞くために残つた。ビルンは訊問がすんでから、尙二三それに書加へたのである。それには次のやうに書かれてあつた……

私は此世のどん底に落ちこんだ人間です。私は生れてから、喜びと言ふものにあつた事がなく、心配と幻滅にばかり苦しみました。しかし、私の経験した最も大きな不幸は、今回の殺人の嫌疑を受け監禁された事です。實にこれはもつての外事です。嘗て泥酔のため、又嘗て饑にかられて食物を盗み取つた爲に監獄にはひつた事があるので、私が殺人ぐらゐはやりかねないと皆様は思つてゐるやうです。

けれどそれは全然間違ひです。どんな事があつても私は老人を殺してその金を奪ふやうな大それた事の出来る人間ではありません。しかも老骨董商は尊敬すべき紳士であつたと言ふ事ですから、そんな人に對してどうして私が恐ろしい事を行ふ事ができませう。金錢を奪ふために殺すなどと言ふ事は、

誤解にも程があります。私は飽まで犯人が私でないと言ふ事を叫びます。

ところが、誰一人私の言ふ事を聞いてくれません。誰も私の言ふ事を信じてくれません。かうして私が、止むを得ずして書いた告白も恐らく人々は肩をすくめて讀み、救はれる道のない犯罪者が絶望的に書いた謔であると思ふでせう。

然し私は眞實を書くのです。若し私が氣違ひでなく、若し私の経験した事が夢でないならば動かすことのできない眞實であります。しかも私の氣は狂つてはあません。外の人々と同じやうに氣は確かです。昨晚私の経験した事は非常にはつきり記憶に残つてゐて、ほんの小さな事もよく書き下す事が出来ます。

けれど私の経験した不思議な事情をどうしたならば探偵や判事に信じてもらふ事ができませうか。私は私の言葉を保證する何の手段もありません。しかも私に對して集められた證據はあだかも死人が殺したのはこの男ですと言つたかのやうな筋立つたものです。

だが、たとひ死人が口きく事が出来ても、さうは言ひますまい。若し死人があんなに不思議な姿を匿さなくつてこの場に居て口をきく事ができたら、恐らくこの男は知りません。見た事ありませんと言ふに違ひありません。昨夜私は何の目的もなく無暗に町を歩き廻つてゐました。何日もの通りに腹が減つて、ポケットには一文の金もありませんでした。着物がすり破れてびら／＼してゐたから、恐らく人々に餘り好感を興へるやうな風をしてゐなかつたでせう。その爲ずるぶん骨を折つて見まし

たが、二十五歳と言ふ若盛りのびちくした身體を持ちながら、誰一人仕事を與へて呉れる者はありませんでした。これでは一層の事、河へでも身投げしようかと思つて、ふと振り返つて見ると誰か私をつけてくる様子でした。恰度その時何處かの時計が九時を打ちました。その時私は人通りの少い場末の、確かノルバッカ街に居たと思ひます。私は恥しいやうな氣がして、後をつけて來たのが誰かしらと思つて振り向きしました。見るとそれは立派な服装をした婦人でありましたから、立ち止つて物乞ひをしました。すると驚いた事に婦人は立止りながら、私が帽子を取らぬ先に話しかけました。「矢張り間違つてゐなかつたわね。確かお前さんだ。長年の間探して、到頭探しあてたのよ。これで恩返しが出来て安心したわ。」

私はあまりに驚いて物を言ふ事が出来ませんでした。一體どうしたと言ふ事だらう。婦人は私に以前逢つた事があるらしいけれどそれは間違ひである。そこで私はその事を婦人に言はうと思つたが、ふと、助けてもらへるかも知れんと思つて、黙つてあました。

「もうすっかり忘れたやうなのね。」と婦人は力をこめて言ひました。「私の命を助けて呉れた事さへ忘れるなんてどうしたんでせう。」
私はそんな事をした覚えがないので、面喰つて口の中で何やら呟きました。

「分らないの。」とその人は言ひました。「私の命なんかどうでもいゝんですか。でも貴方は自分の命をすて、水の中へ跳込んで助けて下さつたではないの。あの時お禮をすると約束したでせう。今到頭

その時機が來たんです。」

私は生涯猫一匹助けた事はありませんでした。それだのにあんなに言はれるのはをかしいと思ひましたが、疲れ果てた上に腹が減つてたまらなかつたので、黙つてついて行けば飯も充分食べさせてもらへるだらうし、お金も多少はもらへるかもしれないと思つて何も言ひませんでした。さうして人違ひされた此身の幸福をひそかに喜びました。しかしその時餘程私が妙な顔をしたと見えて、婦人は私の顔をいやと言ふ程眺めました。

「本當にお忘れになつたのです。では私がその證據をあげませうか。貴方があの時外套をぬいで腕まくりをして跳込んで來て下さつたから私は貴方の右の腕に赤い印のあるのを見ましたよ。それは何でもクラブの一の形でした。」

「違ひます。右腕ぢやありません。左腕です。」

「なんですつて。間違へる筈はありませんよ。」彼女が妙な顔をしたので、私は左の袖を高く捲つて、餘り美しくない腕を見せました。

すると彼女は餘りよく見もしないで、靜かにうなづいて私の身體を調べました。

「随分苦勞なすつたやうですね。此處でお目にかゝつて御恩返しの出來るのはちやうど好都合であるかも知れません。とにかく私の家まで來て下さい。」

私が何とも返事しない中に、彼女は通りかゝつたタキシールを呼びました。私はその自動車が街角を